

図86 弥生時代中期遺構出土遺物2

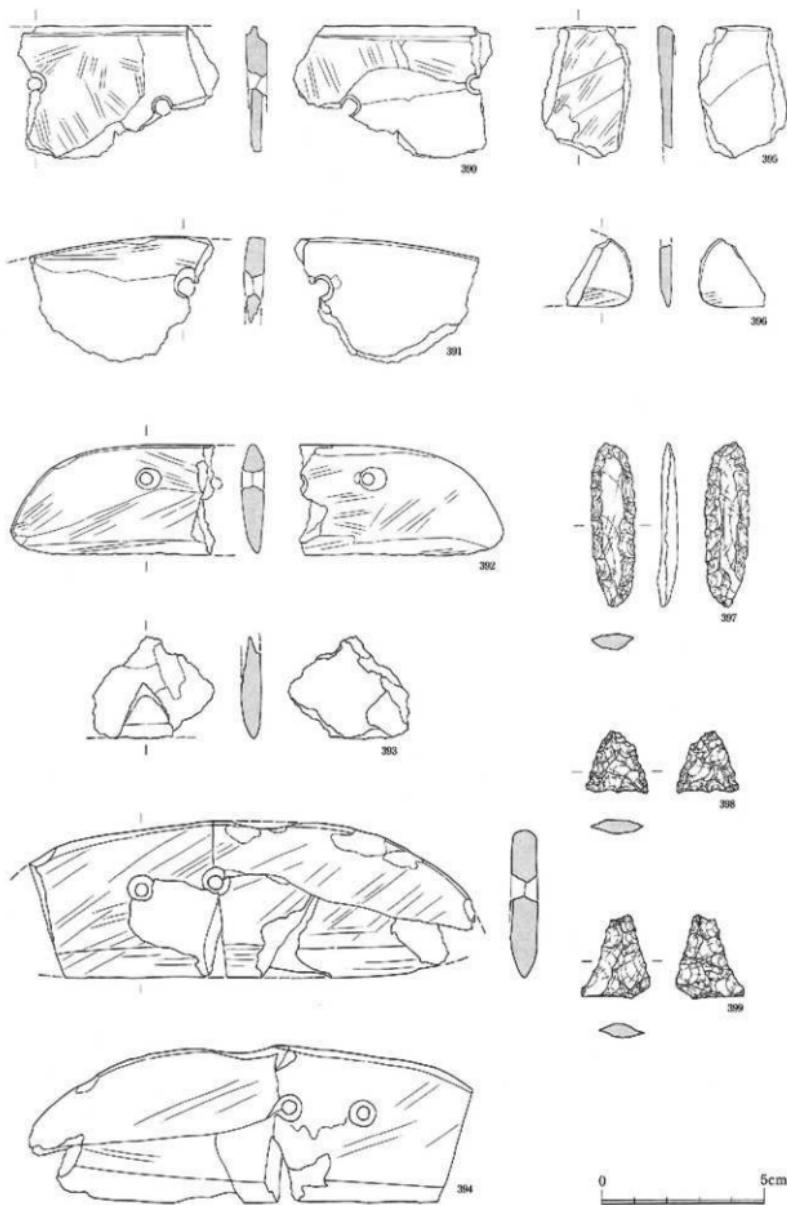


図87 弥生時代中期遺構出土遺物3

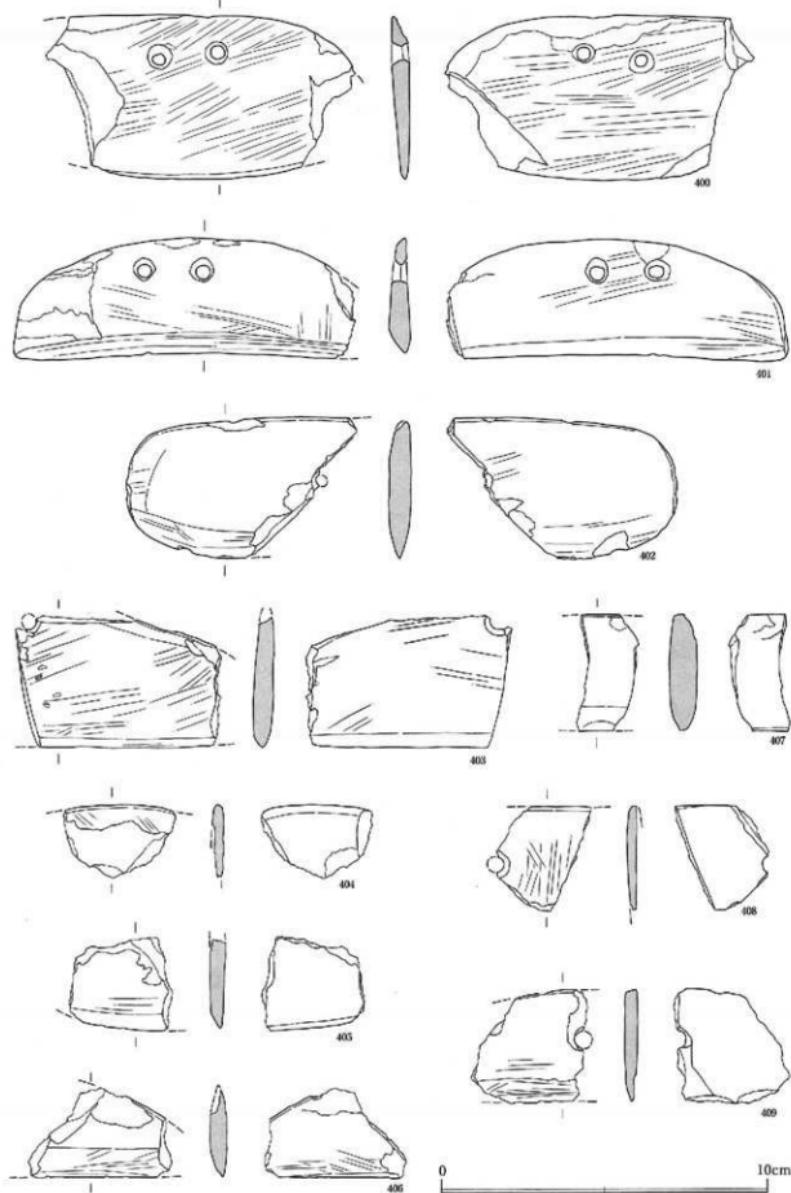


図88 包含層等出土遺物3

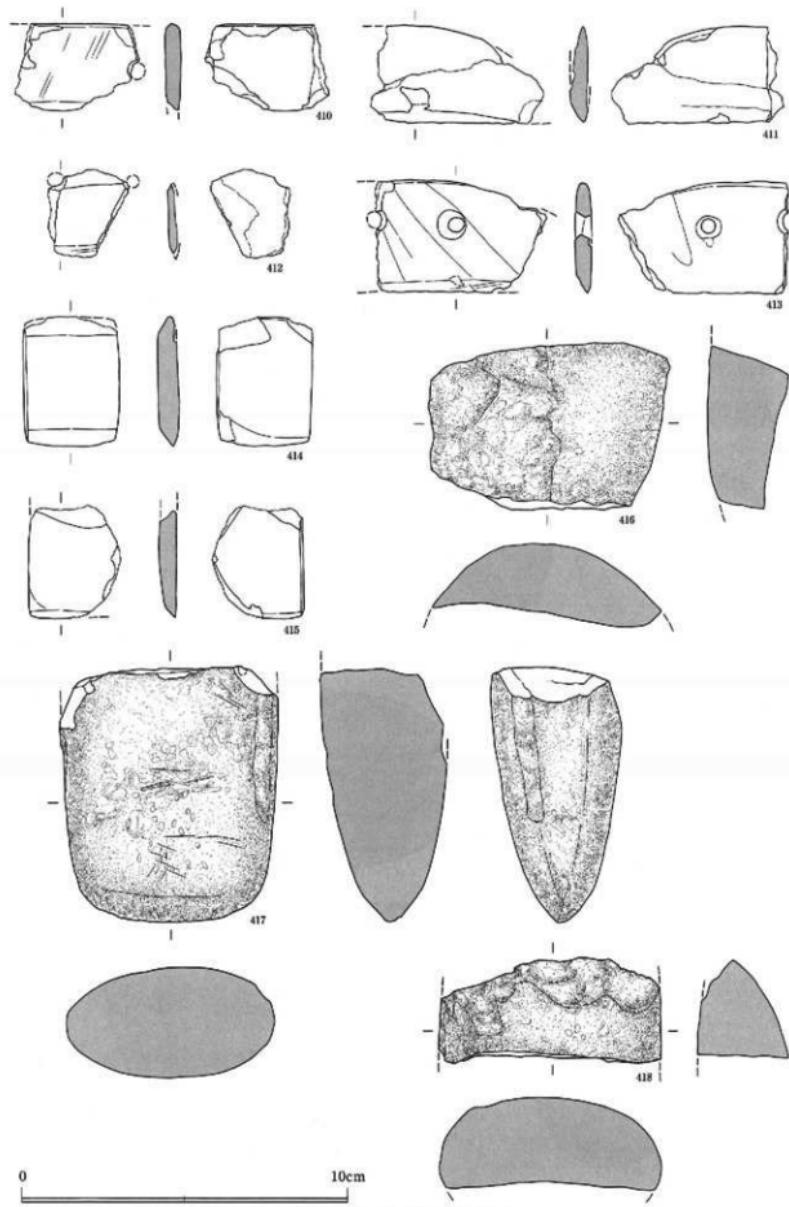


图89 包含层等出土遗物4

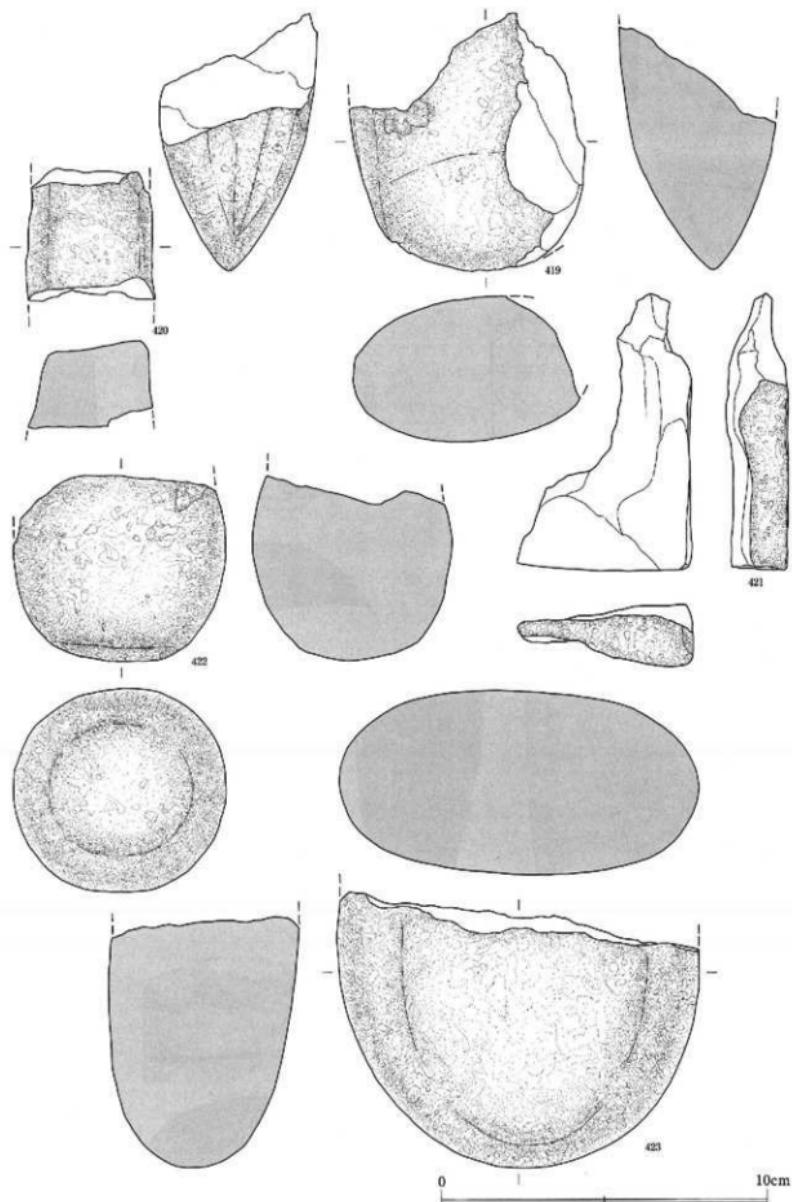


圖90 包含層等出土遺物5

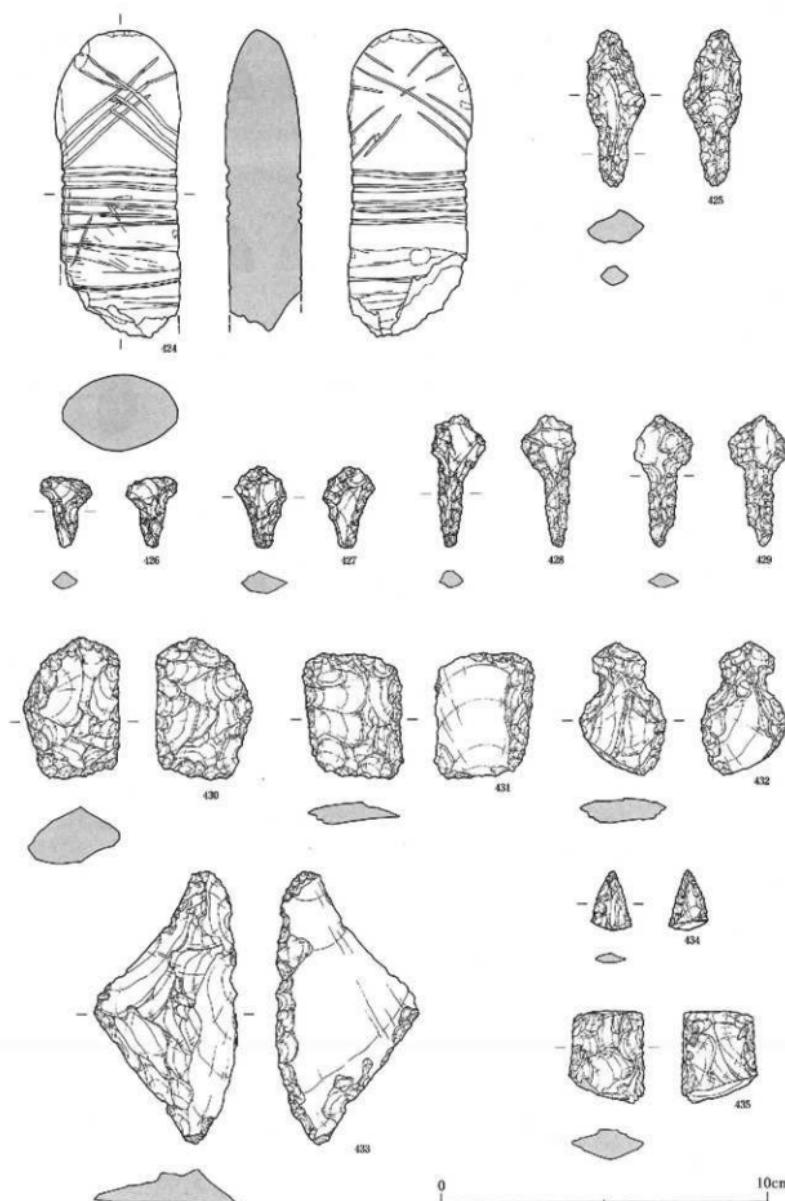


图91 包含层等出土遗物6

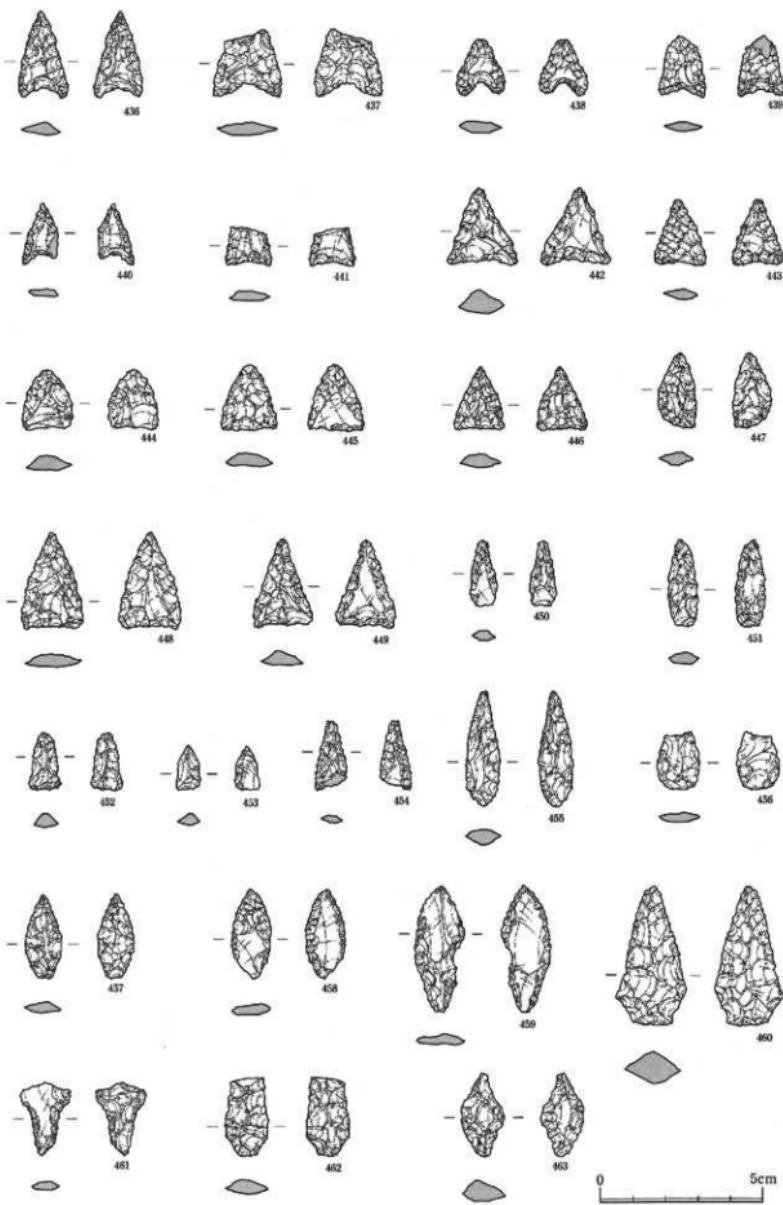


図92 包含層等出土遺物7

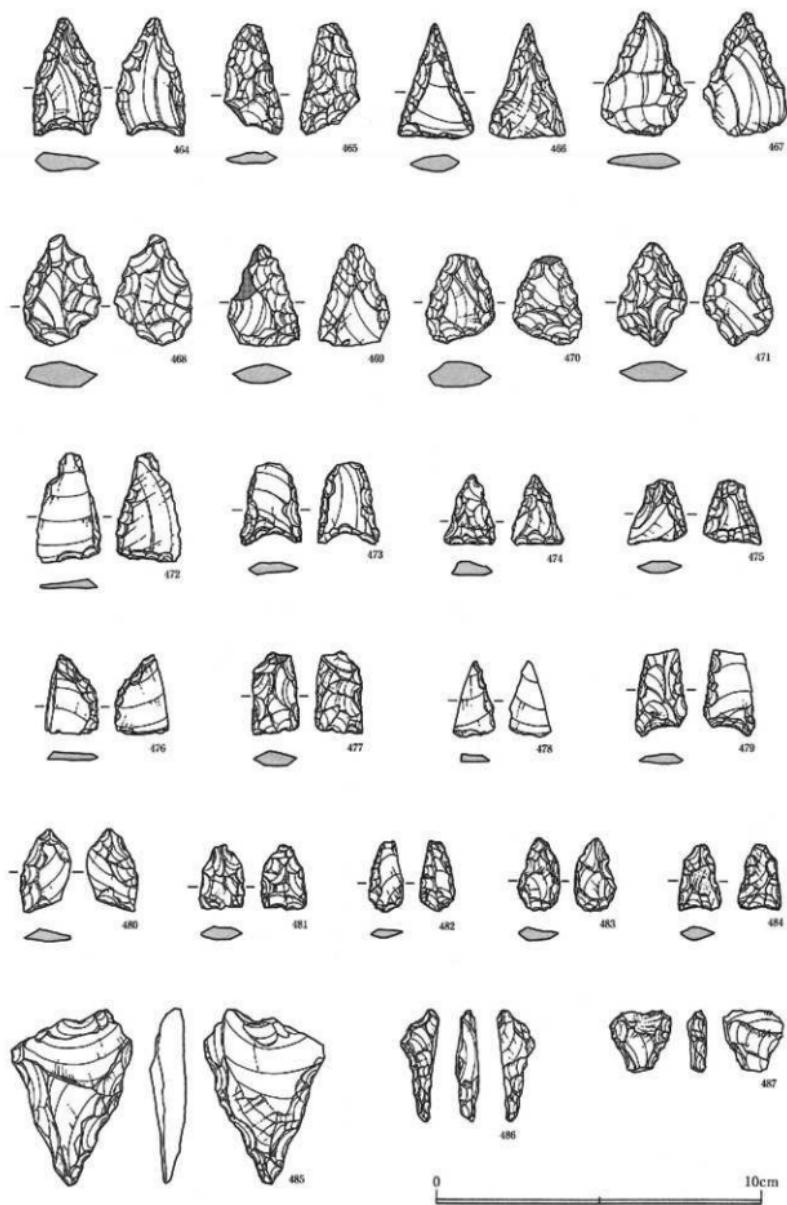


図93 包含層等出土遺物8

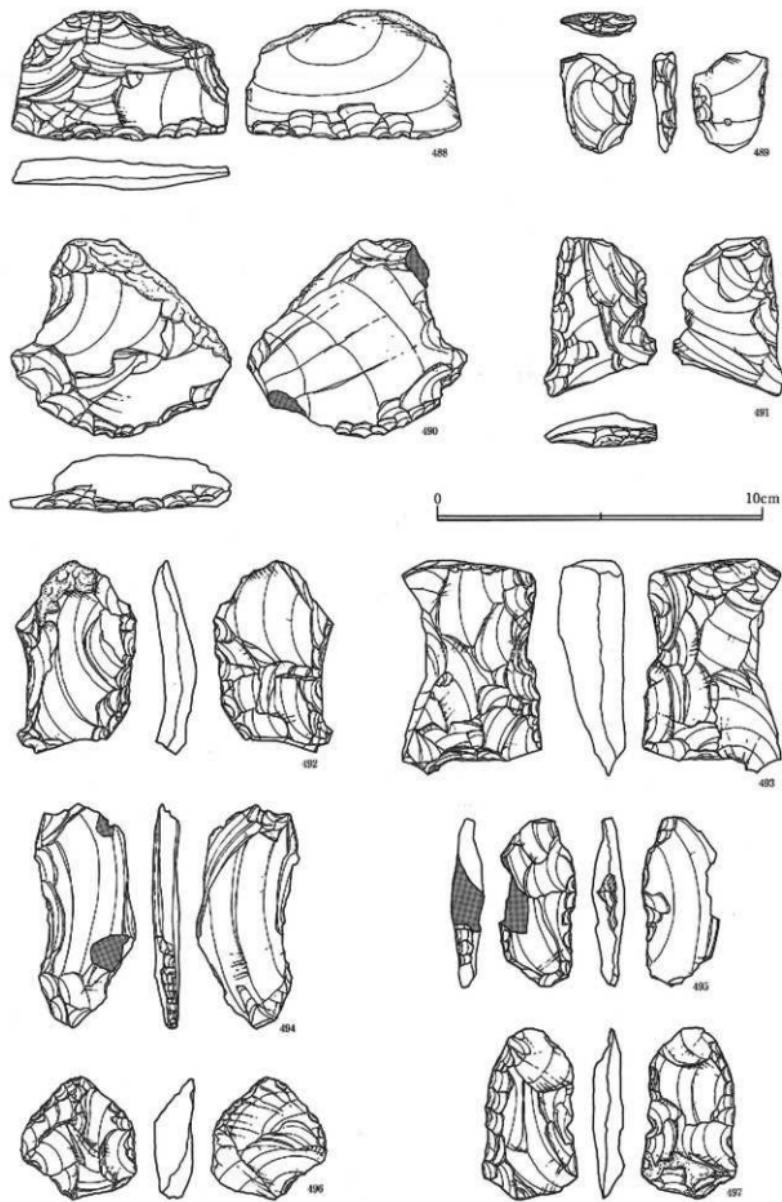


圖94 包含層等出土遺物9

長方形を呈すると考えられる。厚さ0.7cm。ホルンフェルス。403は11号堅穴住居跡（古墳時代前期）から出土した。直線刃であるが欠損部分が多く、全体の形状は不明。厚さ0.6cm。ホルンフェルス。404は99-4調査区包含層から出土した。背部側一部の残存である。ホルンフェルス。405は99-1調査区から出土した。湾曲した刃部の一部の残存である。ホルンフェルス。406はSK5100（中世）から出土した。直線刃半月形の側端部の破片で、擦痕が観察される。厚さ0.5cm。ホルンフェルス。407は99-2調査区、P3315から出土した。刃部側を削るが、刃は研ぎだしていない。厚さ0.9cm。玄武岩質凝灰岩。石庵丁とするのには、疑問が残る。408は99-4調査区包含層から出土した。背部と紐通し孔1ヶ所の残存で、裏面は剥離している。ホルンフェルス。409は99-1調査区包含層から出土した。直線刃半月形と考えられる。紐通し孔が1ヶ所残存する。裏面は剥離。ホルンフェルス。410は99-4調査区包含層から出土した。背部は直線に加工されている。厚さ0.5cm。頁岩。411は99-1調査区包含層から出土した石庵丁未製品である。直線刃半月形態に加工しているが、研磨されていない。頁岩。412は99-4調査区包含層から出土した。刃部の一部と紐通し穴の加工痕が2ヶ所観察される。頁岩。413は99-1調査区P2446から出土した。直線刃半月形を呈し2ヶ所の紐通し穴が観察される。厚さ0.5cm。玄武岩質凝灰岩質片岩。

414・415は99-1調査区包含層から出土した扁平片刃石斧である。414は、刃部は片刃に研ぎ出し、頭（基端）部側にも刃を付けるかのように削る。長さ4.0cm、幅3.0cm、厚さ0.7cmを測る。玄武岩質凝灰岩。415は刃部と左側面の一部が残存する。厚さ0.6cm。玄武岩質凝灰岩。

416～419は太型蛤刃石斧である。416は99-4調査区包含層から出土した。身部（正面）の一部の残存で、断面は梢円形を呈する。玢岩。417は99-1調査区包含層から出土した。刃部側が残存する。正面に台石として二次的に使用された痕跡が観察される。厚さ3.9cm。玢岩。418は99-2調査区P3311から出土した。身部の一部の残存である。玢岩。419は、99-4調査区SD5366から出土した。刃部の残存であるが、右側面を欠く。二次使用は認められない。厚さ4.8cm。玢岩。

420は99-1調査区包含層から出土した砥石である。断面台形の形状で、上面が使用されている。421は99-4調査区包含層から出土した。欠損部分が多いため本来の形状は不明であるが、方形に加工して、残存側面が平滑であることから砥石と考えておく。流紋岩。

422は99-4調査区SD5471から出土した叩石である。球形の自然石を用い、使用面は平滑化している。径6.1cm。砂岩。423は99-4調査区SD5366から出土した石皿である。梢円形の自然石を用い、2分の1を欠損する。上面は平坦である。厚さ5.8cm。流紋岩。

424は、99-3調査区SK4011から出土した石棒である。紋様は、表裏面とも同じように施紋しようとしている。頭部には3本一組の刻線をX字形に交差させる。棒状の身部には4～5本の刻線を纏めて囲繞させる。頭部から9.4cmのところで折損しているが、疎らに刻線を囲繞させる。断面は幅3.88cm、厚さ2.35cmの梢円形である。材質は紀ノ川産の玄武岩質凝灰岩質片

岩で緑色を呈する。

425～429は打製石錐である。425は99-1調査区P1957から出土した。426・428・429は99-1調査区包含層、427は99-3調査区包含層から出土した。426・427の頭部は小さく、錐部は短い。これに対して、428・429の頭部は扁平で大きく、錐部は長く作られている。

430～435は99-1調査区包含層から出土した石器である。430・431はクサビ形石器、432は縦型の石匙、433はスクレーパーである。434・435は石剣あるいは石槍の鋒と刃部の破片である。435の厚さ0.9cmを測る。

図92-436～463は打製石錐である。436～443は凹基式石錐、444～449は平基式石錐、450～453は小型の平基式石錐、454～459は円基式石錐、460～463は凸基式石錐である。

図93-464～484は打製石錐の未製品である。製品と同様、凹基、平基、円基、凸基の各形態の石錐を作ろうとしていることが看取される。

485～487は打製石錐の未製品、488～501（図94・95）は二次加工のある剥片、502～507（図96）は石核である。

以上、弥生時代の遺構および包含層出土の石器・石製品等から看取できることは、石錐・石錐等の打製石器の未製品が見られることに加えて、石庖丁・大型蛤刃石斧の未製品も出土することから、この集落で生産した石器が拠点集落にも劣らない内容を含んでいる。

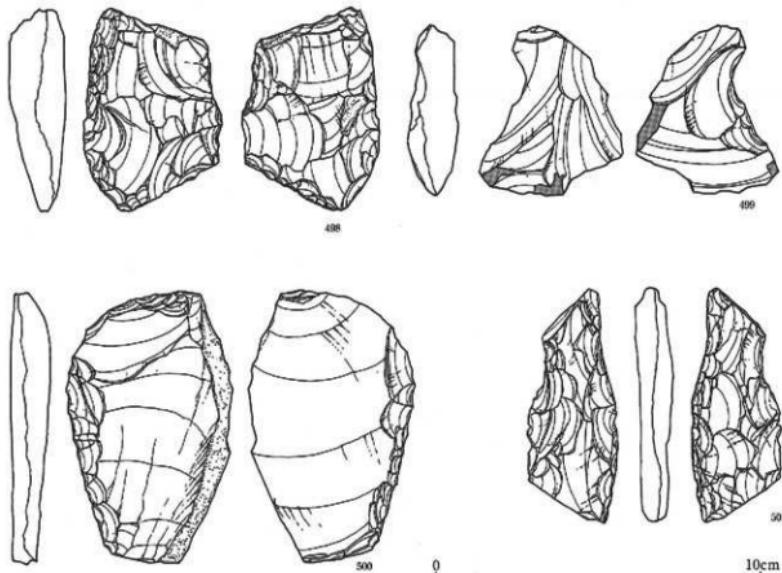


図95 包含層等出土遺物10

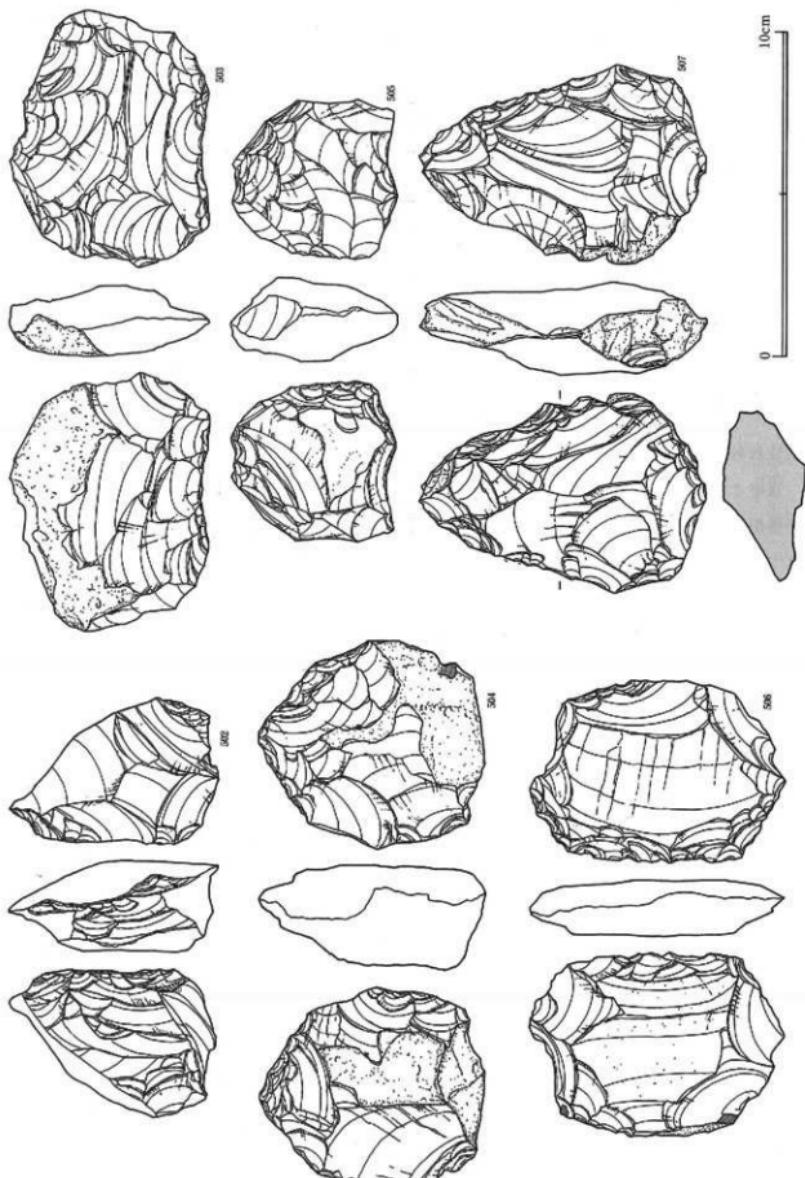


図96 包含層等出土遺物11

4. 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査地で、検出した古墳時代の遺構は、前期初頭から始まる。この時期は、多数の遺構、遺物を検出することができたのに対し、中期以降については、中期の遺構、遺物を僅かに検出しただけで、後期の遺構は全く検出することができなかつた。本調査区から僅か2km西側に離れた穂谷川左岸に、北河内最大級の前方後円墳である牧野車塚古墳が築かれる5世紀代には、人々が暮らした痕跡をほとんど認めることができない。

■古墳時代前期 この時期の遺構は、調査地全域で検出することができたが、その分布は、北東部でやや密度が濃く、南部では薄い。遺構の種類としては、14棟の竪穴住居跡、ピット、土坑、溝等があり、集落の中心部分を構成している。また木棺墓、土坑墓を各1基検出した。

弥生時代中期に築造された方形周溝墓は、この時期に至っても周溝は完全に埋没しておらず、溝あるいは大きな土坑として残存している。また墳丘部分に重なって検出される遺構も少なく、墳丘がある程度残存していたと考えられる。

遺物としては、竪穴住居跡内で検出した土器に加えて、住居から投棄されたと考えられる状況で検出した土器群に混じって他地域産の土器が出土した。その中には生駒西麓窯の庄内壺が含まれており、枚方台地の土器群と中河内地域との併行関係を知ることができた。僅かながら、鉄器、石製品等も出土した。出土土器から見れば、庄内期後半に始まった集落は、布留期前半には廃絶する。

調査地全体に遺構が散在するため、遺構配置を明確にするため、小縮尺の遺構図を南北に2枚に分割して作図した（図97・125）。図97の遺構配置図に示す北半部の遺構、遺物について先述し、南半部の遺構、遺物は後述する。両遺構配置図はともに、古式土師器が出土した遺構を赤色で示している。

■竪穴住居跡（図97・PL26） 総数14基の竪穴住居跡を検出した。図97に示す北半部では8基の竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡の番号は、住居跡であると認識した順に1号・2号…と与えたため、帰属時期に問わらず通し番号となっている。各々の住居跡の平面図は60分の1で統一した。北半部では1～8号の竪穴住居跡を検出した。同時期と考えられる、3・5～7号竪穴住居跡の4棟が主軸を並べ、整然と配置された状況で検出した。

1号竪穴住居跡（図99・PL27） 1号竪穴住居跡は98-1調査区、K7-6-C13-d3で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡の中央部は近代の溝が横切り、基底面近くまで擾乱を受けている。南東側の屋内高床部が途切れる部分を出入り口と考えると、主軸方向はN-30°-Wである。検出面の標高は20.8mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北西辺5.7m、北東辺5.3m、南東辺5.3m、南西辺5.2mを測る。屋内には南西・北西・北東の3方向にコ字形の屋内高床部を地山から掘り残す。高床部の幅0.7～1.1mを測る。高床部には、壁面に沿って幅0.2mの壁溝が掘られる。検出面から高床



図97 古墳時代前期遺構平面図1

部までの深さ0.15m、高床部から床面までの深さ0.2mを測る。埋土は、床面から高床部までを埋める下層と、その上位に住居跡全体を埋める上層（灰褐色土）に分かれる。

住居内の遺構としては、高床部を設けない南東壁側の壁に接して不定形土坑を掘る。0.8×1.2m、深さ0.3mを測る。一段低くなつた床面の中央部には径0.55m、深さ0.15mの土坑を掘る。中央土坑を囲むように柱穴を4ヶ所検出した。柱穴の径0.25～0.4m、深さ0.3～0.4mを測る。

遺物は、高床部と高床部に掘られた土坑内から出土した（図98・P L 28）。南西高床部から壺510、北西高床部から壺509、壺513、

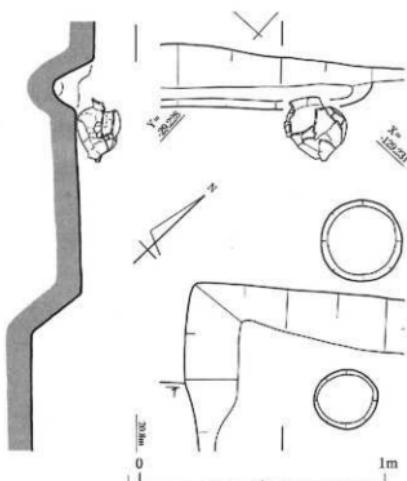


図98 1号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図

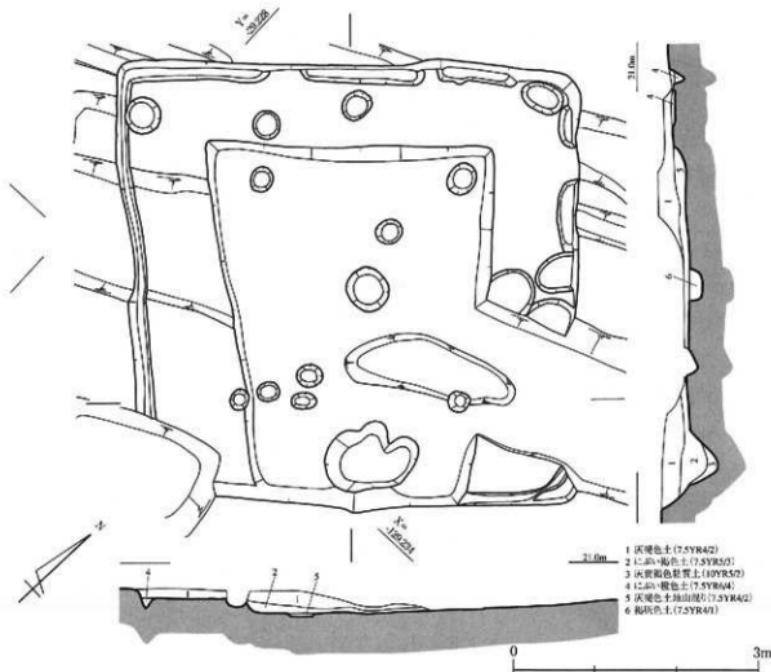


図99 1号竪穴住居跡平面図・断面図

北東高床部の土坑から鉢511、同高床部東端から壺514が床面直上で検出した。また、住居跡埋土から遺物が出土したが、床面近くの下層から出土した鉢512と508の砥石を図示した。

出土遺物（図100-508-514） 砥石508は大きく欠損しており、本来の大きさは不明。二面の使用面が確認できる。長さ13.5cm以上、幅8.5cm以上。肌理の細かい砂岩製。東部揖津地域の淀川に注ぐ川の河原で採取できる石材である。

叩き壺509は、ドーナツ状底部を呈する。体部下半3分の1程に接合痕跡が見られ、それから上は一気に積み上げる。口縁部は丁寧な横ナデで、叩き出した痕跡はない。体部内面は丁寧なナデ仕上げ。

鉢511は、石英、チャートを多く含む在地産。壺最下段の成形と同様で、端部をナデで外反させ、口縁部にしている。ドーナツ状底部。

小型壺512は、内外面ナデ仕上げ。叩き壺510と底部513は、石英、チャートを多く含む在地産。摩滅のため調整不明。壺底部514は、若干の石英、チャートを含む。摩滅のため調整不明。

2号竪穴住居跡（図101・P L 29） 2号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-d3で検出した方形の竪穴住居跡である。平面的には壁溝の一部に搅乱を受けていた程度であるが、遺構検出の時点で既に床面まで削平を受けており、竪穴壁は残らず、壁溝と床面に掘られたピット等が残

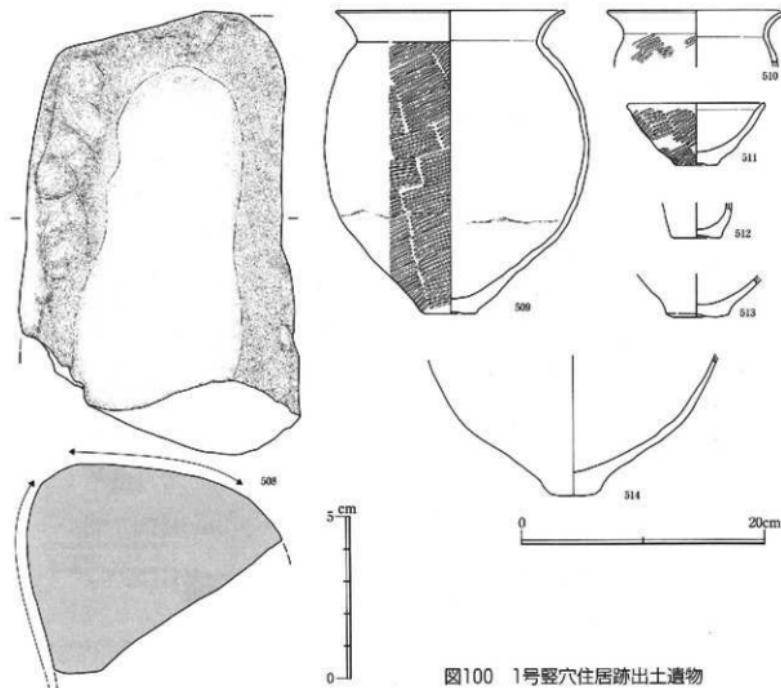


図100 1号竪穴住居跡出土遺物

存していた。主軸方向はN-41°-Eである。検出面の標高は北側で20.6m、南側で20.5mを測り、床面の高さも同じである。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北東辺4.4m、南東辺4.4m、南西辺4.1m、北西辺4.7mを測る。壁溝は四方に途切れることなく廻り、幅0.15~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。北西側壁溝から直角に分岐する同規模の溝があり、東に掘られた浅い土坑に達する。屋内の区画溝とも考えられる。

住居跡自体の埋土は残存せず、壁溝で褐色粘質土が観察できた。

住居内の遺構としては、中央に0.7×1.0m、深さ0.2mの楕円形土坑、その東に接して2.0×3.0m、深さ0.1mの不定形土坑を検出した。屋内にはいくつかのピットを検出したが、出土遺物が無く、住居跡に伴う遺構と判断できなかった。また配置、深さ等からも柱穴を推定することができなかつた。

遺物は、壁溝、土坑等から土器器の小片が出土したが、図化しえなかった。

3号竪穴住居跡（図103・P L 29） 3号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-f・g4・5で検出した方形の竪穴住居跡である。4・5号竪穴住居跡の東4m、6号竪穴住居跡の北4mに位置する。遺構中央部が後世の溝で搅乱を受けていたが、床面までは達していなかった。主軸方向はN-17°-Wである。検出面の標高は20.6mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北辺4.7m、東辺5.1m、南辺5.0m、西辺5.4mを測る。壁溝は四辺に沿って検出したが、南東コーナー部で途切れる。幅0.15~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。本住居跡には本来、東西北の三方向に屋内高床部が設けられていたことが土層断面から観察できた。その高さ0.1mである。検出面から床面までの深さ0.25mを測る。埋土は、褐色土單層である。

住居内の遺構としては、南側壁に接して、0.5×0.9m、深さ0.3mの略方形の土坑を掘る。住居中央には0.8×1.3m、深さ0.15mの楕円形土坑を掘る。また主柱穴と考えられるピットが中央

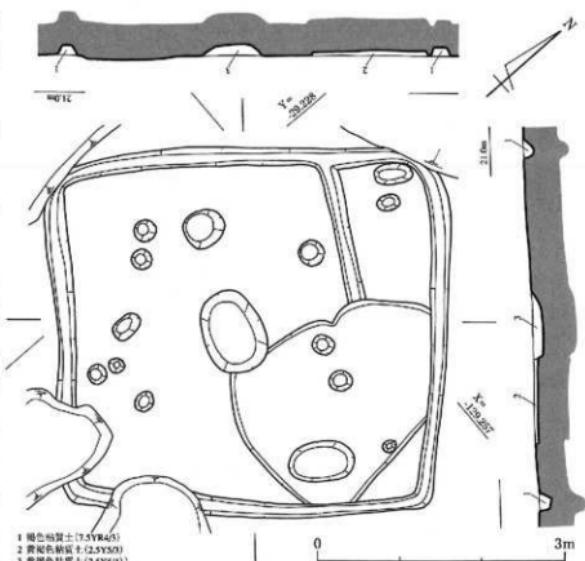


図101 2号竪穴住居跡平面図・断面図

土坑を囲むように4ヶ所検出した。

遺物は、住居跡を埋める褐色土に少量包含されており、貯蔵穴と考えられる南側の土坑から壺515が出土した。

調査担当者の判断ミスにより完掘した住居跡は、土層観察の結果、竪穴住居構築の第一段階であることが判明した。当初の竪穴は、壁溝で開まれた内側を掘り下げる。次に東西北の三方向に褐色土を盛り上げ、高さ0.1mの屋内高床部を作る。この時点で既に壁溝は高床部の下に埋没している。北側高床部に統けて黄色粘質土を盛り、貼り床状に高床部を広げている。床面整形後、溝・ピット等の施設を設け、また西側の南北両コーナーを拡張していたことが看取できた。

出土遺物（図102-515～517） 直口壺515は、微細～3mm程度の石英、チャートをやや多く含む在地産。口縁部内外面は粗いヨコナデ仕上げで、条痕が残る。体部外面は部分的にヘラミガキが残り、内面はナデ仕上げ。

壺底部516は、体部外面ヘラミガキ、底部は掻き取って窪ませる。内面は板状工具によるナデ仕上げ。底部517は、1～2mm程度の石英、

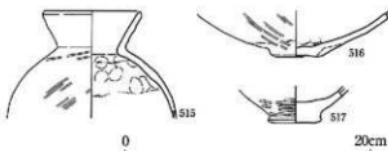


図102 3号竪穴住居跡出土遺物

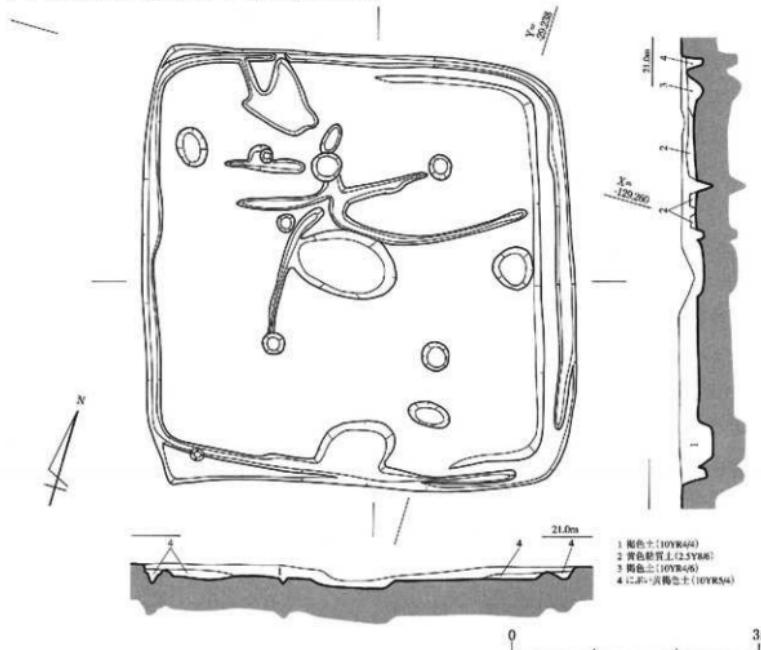


図103 3号竪穴住居跡平面図・断面図

チャートを著しく含む。外面は叩きを弱くナデ消して仕上げる。内面は摩滅のため調整不明。

4号竪穴住居跡（図104・P L30） 4号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-g5で検出した方形の竪穴住居跡である。3号竪穴住居跡の西4m、7号竪穴住居跡の北2mに位置する。主軸の方向は、N-32°-Eである。検出面の標高は20.6mを測る。焼失住居跡と考えられる5号竪穴住居跡の真上で、ほとんど重複するように検出された。下層の住居跡と主軸の方向を40°違えて造られている。

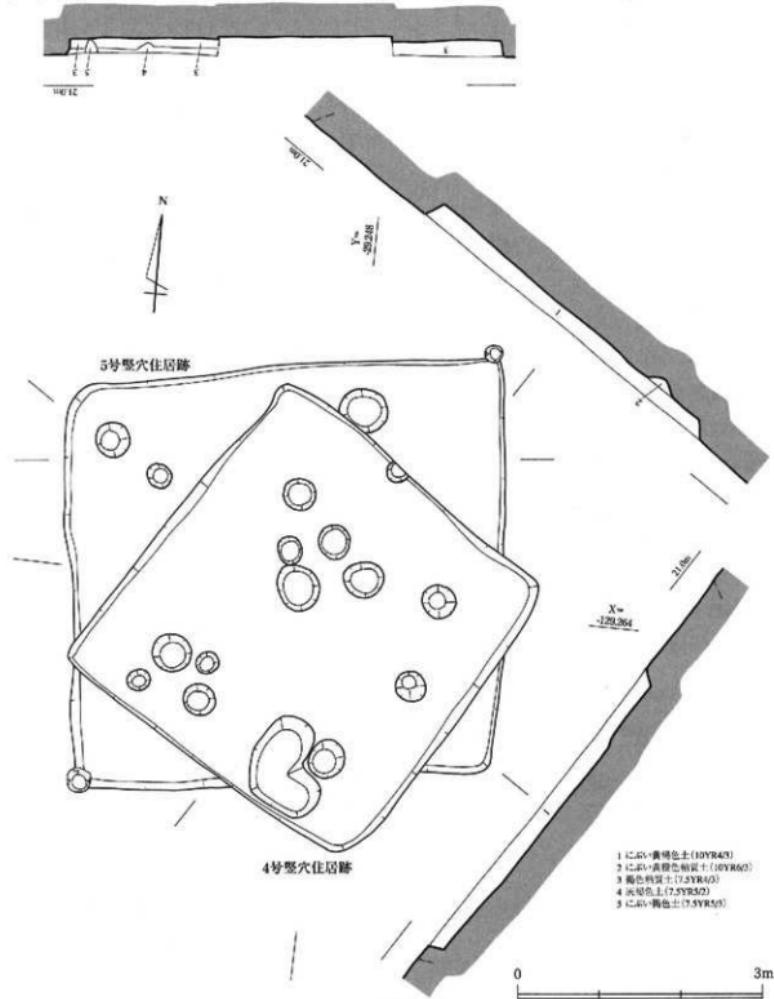


図104 4・5号竪穴住居跡平面図・断面図

住居跡の平面形は隅丸方形で、北東辺4.0m、南東辺4.1m、南西辺4.3m、北西辺4.3mを測る。壁溝は掘られていない。検出面から床面までの深さ0.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色土單層である。

住居内の遺構は、南西壁に接し、中軸線から東に1m偏った位置に0.6×0.9m、深さ0.2mの隅丸長方形の土坑を検出した。また主柱穴と考えられるピットを4ヶ所検出した。

出土遺物は、竪穴住居跡を埋める土層から比較的多くの土器が出土し、518～523の土器を図化した。

5号竪穴住居跡（図104・PL30） 5号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-g5で検出した方形の竪穴住居跡である。4号竪穴住居跡の下から重複して検出した。主軸の方向は、N-8°Wである。検出面の標高は20.6mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北辺5.3m、東辺5.0m、南辺5.0m、西辺4.9mを測る。壁溝は掘られていない。検出面から床面までの深さ0.25mを測る。埋土は下層に褐色粘質土、上層に灰褐色土が観察された。4号竪穴住居跡によって破壊されなかった部分のうち、北側上層および南西コーナー部の掘り下げでは、住居跡中心部に向かって延びる炭化材を検出した（図105・PL

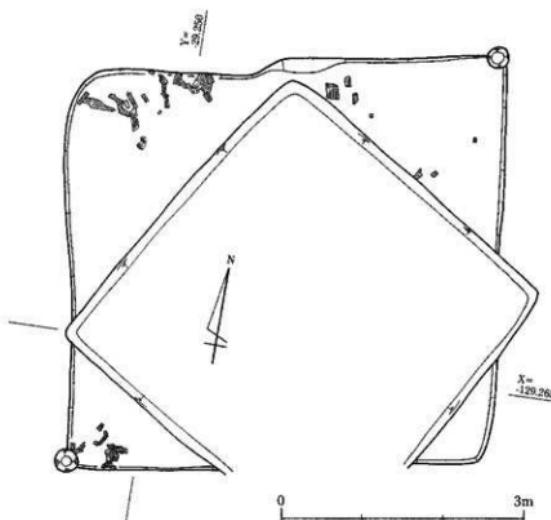


図105 5号竪穴住居跡炭化材出土状況

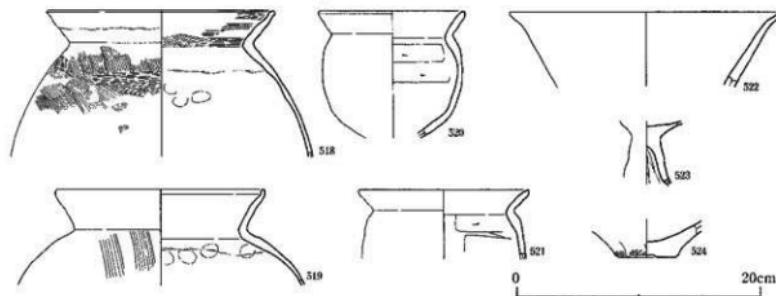


図106 4-5号竪穴住居跡出土遺物

30右下）。また埋土内には、細かな炭、焼土が混入しており、この竪穴住居は火災に遭ったものと考えられる。

住居内の遺構は、南壁面中央部に接して $0.6 \times 0.8m$ 、深さ $0.35m$ の楕円形の土坑を検出した。また主柱穴と考えられるピットを4ヶ所検出した。

遺物の出土は少なく、埋土中から出土した524の底部が固化しめる資料であった。

出土遺物（図106-518～524） 壺518は、口縁端部の形態から布留傾向を示すハケ壺。口縁端部を水平方向に引き出し、平坦面を形成する。体部外面ハケ目、内面ナデ仕上げで粘土紐痕跡が明瞭。壺519は、口縁端部の形態から庄内壺を模倣したと考えられる。灰白色の粗製胎土で剥離が著しい。体部外面に縦ハケ目がかなり確認できる。内面は肩部内面に指頭痕が残る以外は調整不明。

壺520・521は、異形品で同一個体になる可能性もある。口縁部横ナデ、体部外面ナデ仕上げ、内面上半に横向方向の強いカキトリ、内面下半はナデ仕上げである。煤の付着はない。灰黄褐色を呈し、若干の粗砂を含む。

高杯522は、精良胎土で明橙色を呈する精製品。外面は丁寧な横ナデ仕上げ、内面は剥離で不明。高杯523は、脚部内面のしほり痕を弱くナデ消す。それ以外は摩滅著しく調整不明。

底部524は、ドーナツ状で外面ナデ仕上げながら部分的に叩きが残る。

6号竪穴住居跡（図107・P L 31） 6号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-h5で検出した方形の竪穴住居跡である。

3号竪穴住居跡の南4m、

7号竪穴住居跡の東4m

に位置する。主軸の方向
は、N-2°-Eである。検
出面の標高は20.6mを測
る。

住居跡の平面形は隅丸
方形で、北辺4.1m、東
辺4.4m、南辺4.8m、西
辺4.2mを測る。壁溝は
掘られていない。本住居
跡には貼り床が行なわれ
ており、断面観察の結果、
竪穴掘削後、地山に當時
の表土が僅かに混じった
明黄褐色土を0.1m貼り、

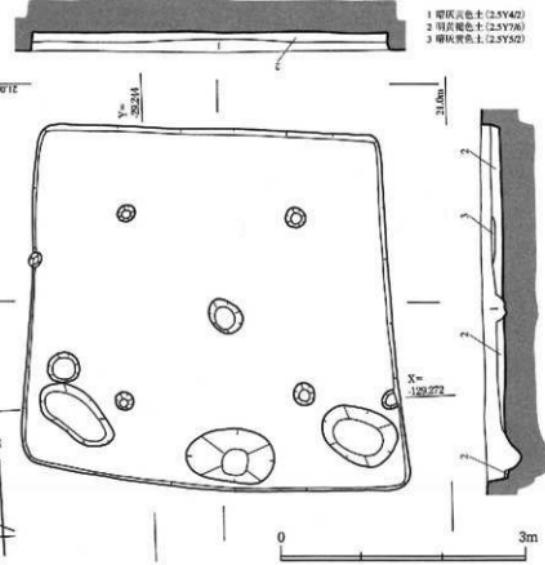


図107 6号竪穴住居跡平面図・断面図

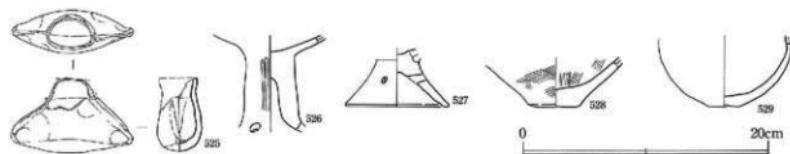


図108 6号竪穴住居跡出土遺物

床面を作る。検出面から床面までの深さ0.15mを測る。埋土はにぶい暗灰黄色土である。

住居内の遺構は、南壁面中央部に接し、 0.6×1.1 m、深さ0.3mの楕円形の土坑を検出した。住居跡中央部には 0.3×0.5 m、深さ0.15mの土坑を検出したが、埋土から炭等は検出できなかった。また主柱穴と考えられる径0.2~0.3mのピットを4ヶ所検出した。住居跡内南側にも浅い土坑を検出したが、何れの遺構も貼床面上面からの掘削である。

遺物は、竪穴住居跡を埋める土層から少量の土器が出土し（527・528）、北壁に接した床面直上から、高杯526と鉢529が出土した。南側中央部で検出した土坑からは、少量の土器片とともに、

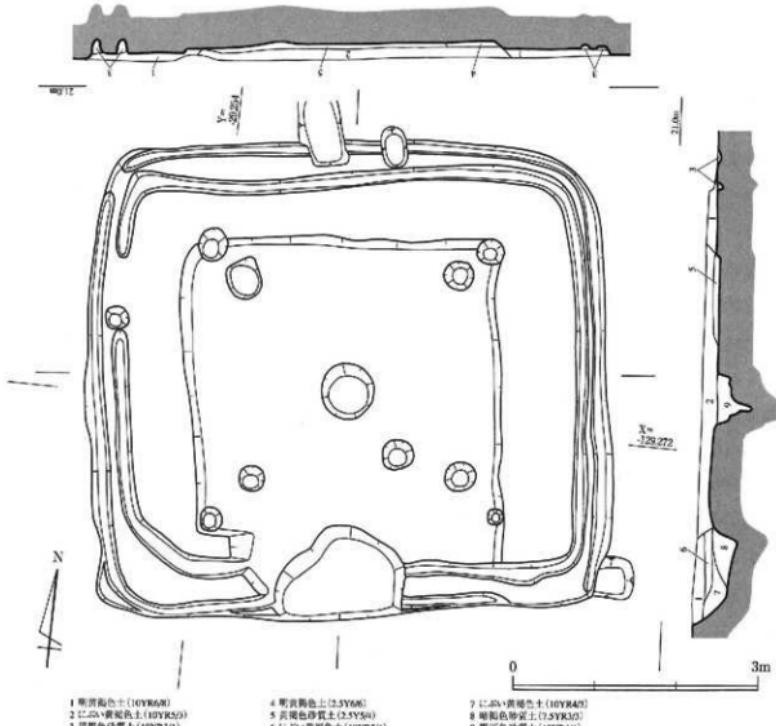


図109 7号竪穴住居跡平面図・断面図

525の皮袋形土製品が出土した。

出土遺物（図108-525～529） 皮袋状土製品525は、口縁部を欠損するものの、部分的に端部はいきている。平坦面を有し短く外傾する口縁部を有する。一枚の方形粘土板を対角線で折り曲げ、肩部で合わせて成形し、内外面ともナデ仕上げ。以下の日常器種ほどに粗製胎土ではないが、1～2mm程度の石英が目立ち精製でもない。

高杯526は在地の粗製胎土で、外面は縦方向のヘラミガキ仕上げ。叩き壺528は、内面にはハケ目痕が残る。高杯527、壺529とともに粗製胎土。摩滅のため調整不明。

7号竪穴住居跡（図109・P L 32） 7号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-h6で検出した方形の竪穴住居跡である。平面的にはほとんど搅乱を受けていないが、竪穴壁が残らない高さまで削平を受けている。4・5号竪穴住居跡の南2m、6号竪穴住居跡の西4mに位置する。主軸の方向は、N-8°-Wである。検出面の標高は20.6mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、壁溝を二重に検出したことから、本住居跡は建て替えが行なわれたと考えられる。外側の壁溝に伴う住居跡の各辺は、北辺6.0m、東辺5.5m、南辺6.1m、西辺5.7mを測る。内側の壁溝に伴う住居跡の各辺は、北辺5.5m、東辺4.9m、南辺5.5m、西辺5.0mを測る。外側の壁溝は北東隅と南東隅で途切れる。幅0.15～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。内側の壁溝は西辺で一部途切れ、規模は外側壁溝と同じである。

本住居跡には西北東の三方向に地山削り出しの屋内高床部を設ける。造構検出の時点で既に高

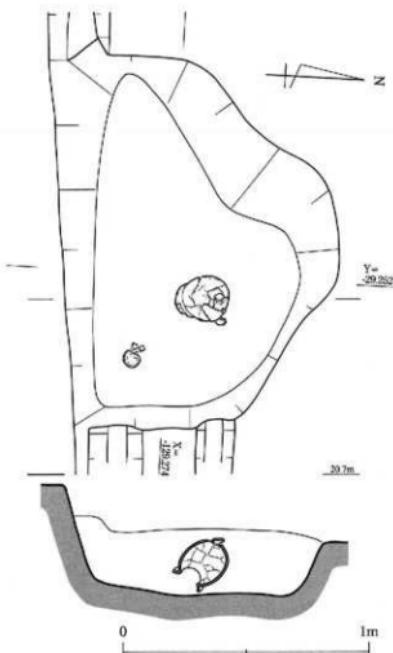


図110 7号竪穴住居跡遺物出土状況・断面図

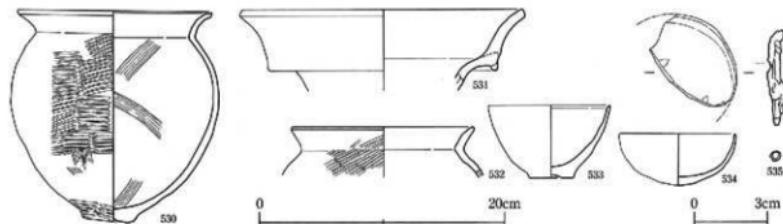
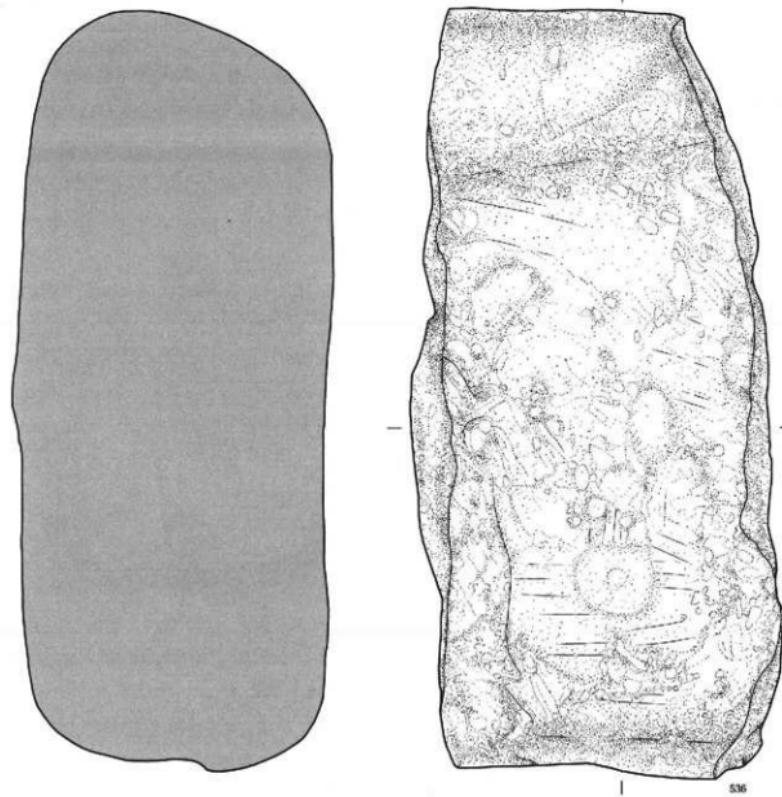


図111 7号竪穴住居跡出土遺物1



536

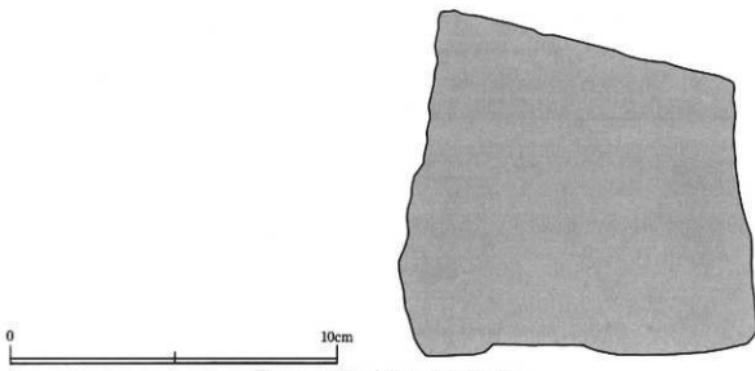


図112 7号竖穴住居跡出土遺物2

床部が頭を出し、高床部の一部と竪穴壁は削平を受けているものと考えられる。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。

住居跡内の遺構は、南壁面中央部に接し、 $1.1 \times 1.6\text{m}$ 、深さ0.3mの土坑が、住居跡内中央部から径0.7m、深さ0.3mの円形土坑を検出した。南壁に接する土坑は、形状から本来 $0.6 \times 0.8\text{m}$ の楕円形土坑が、住居の拡大に伴い拡張されたと考えられる。また屋内高床部の内側コーナー部4ヶ所の柱穴、各柱穴から0.5m中心側に入った所に4ヶ所の柱穴を検出した。

本住居跡完掘時では、北西柱穴一対のうち、中心側の柱穴上面に台石が置かれていた（PL32右下）ことから、内側の柱穴は、住居跡埋没時点で既に機能していなかったことが看取される。したがって遺構廃絶時には、拡張された外側の柱穴及びそれに対応する外側壁溝の竪穴住居跡が使われていたものと考えられる。

遺物は、南側土坑内から、土坑床面に接し、倒置した状況で壺530が出土し、同じ土坑内から鉢533も出土した（図110・PL32下）。住居内埋土から壺531、壺532、用途不明の土製品534と釘が出土した。

出土遺物（図111-530～535）叩き壺530は、粗製の在地胎土でドーナツ状底部を呈する。体部下半三分の一程はハケ仕上げであり、それから上は一気に積み上げて叩き仕上げにする。口縁部は丁寧な横ナデで、叩き出した痕跡はない。体部内面は、丁寧なナデ仕上げ。二重口縁壺531は、粗製の在地胎土で1～2mm程度の粗い石英、チャートが著しい。叩き壺532は、粗製胎土で、口縁部は叩き出し技法による。

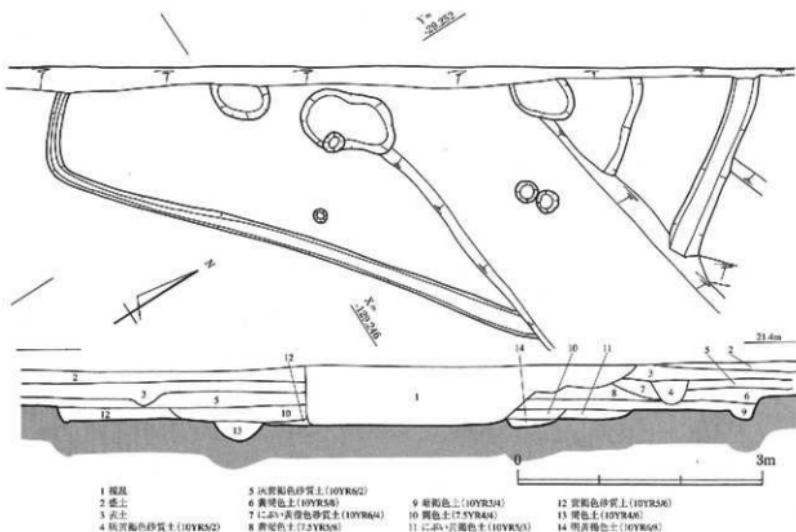


図111 8号竪穴住居跡平面図・断面図

鉢533は、粗製胎土で、ドーナツ状底部。内外面摩滅のため調整不明。鉢534は、若干の細砂を含むのみの精良胎土。内面は丁寧なナデ仕上げ、外面摩滅のため調整不明。

鉄器535は、断面円形の直線的な棒状品で、用途は不明。圓面下端は四方から叩き、釘の先端状を呈し、本来の形状を残す。上端は欠損。

台石536は、北西主柱穴の内側柱穴から出土し、建替えが行なわれたこの住居の先後関係を知る出土状況を示した。図示した面を上面に向か、水平に据えられていた。形状から台石と考えられ、上面中央部がやや窪み平滑であるが、明瞭な使用痕は認められない。長さ23.7cm、厚さ10.6cmを測る。材質は、和泉砂岩である。

8号竪穴住居跡（図113・P L33） 8号竪穴住居跡は、98-1調査区、K7-6-C13-e6で検出した方形の竪穴住居跡である。全体の約3分の1を検出し、それ以外は調査区外に延びる。東コーナー部から西に横断する形で近代の溝によって搅乱を受け、床面まで達している。1号竪穴住居跡の西22m、5号竪穴住居跡の北15mに位置する。主軸の方向は、N-36°-Wである。検出面の標高は20.8mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北東辺4m以上、南東辺7.7m、南西辺1m以上、を測る。壁溝は各辺に沿って検出した。幅0.15~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。屋内には北東側で、地山を掘り

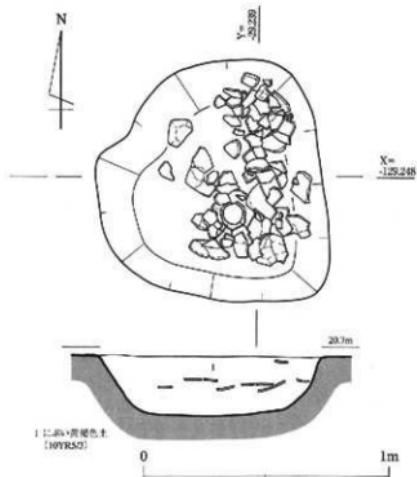


図115 SK582遺物出土状況・断面図

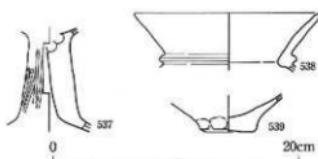


図114 8号竪穴住居跡出土遺物

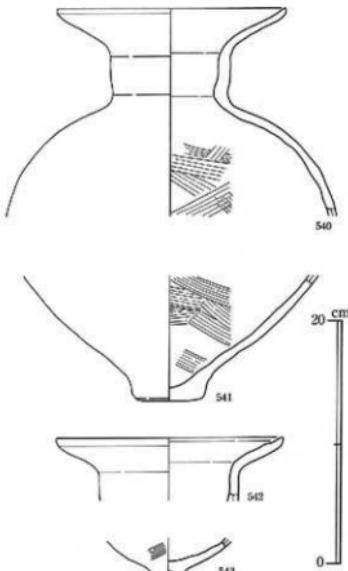


図116 SK582出土遺物

残した屋内高床部を検出した。検出面から高床部までの深さ0.2m、高床部から床面までの深さ0.1mを測る。

住居跡内の遺構は、3基の土坑と4ヶ所のピットを検出した。ピットからは遺物が出土せず、本住居跡に伴うものは不明である。土坑は何れも深さ0.1m程度で、中央の土坑から図114に図示した土器が出土した。

出土遺物（図114-537～539） 高杯537は、外面縦方向ヘラミガキ仕上げで粗製胎土。広口壺538は、1～3mm程度の石英、チャートを著しく含む。摩滅のため調整不明。底部539は、粗い石英、チャートを含む在地産でドーナツ状を呈す。

SK582（図115・P L41上） SK582は98-1調査区、K7-6-C13-e4で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、北西隅を欠く。0.95×1m、深さ0.25mを測り、底部は広く平らである。土坑の中位から遺物が出土した。遺物が出土したレベルが一定であるため、土坑がある程度埋没した段階で土器や石が投棄されたと考えられる。

同形の壺が口縁部を下に向け、破碎した状況で2個体（540～542）と別個体の壺底部（543）が出土した。

出土遺物（図116） 広口壺540・541は、1～4mm程度の石英、チャートを著しく含む。橙色を呈し、焼成は不良。体部内面ハケ目仕上げ。他は摩滅で調整不明。広口壺542も形態、胎土、色調、焼成とも全く同じ。540の口縁は完残するから、2個体あったことになる。底部543は、在地の粗製胎土のくぼみ底。外面は叩き成形の後、強くナデ消す。内面はヘラミガキ。

SK1080（図118・P L41下） SK1080は98-1調査区、K7-6-C13-h5で検出した土坑である。平面形は長方形を呈するが、北東側を水道管によって破壊されている。0.6×1.5m以上、深さ0.15mを測る。土坑底からやや浮いた状況で高杯544が出土した。土坑内埋土から壺545、鉢546が出土した。土坑墓の可能性がある。

出土遺物（図117） 高杯544は、粗い石英、

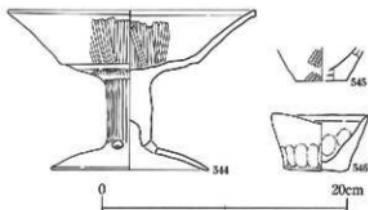


図117 SK1080出土遺物

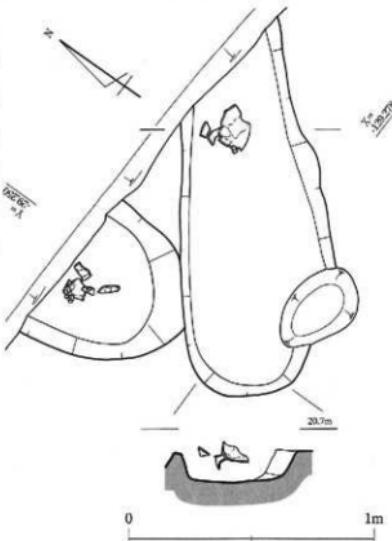


図118 SK1079-1080遺物出土状況・立面図

チャートを著しく含み、中には9~5mmの小礫も含む。灰黄色(Hue2.5Y7/2)を呈する。中実の脚柱部を体部に挿入して造る。裾部は摩滅のため調整不明ながら、他はすべて縦方向のヘラミガキで仕上げる。しかし孔は三方で外から穿孔する。

底部545は、叩き仕上げ。粗い砂粒~小礫を著しく含む。

鉢546は、ドーナツ底を呈し、重量感がある。胎土、色調は高杯544と全く同じ。摩滅のため調整不明。

SK495 (図120・P L 42上) SK495は98-1調査区、K7-6-C13-g-h3で検出した木棺墓である。墓坑掘形の形状は、北・西・南辺が長方形を囲む形状を目指すのに対し、東側が不定形に乱れる。壁面はほぼ垂直に掘り下げるが、底面は平坦ではなく、浅いU字状を呈する。

墓坑掘形の床面が平坦でなかったため、木棺を設置するに当たって、床面を平坦にする目的で暗褐色粘質土を整地土として敷いていることが観察される。

木棺は西小口側0.35m、東小口側0.32m、両側板0.98mを測る。深さ0.15mが残り、西小口側から壺551・壺550が出土した。

遺物は棺直上に置かれた上記遺物と、その上層の褐色粘質土から、多数の壺が破碎された状況で出土した(図119-547~549)。

出土遺物(図119) 叩き壺547は、粗砂を多く含む。体部外面はやや細筋の叩き(3条/cm)、内面は横方向板ナデ仕上げ。口縁部は強い横ナデで仕上げる。底部548・549・550は、いずれも石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製胎土。548は外面叩き、内面板ナデ。549は外面摩滅、内面はナデ。550は内外面ナデ仕上げ。

小型壺551は、粗砂を多く含む粗製胎土で、灰白色(Hue2.5Y 8/1)を呈する異色のもの。器壁厚く、重量感がある。体部外面は剥離、内面はナデ仕上げ、底部はヘラ削り。体部に外面から穿孔するが、内面粘土の盛り上がりから焼成前の穿孔である。

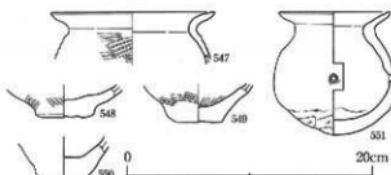


図119 SK495出土遺物

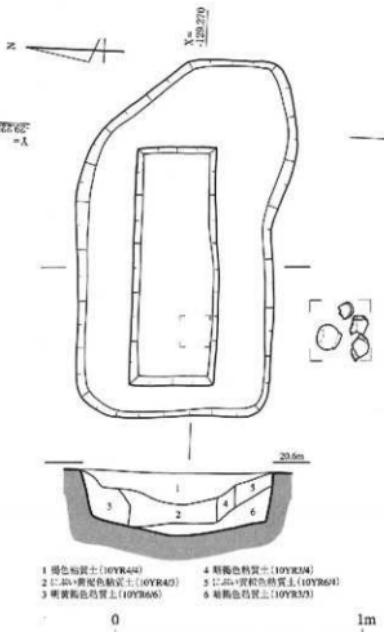


図120 SK495平面図・断面図・遺物出土状況

SK4646 (図121・PL42下) SK4646は99-4調査区、K7-6-C13-i5で検出した土坑である。平面形はいびつな長方形を呈する。0.8×1.5m、深さ0.2mを測り、断面形状は浅いU字状、埋土は黒褐色土單層である。土坑の北側上層で、製塙土器を含む図122-552～555の遺物が出土した。土坑墓の可能性がある。

出土遺物 (図122) 叩き壺552は、石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製在地胎土である。下半3分の1の部分で接合痕跡を残す。口縁部は横ナデ仕上げで、叩き出しなのかは不明。内面は工具ナデ仕上げ。

異形土器553は、明赤褐色(Hue2.5Y 5/8)の体部を成形後、灰白色(Hue2.5Y 8/2)の脚台を手づくねで巻付ける。体部内面はハケ目の後ナデ、外面は叩きと思われるが丁寧にナデ仕上げる。二次焼成は受けでおらず、製塙土器とは断定できない。底部554は、粗製在地胎土の叩き壺でドーナツ状を呈する。

555は壺、あるいは器台。赤色(Hue10R 5/8)を呈し、胎土もやや精良で他と異なる。摩滅のため調整不明。口縁部内面のクシ書き波状文は鋭い山形で描かれており、庄内期に併行することを示す。

その他の遺構 (図97) 竪穴住居跡、土坑以外の古式土器を出土する遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝上層あるいは中層、ピット、溝等があり、図化できる遺物を図123に示した。壺556、557は98-1調査区北端のSD2から出土し、SD2につながるSD60からは壺559が出土した。両溝とも幅0.3～0.4m、深さ0.2mを測る。壺558はP336から、壺560はP928から出土し、両者ともに径0.25m、深さ0.1mを測るピットである。

出土遺物 (図123) 叩き壺556・557は中型品、558は大型品で、石英、チャート、長石の粗砂を多く含む粗製胎土の在地産である。556の口縁部は短く特徴的である。また本遺跡で、558のような大型の叩き壺は稀少である。有孔底部559は、焼成前に内面から穿孔したもの。



図121 SK4646遺物出土状況・断面図

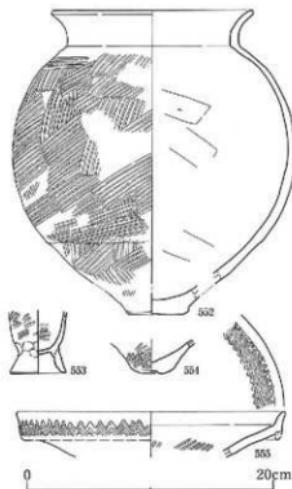


図122 SK4646出土遺物

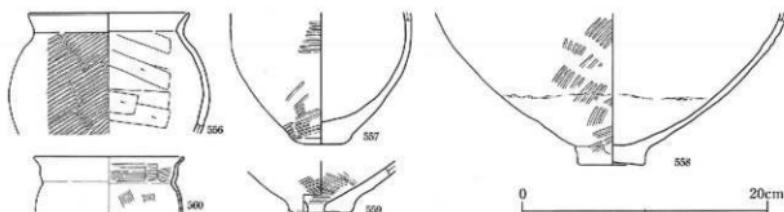


図123 古墳時代前期遺構出土遺物

石英、チャート、長石の粗砂を多く含む粗製胎土である。

560は、丸底鉢と考えられる。口縁形態は強い横ナデを施し、布留期初頭の二段屈曲鉢的な屈曲を示す。内面ハケ目、外面は摩滅で調整不明。胎土はやや精良で、体部器壁は1mmと薄い。焼成は、極めてシャープ。

小縮尺で南北に分割した古墳時代前期の遺構図のうち、南半部を図125に示す。古墳時代前期の遺物が出土した遺構を赤色で示した。

竪穴住居跡（図125） 総数14基の竪穴住居跡のうち、図125に示す南半部では6基の竪穴住居跡を検出した。北半部では比較的近接した位置で検出したのに対して、南半部では散在する状況を呈する。

12号竪穴住居跡（図126・P L34） 12号竪穴住居跡は99-1調査区、K7-6-D13-e・f7・8で検出した方形の竪穴住居跡である。今回の調査で最も遺構密度の高い場所で検出したため、古代の建物で破壊され、また弥生時代のピット、溝と重なり合い、住居跡そのものの遺構を把握することが困難であった。また地山の削平も著しく、掘り込んだ竪穴壁は残らず、壁溝と床面に掘られたピット等のみが残存していた。11号竪穴住居跡の西15mに位置する。主軸の方向は、N-27°-Eである。検出面の標高は20.4mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北辺6.0m、東辺5.8m、南辺6.4m、西辺5.8mを測る。壁溝が四辺に掘られるが、南辺の西側を欠いている。幅0.3~0.5m、深さ0.1mを測る。壁溝の北東コーナー部から北に延びる溝が接続する。延長22m、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。竪穴住居跡の標高20.4m、溝の北端の標高20.1mを測ることから、地形の低い方向に向かって住居跡から延びる排水溝と考えられる。

本住居跡には本来西北東の三方向に地山削り出しの屋内

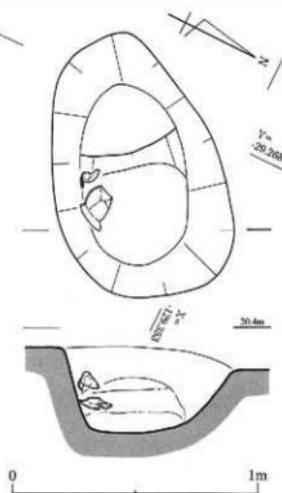


図124 12号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図



图125 古墳時代前期遺構平面図2

高床部を設けられていたと考えられる。遺構検出の時点で既に高床部が頭を出し、高床部の一部と竪穴壁は削平を受けているものと考えられ、特に東側高床部は後世の遺構によって大きく搅乱を受けている。検出土面から床面までの深さ0.1mを測る。

住居跡内の遺構は、南壁面中央部に接し、 0.7×1.1 m、深さ0.35mの土坑を検出した。また住居跡内中央部から径0.75m、深さ0.25mの円形土坑を検出した。ピットも多数検出したが、配置、深さ等から柱穴を特定することができなかった。

遺物は、南側土坑内から鉢562、高杯564、壺565が出土した（図124・P L 34下）。住居内埋土から壺563、甕566と砥石561が出土した。

出土遺物（図127） 砥石561は、大きく欠損し、本来の大きさは不明。一面の使用面が確認

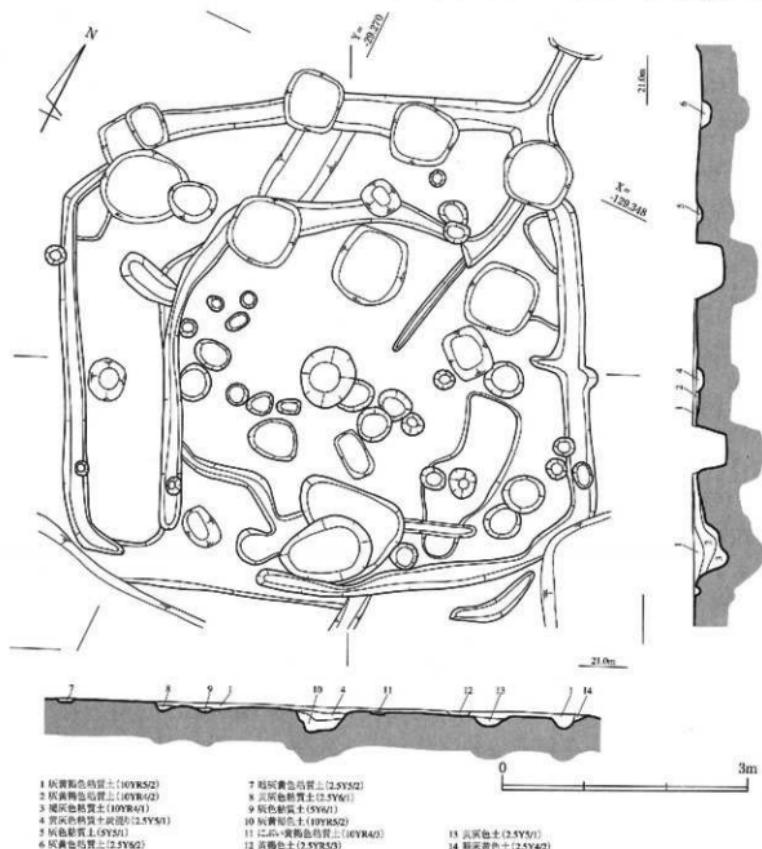


図126 12号竪穴住居跡平面図・断面図

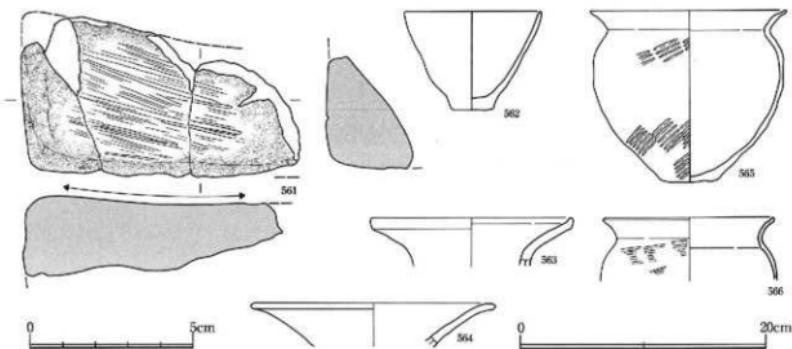


図127 12号竪穴住居跡出土遺物

できる。使用面には、非常に粗い条線が残る。灰白色を呈する流紋岩製。

鉢562は、灰白色を呈し、石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製胎土。器壁は薄い。剥離のため調整不明。

広口壺563は、粗砂を多く含む粗製胎土。剥離で調整不明。564は高杯と考えられるが、断定しない。粗砂を多く含む粗製胎土。外面は縦方向ヘラミガキのようである。内面は剥離で調整不明。

叩き壺565は、粗砂を多く含む粗製胎土である。下半3分の1の部分で叩き方向が異なる。口縁部は横ナデ仕上げで、叩き出しなのかは不明。ドーナツ状底部。本遺跡では一般的な叩き壺。叩き壺566は、粗砂を著しく含む。剥離が著しい。

11号竪穴住居跡 (図129・P L35) 11号竪穴住居跡は99-1調査区、K7-6-D13-e5-6で検出した方形の竪穴住居跡である。13号竪穴住居跡の下から検出し、東辺を破壊されている。12号竪穴住居跡の東15mに位置する。主軸の方向は、N-38°Wである。検出面の標高は20.3~20.4mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北西辺5.5m、北東辺5.8m、南東辺5.7m、南西辺5.7mを測る。西コーナー部と南東辺の一部に壁溝を検出した。幅0.15~0.25m、深さ0.05mを測る。検出面から床面までの深さ0.05mを測る。埋土は上層が黒褐色土、下層が地山の土が混じった黒褐色土で、下層は貼床の可能性がある。

住居内の構造は、南壁面中央部に接し、1.0×1.4m、深さ0.15mの楕円形土坑を検出した。住居跡中

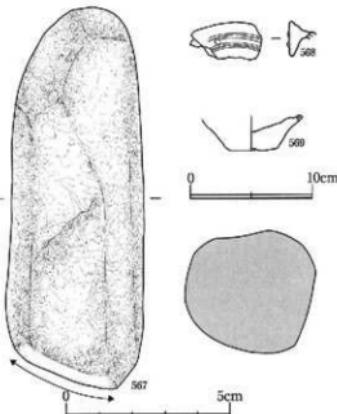
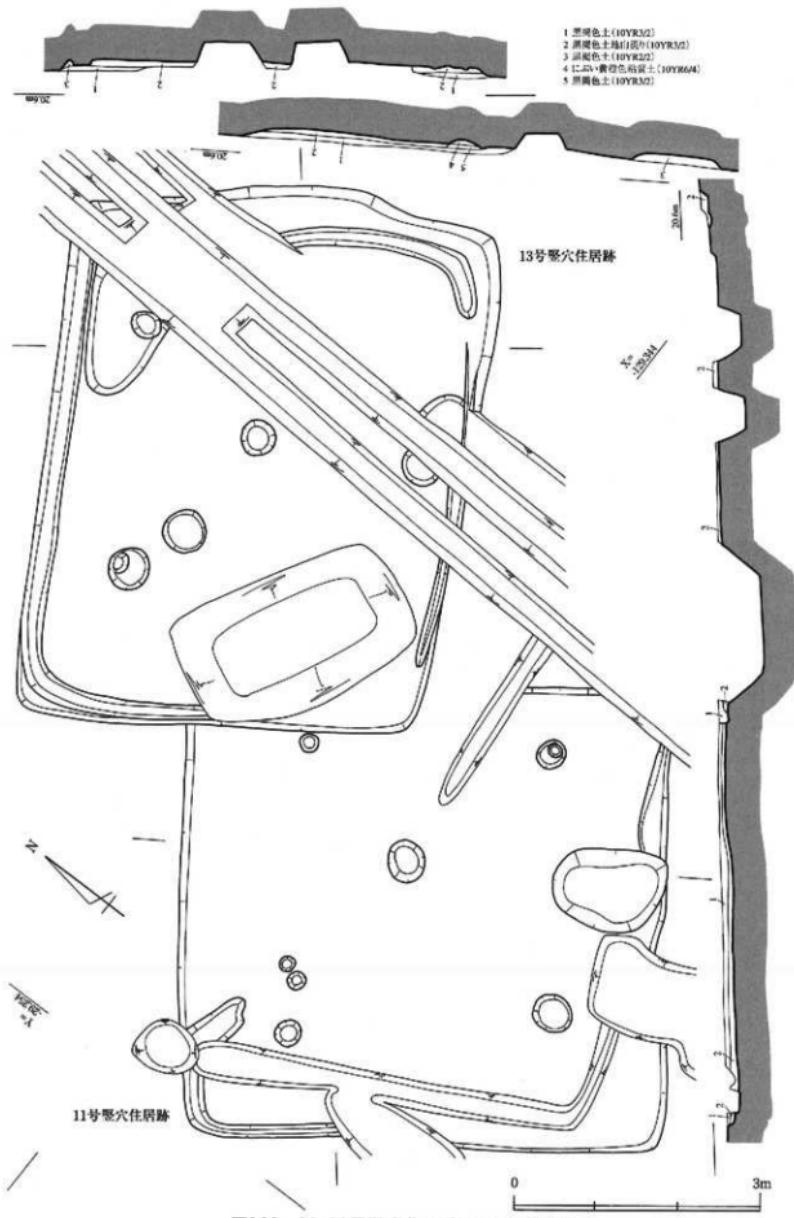


図128 11-13号竪穴住居跡出土遺物



中央には径0.5m、深さ0.1mの土坑を検出したが、埋土から炭等は検出できなかった。また主柱穴と考えられる径0.2~0.5mのピットを4ヶ所検出した。

出土遺物は、竪穴住居跡を埋める土層から少量の土器が出土し、手焙形土器の破片568と壺の底部569を図示した。

13号竪穴住居跡（図129・P L35） 13号竪穴住居跡は99-1調査区、K7-6-D13-c-e5で検出した長方形の竪穴住居跡である。11号竪穴住居跡の上に重複して検出した。住居跡を南北方向にガス管と水道管が横切り、床面以下まで搅乱を受けている。主軸の方向は、N-29°-Wである。検出面の標高は搅乱の東側で20.45m、西側で20.3mを測る。

住居跡の平面形は隅丸長方形で、北西辺6.3m、北東辺5.3m、南東辺6.2m、南西辺4.8mを測る。壁溝は南西壁の一部を除いて掘られていたと考えられる。北東側では壁面から0.2~0.5m離れた位置で検出した。幅0.15~0.3m、深さ0.1mを測る。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。埋土は11号竪穴住居跡と同じ状況である。

住居内の遺構は、南壁面中央部に接し、推定0.6×1.2m、深さ0.15mの楕円形土坑を検出した。

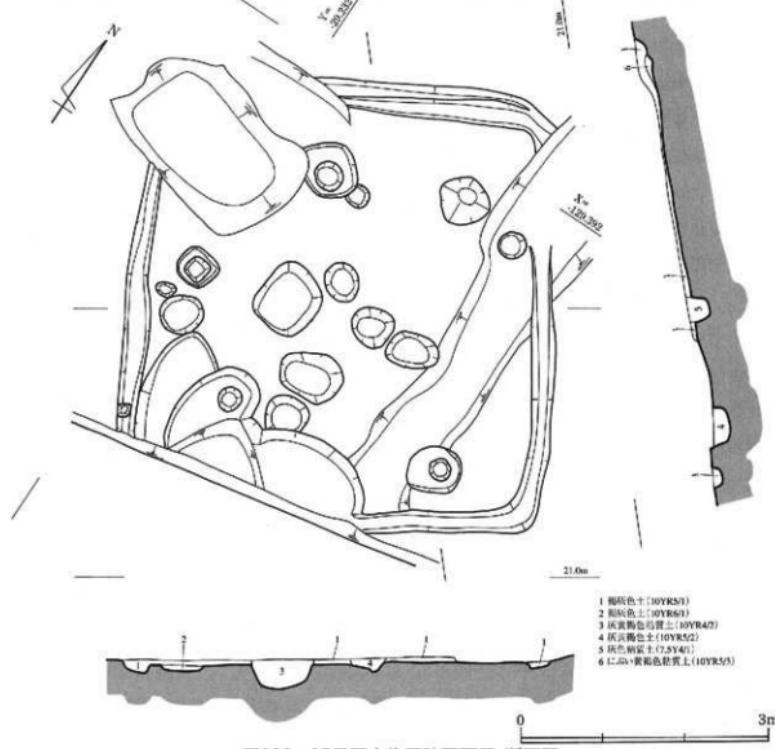


図130 15号竪穴住居跡平面図・断面図

住居跡中央部には径0.4m、深さ0.1mの土坑を検出し、北側にも浅い土坑を検出した。また主柱穴と考えられる径0.3mと0.5mのピットを2ヶ所検出した。位置から推定して他の2ヶ所は搅乱で破壊されたと考えられる。

出土遺物（図128） 13号竪穴住居跡の埋土から出土した磨石567は、先端に使用痕がある。自然石を加工することなく使用する。丹波地域から搬入されたホルンフェルス。

568・569は11号竪穴住居跡から出土した。手焼形土器568は、覆部の装飾面細片。粗砂粒を多量に含む。装飾面には二条の突帯を貼付け、その間に貼付円形浮文が残る。庄内期新相に類例がある。内面ナデ仕上げ、外面は剥離で調整不明。

15号竪穴住居跡（図130・P L36） 15号竪穴住居跡は99-3調査区、K7-6-D13-j3・4で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡を南北方向に旧道路側溝横切り、床面まで搅乱を受けている。西コーナー部は搅乱を受け、南コーナー部付近は調査区の外に伸びる。北西辺を除いて床面近くまで削平を受け、壁溝だけを検出した。周辺に同時期の竪穴住居跡は検出できず、最も近い11号竪穴住居跡の南50mに位置する。主軸の方向は、N-33°Wである。検出面の標高は北西辺で20.2m、それ以外では20.0mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北西辺約5m、北東辺5.2m、南東辺2.1m以上、南西辺3.3m以上を測る。壁溝は各辺に沿って検出した。幅0.2~0.3m、深さ0.15mを測る。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。埋土は褐色土で、0.05m残存する。

住居跡内の遺構は、南壁面中央部に接し、推定0.8×1.7m、深さ0.25mの半円形土坑を検出した。住居跡中央部では0.4×0.5m、深さ0.15mの土坑を検出した。また、住居跡内から時期の特定できないピット等を多数検出したが、住居跡に伴う柱穴を特定することができなかつた。

住居跡内埋土から僅かに遺物が出土したが、図化し得るものはなかった。

18号竪穴住居跡（図131・P L37） 18号竪穴住居跡は99-4調査区、K7-6-D13-b2で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡の南端に搅乱を受けている。19号竪穴住居跡の北西2mに位置する。主軸の

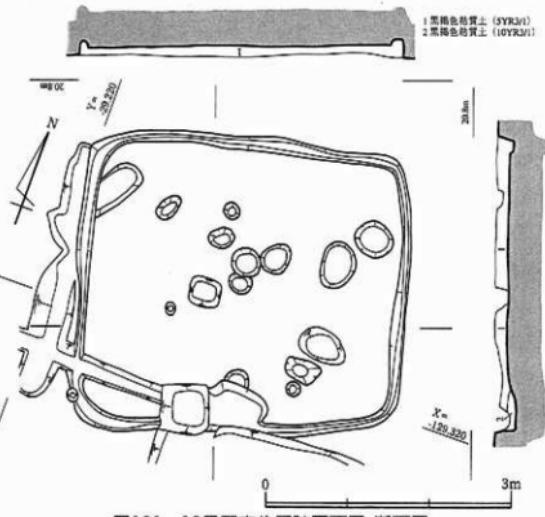


図131 18号竪穴住居跡平面図・断面図

方向は、N-18°-Wである。検出面の標高は20.5mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北辺3.8m、東辺3.3m、南辺3.9m、西辺3.6mを測る。

壁溝は各辺に沿って検出した。幅0.1~0.2m、深さ0.1mを測る。検出面から床面までの深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色粘質土単層である。

住居跡内の遺構は、南壁中央部に接し、0.5×0.8m、深さ0.15mの略方形の土坑を検出した。

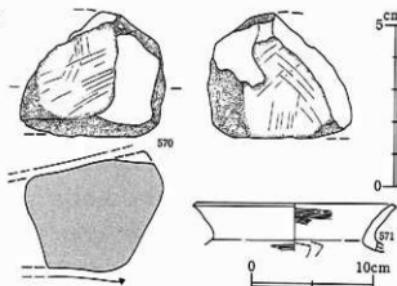


図132 18号竪穴住居跡出土遺物

住居跡中央部では径0.3m、深さ0.1mのピットを検出した。また、住居跡内から時期の判明しないピット等を多数検出し、住居跡に伴う柱穴を特定することができなかった。

住居跡内埋土から少量の遺物が出土し、図化したものに甕571と砥石570がある。

出土遺物（図132） 砥石570は大きく欠損しており、本来の大きさと形態は不明。表裏二面の使用面が確認できる。砂岩製。東部揖津地域の淀川に注ぐ河川の河原で採取できる石材。叩き臺571は、やや細筋叩きである。内面は工具による強いナデ仕上げ。

19号竪穴住居跡（図133・P L38） 19号竪穴住居跡は99-4調査区、K7-6-D13-c2で検出した方形の竪穴住居跡である。住居跡の北側を搅乱が横断し、北壁を全て破壊している。地山の削平が著しく、住居跡埋土が部分的に0.02~0.05m残存していた程度で、竪穴壁は残らず、壁溝と床面に掘られたピット等が残存していた。

18号竪穴住居跡の南東2mに位置する。

主軸の方向は、座標北である。検出面の標高は20.5mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、東・西辺2.9m以内、南辺2.9mを測り、北辺は検出できなかった。

壁溝は各辺に沿って検出し、幅0.15m、深さ0.15mを測る。床面の標高は20.5mである。僅かに観察できる住居跡埋土は、黒褐色粘質土である。

住居跡内の遺構は、南壁中央部に接して方形の土坑を検出した。土坑は二段に掘られ、上段は0.7×0.9mの長方形を壁溝の深さに掘り下げ、その中に0.4×0.5mの下段を床面から0.25m掘り下げている。住居跡

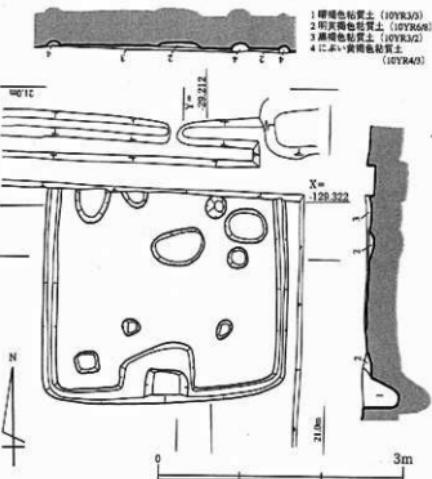


図133 19号竪穴住居跡平面図・断面図

内ではピット、土坑等を検出したが、遺物が出土せず、住居跡に伴う柱穴等の遺構を特定することができなかった。

SK4945(図134・P.L38下)

SK4945は、99-4調査区、K7-6-D13-c4で検出した土坑である。平面形は、一辺2.6mを測る正方形で、壁面は斜めに傾斜し、底は平坦である。検出面からの深さ0.2mを測り、遺構内からピット、土坑が検出された。

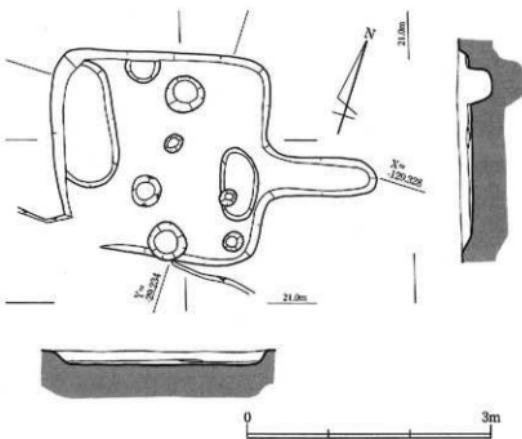


図134 SK4945平面図・断面図

図135に示す台石と古式土師器の底部が出土し、竪穴住居跡と同時期の遺構であるが、一辺2.6mと小規模なこと、壁溝、柱穴等明確な上屋構造を構成する遺構を検出できなかったため、土坑として報告しておく。

出土遺物(図135) 572は、表面に部分的に砥石としての使用面が確認できる。粉岩製。表面は被熱のため赤変する。

底部573は、粗砂を著しく含む在地胎土の叩き壺と考えられる。

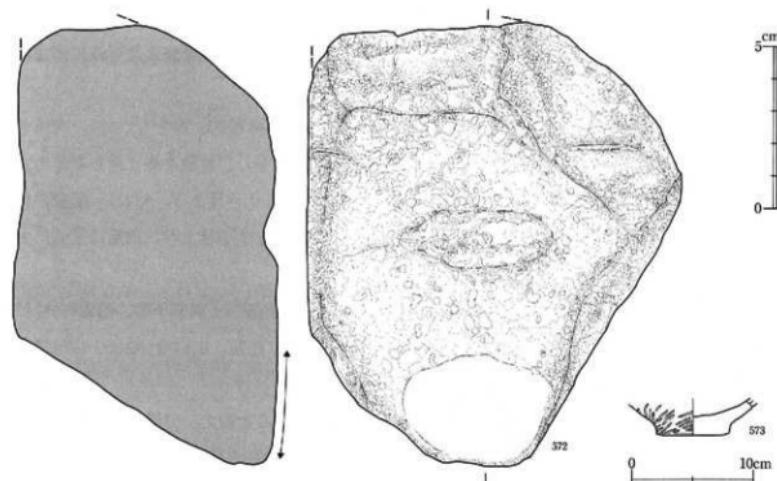


図135 SK4945出土遺物

弥生時代の方形周溝墓のいくつかには、古式土師器を出土する周溝があり、図97及び図125に示している。この中でも22号方形周溝墓（SD4553）、23号方形周溝墓（SD4888）、18号方形周溝墓（SD2925・3424・3430）からは多量の土器が出土した。これらの遺構の近くには、同時期の竪穴住居跡が検出されることから、埋没し残っていた当時の溝（周溝）に、住居から廃棄された遺物であると考えることができる。

SD4888（図136・P.L39・40） SD4888は、99-4調査区、K7-6-D13-b・c3・4で検出した溝である。本遺構は本来23号方形周溝墓の周溝として掘削されたものであるが、ここでは時期の違う方形周溝墓の名称を使用すると誤解を生じかねないので、本遺構及び後述する方形周溝墓周溝出土の古式土師器についての遺構説明は、調査時に与えた遺構番号を用いる。

本遺構の掘削は、弥生時代中期にもかかわらず、古墳時代前期になってもなお完全に埋没せず、浅く深んでいたようである。図124に示す範囲、北東周溝の東半部、南東周溝、南西周溝から多くの古式土師器が出土した。

SD4888東側で特に多数の遺物が出土し、図136出土状況図に示した。遺物は溝のほぼ中央部を延長方向に並んで検出された。図51C-C'断面で示す最上層暗赤褐色粘質土に、この時期の遺物が包含され、検出面から深さ0.25mの溝が開口していたことがわかる。

本遺構は、18・19号竪穴住居跡の西側に近接し、18号竪穴住居跡とは6m隔てるのみである。また同時期のSK4945は南側3mに位置する。

このように古式土師器を多量に出土する方形周溝墓の周溝を見て行くと、SD4553（22号方形周溝墓）は、6号竪穴住居跡を含む住居群から15mの距離、SD2925・3424・3430（18号方形周溝墓）の各溝は、11・13号竪穴住居跡とほとんど重複する位置、12号竪穴住居跡に5mの距離、SD2395（20号方形周溝墓）は15号竪穴住居跡に南12mの距離と、各々近接した位置に住居跡等の生活施設が存在する。

SD4888出土遺物（図137～139） 短頸直口壺には、口縁端部に面をもつ577、内傾する面をもつ578、丸く終わる579の三者がある。578・579は橙色を呈し、粗砂を多く含む在地のものである。後者体部は叩き（3条/cm）仕上げ、内面は工具によるナデ仕上げ。577は、灰黄褐色を呈し、焼成も良好で他と異なる。体部外面はハケ目の後、丁寧なナデ仕上げ、内面は工具によるナデ仕上げ。

広口壺580も橙色、粗砂を多く含む在地産。内外面ともに摩滅著しく調整不明。短頸壺581は、灰黄褐色を呈し、焼成も良好。ハケ目仕上げであるが、造りは粗雑。広口壺582は、口縁下部に粘土を貼り付けて拡張する。内外面とも摩滅著しく調整不明。

壺583は、にぶい橙色を呈し、若干の砂粒を含むが比較的精良な胎土。口縁内外面にクシ描き波状文（10条）を二段に巡らせ、端部に刻み目文を施す。端部の刻み目には木目単位が観察でき、同様のクシ状工具を使用した可能性がある。内面は丁寧なナデ仕上げ、外側は擬方向のヘラミガキ。584は壺か器台。にぶい橙色を呈し、精良な胎土。口縁内外面にクシ描き波状文を巡らせる。

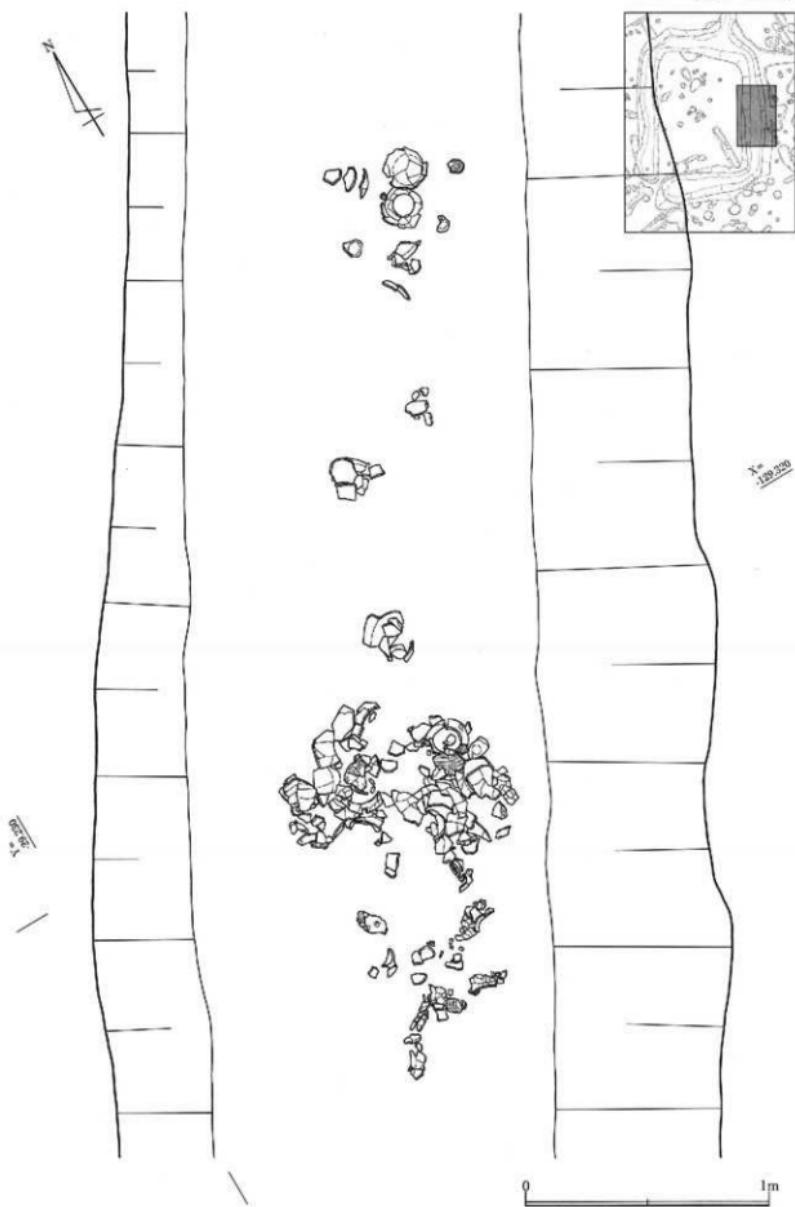


图136 SD4888(23号方形周满墓) 遗物出土状况

内外面ともにハケ目調整を施し、外面は丁寧にナデ消して仕上げる。

二重口縁壺585は、橙色を呈し、1~3mm程度の石英、チャートを多く含む。口縁部外面は、摩滅が著しいがクシ描き波状文の痕跡が残る。頸部下端に棒状工具により刺突文を巡らせる。外面は縦方向ヘラミガキ、内面は摩滅著しく調整不明。二重口縁壺586・587も、やはり橙色を呈し、粗い石英、チャートを多く含む。内外面とも摩滅著しく調整不明。588は壺と考えられる。にぶい褐色を呈し、粗い石英、チャートと微細なクサリ縞を含む。内外面とも摩滅著しく模様の有無、調整不明。搬入品。

底部589は、粗い角閃石を多量に含む生駒西麓産胎土で、茶褐色を呈する。内外面とも摩滅著

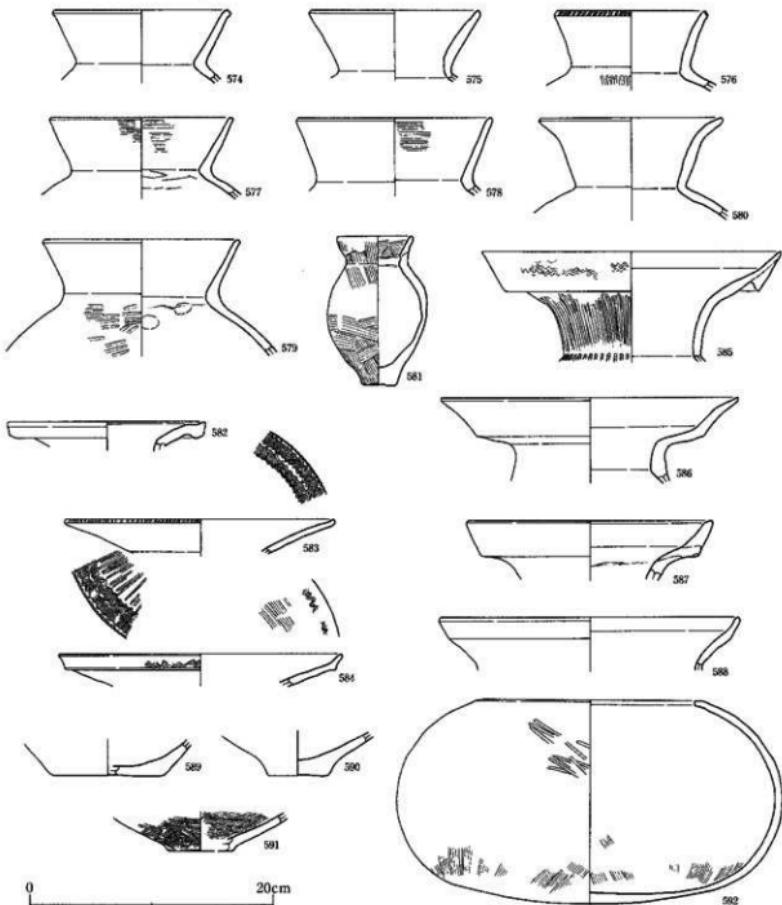


図137 SD4888出土遺物1

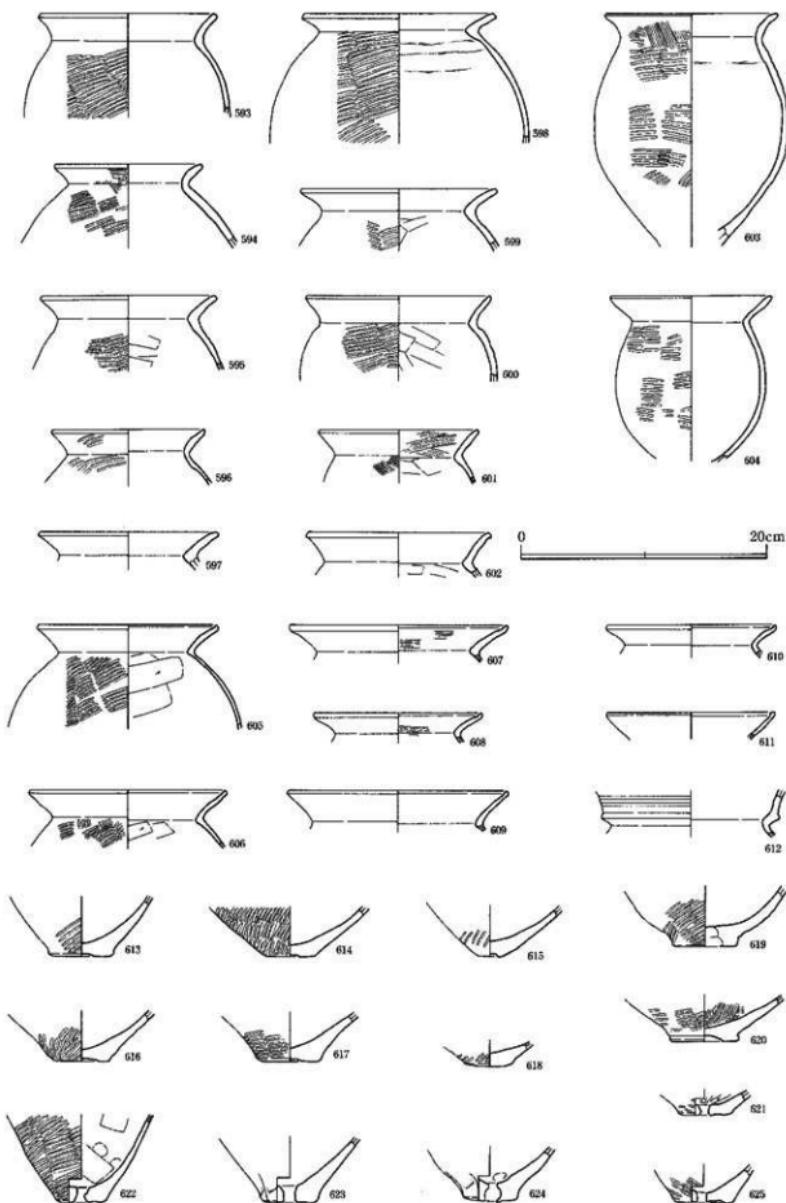


図138 SD4888出土遺物2

しく調整不明。弥生土器の混入品の可能性もある。底部590は、粗砂を多く含む在地産。外面とも摩滅著しく調整不明。底部591は、明褐色を呈し、若干の石英、チャート、クサリ礫を含む。器壁は薄く、壺と考えられる。体部外面に庄内期後半以降によく見られる極微細なヘラミガキを分割して施し、底面はヘラ削りで器壁を減じる。この種のヘラミガキは、本遺跡にはほとんど見られない。内面はハケ目。搬入品。

無頸壺592は、極めて異形品。楕円形の例はあるが、上面觀は正円を呈し類例を知らない。丸底であることから、古墳時代初頭の範疇で考える。体部外面上半にヘラミガキ、下半および内面はハケ目仕上げ。浅黄橙色を呈し、石英、チャートを含む。

叩き壺593～604は、いずれも右上がりの太筋の叩き、体部内面は工具ナデ仕上げ。口縁部は丁寧な横ナデ仕上げで、口縁叩き出し痕跡の残さないことが一般的だが、596のみ口縁叩き出し技法による。にぶい黄橙色～灰黄褐色を呈するものが一般的である。しかし、603のみは赤褐色を呈し、体部は細身で口縁部外面に粗いハケ目を施す等、異質である。

河内型庄内壺605～611は、すべて雲母、角閃石を含む生駒山西麓産胎土である。体部内面は、ヘラ削りで屈曲部に鋭い稜線を形成する。口縁端部はつまみ上げるもののが基本であるが、609は面取りしており外傾する面をもつ。叩き目が残るのは605・606で、両者ともに単位は7条/cmとやや細筋であり、米田分類C類で、庄内3式程度。611は、口縁が内湾し、端部も若干丸く肥厚させており、本遺跡の庄内壺では最も新しい。

壺612は、口縁外面に疑凹線を巡らせる。横ナデ仕上げ。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、多量の石英細粒と若干の長石を含みモロモロの胎土。搬入であることは間違いない、若干外反することと、北陸系壺特有の口縁部内面指頭痕が見られないことから北近畿系と考えておきたい。

底部613～620は、粗砂粒を多量に含む在地のもの。613～618は壺と考えられ、前述の叩き壺と対応するものである。しっかりとしたドーナツ底が基本で、正置できる。618のみ平底。外面は叩きで、弱いナデを施す場合もある。内面は工具ナデ仕上げ。叩き単位は、太筋のもの614(2.5条/cm)、やや太筋のもの617(3条/cm)、やや細筋のもの616(3.5～4条/cm)等様々。613の底面には、木葉痕が残る。620は、壺と考えられる。やはり重厚なドーナツ状を呈する。有孔の底部621～625は、いずれも焼成前に内部から穿孔する。叩き仕上げのもの622・625、叩きを若干ナデ消すもの621、面取りするもの623・624がある。内面は工具ナデが基本であるが、621のみヘラ削りである。622は直線的に外傾する体部の鉢と考えられる。ドーナツ底は625のみで、壺とは明らかに別して作られている。煤の付着するものはない。

有段高杯626・627は、形態は類似するものの、胎土と調整において精製品と粗雑品がある。626は、やや精良な胎土で明るい橙色を呈する。体部内面には横方向のやや太筋のヘラミガキ、外面は摩滅剥離が著しいが、部分的にやや細筋のヘラミガキを横方向に施すようである。627は、粗砂粒を含む通常の胎土で灰黄色を呈する。体部内面には放射状のやや太筋のヘラミガキ、外面は体部下面にヘラ削り、体部にハケ目の後、全面に縱方向のやや太筋のヘラミガキを口縁部、体部

外面、体部下面と三分割して施す。なお、脚部上面に刻みを入れて、体部と接合する。628も高杯と考えられる。粗砂粒を含む通常の胎土。外面は横方向、内面は横ハケの後、放射状のやや太筋のヘラミガキ仕上げ。

脚台629は、粗砂粒を含む通常の胎土で、にぶい黄橙色を呈する。外面は精製品にみられる横方向の極細ヘラミガキを施す。碗形高杯脚台630は、精良な胎土で橙色を呈する精製品。内外面に施すハケ目は鋭く細かい(16条/cm)もので、他の個体には見られない。脚柱には面をつくる。外面は横方向の極細ヘラミガキ仕上げ。体部との接合に伴う棒突き痕がある。搬入品である。

631、632、633、634は、小型丸底壺あるいは鉢。631~633は、粗砂粒を含む通常の胎土。631は摩滅で調整不明。632は体部外面ハケ目、口縁部横ナデ。633は外面叩き、口縁部は叩き出す。内面ナデ仕上げ。634は若干の粗砂粒を含むが胎土は緻密、橙色を呈する。体部外面は縱方向ハケ目の後、体部外面と口縁部内外面に横方向の極細ヘラミガキを施す。体部内面は削りか。

大型鉢635は、口径に比して深い体部である。内外面共に太筋のヘラミガキを寄に施す。口縁部内外面、体部外面、体部内面上端が横方向、体部内面が放射状である。

小型器台636~641は、精製品のないことが大きな特徴になる。体部貫通孔のないもの(637・

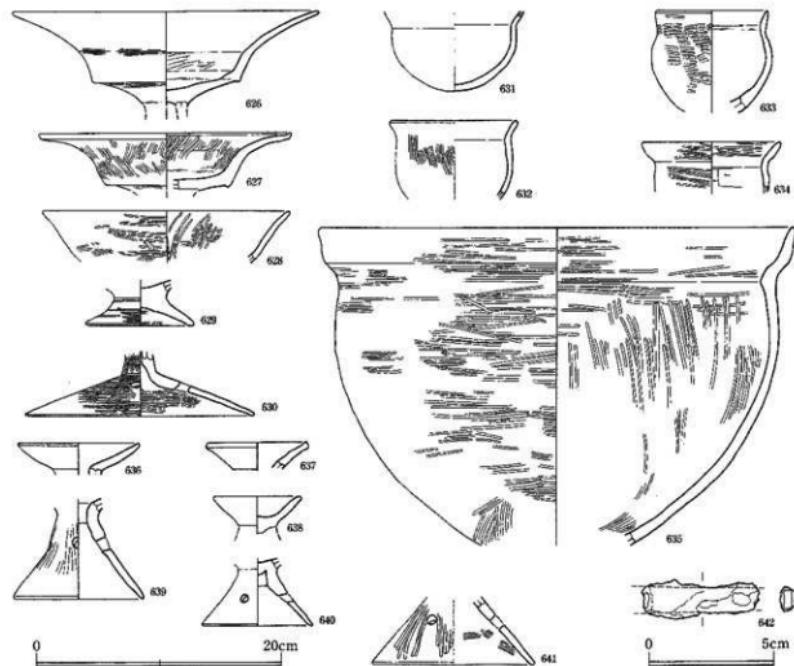


図139 SD4888出土遺物3

638・640) が主体で、636・639も充填部分が剥落した可能性がある。636~640は、石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製胎土。638はナデ仕上げか。脚台の可能性もある。639は外面に縦方向のやや太筋ヘラミガキ、内面は剥離。他の個体は剥離のため調整不明。641は、砂粒を多量に含む通常の胎土で精製品ではない。外面に縦方向のやや太筋ヘラミガキ、内面はハケ目。スカシ数は不明。

鉄器642は、7mm×3mmの断面長方形の棒状品で、器種不明。両端とも欠損する。

S D 4 5 5 3 出土遺物(図140) 二重口縁壺643・644は、胎土、施文单位の一一致から同一個体と考えられる。灰白色を呈し、石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製胎土。口縁外面と体部上半に庄内期に通有の山形のクシ書き波状文と直線文を交互に、口縁部内面にクシ書き波状文を巡らせる。二個一対の竹管円形浮文を四方に巡らせる。

広口壺645は、浅黄橙色を呈する明るい色調で、器壁薄く、焼成良好。外面やや細かい縦方向ヘラミガキ、内面は横ハケを施す。広口壺646も明るい色調で、器壁薄く焼成良好。直口壺647・648は、粗砂を著しく含み、明るい橙色を呈する。剥離のため調整は不明ながら、648の外面上には縦方向ヘラミガキの痕跡が観察できる。小型壺649も粗製胎土。口縁部横ナデ仕上げ。

壺652は、外面ナデ仕上げ、内面ナデ上げ、口縁部は強い横ナデ。明橙色を呈する。叩き壺650・651・653~655は、いずれも石英、チャート主体の粗砂を多く含む粗製胎土である。橙色～にぶい橙色を呈する。体部外面は叩き仕上げで、叩き単位は653のみが3条/cmで、それ以外は2~2.5条/cmと太筋である。口縁部はいずれも丁寧な横ナデで、叩き出しの有無は不明。内面は斜上方へのハケ目650、他は工具ナデ仕上げで、ケズリは見られない。口縁端部は、654が丸く終わり、他は若干つまみ上げ気味である。

655はドーナツ状を呈した平底で、分割成形が確認できる。有孔鉢656は、粗砂を多く含む粗製胎土。外面叩き(3条/cm)、内面ハケ目仕上げ。焼成前に外から内側に穿孔する。煤付着なし。底部657は、粗砂を含むドーナツ底。内面ハケ目。底部658は、3mm程度の粗砂を多く含む突出した平底。内面ナデ仕上げ。底部659は、若干の微砂を含むくぼみ底。内面ハケ目、外面上はヘラミガキ。手焙形土器の可能性がある。底部660は、体部を成形した後に底部を充填する。内面ハケ目、外面上はヘラミガキと思われる。底部661は、手づくねにより、上げ底にする。底面も丁寧にナデ仕上げる。体部を成形した後に底部を充填するよう、製塙土器と技法、形態は同じであるが、製塙土器特有の二次焼成による赤変はない。

不明土器662は、灰白色を呈し、焼成前の二孔を有する。内面はハケ目の後ナデ仕上げ、外面上はナデ仕上げ。壺蓋の可能性がある。底部663は、ややくぼみ底気味。内面ハケ目、外面部はヘラ削り、体部は叩き目を丁寧にナデ消す。底部664は、粗砂を含む平底。内面ハケ目、外面上はナデ仕上げか。底部665は、極めて粗い砂粒を多く含むドーナツ底に、焼成前に穿孔したもの。外面叩き、内面剥離。

脚台666は、粗砂を多く含む在地の粗製胎土。スカシなし。内外面とも剥離で調整不明。鉢667

は、粗砂を多く含む粗製胎土で丸底。外面はやや粗い叩き（3条/cm）の後、底部付近をナデ消すのみで仕上げる。内面ハケ目。底部668・669はドーナツ状を呈する。外面は叩き仕上げ。内面は前者がハケ目、後者は丁寧なナデ仕上げ。脚台670は、粗砂を多く含む。四方スカシ。体部内面、柄内面ともハケ目仕上げ。

SD 3424・2925・3430出土遺物（図141-671～687・704・705） 短頸直口壺671は、内外面ともにヘラミガキ仕上げ。成形の最終段階で外面屈曲部に粘土を付加して補強する。粗砂粒を多量に含む。直口壺672は、調整不明。粗砂が著しく、2～5mmの小礫も多い。

二重口縁壺673・674は、摩滅のため調整不明。674は橙色を呈し、質感、形態からも東阿波型壺の可能性が濃厚ながら、肉眼観察によれば結晶片岩は含まれず断定しがたい。小型広口壺675は、外面横方向のヘラミガキと考えられるが、図示しがたい。他は調整不明。若干のクサリ碟を含む。壺676は、石英、チャート主体の粗砂を多量に含む。断面楕円形の貼付突帯、および斜格

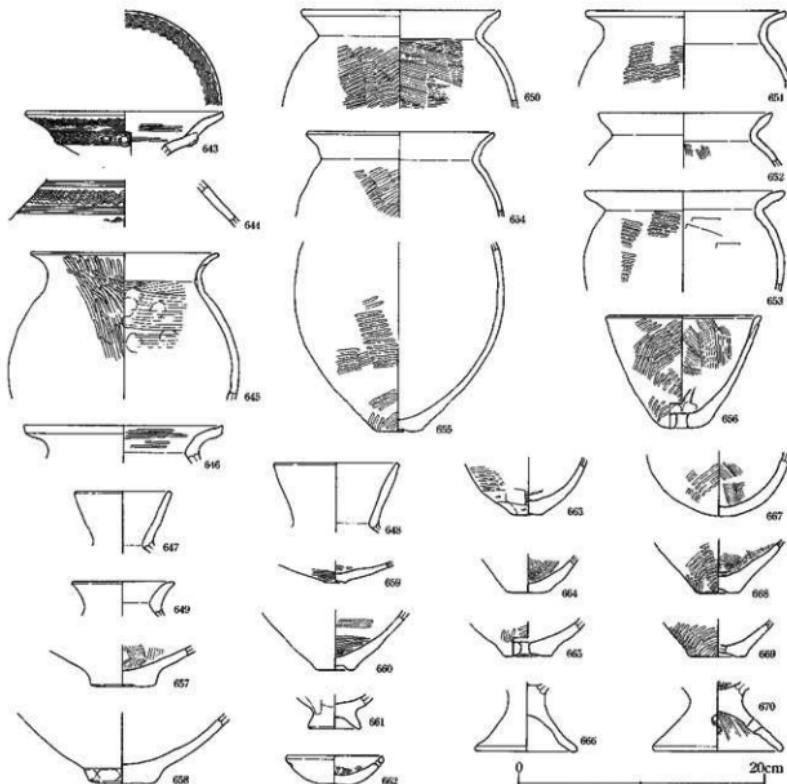


図140 SD4553出土遺物

子の刺突文は類例を知らない。

底部677は、くぼみ底で、外面は縦方向ヘラミガキ仕上げ。内面は剥離で調整不明。底部678は、底面を削ることでやや上げ底気味を呈する。また、外面はヘラ削りの後、ヘラミガキで仕上げており、特異である。内面はナデ仕上げ。にぶい橙色を呈しており、東方からの搬入品の可能性がある。

壺679は、形態から初期の布留甕と考えられるが、体部内面は丁寧なナデ仕上げ。他は摩滅のため調整不明。灰白色を呈し、粗砂を多量に含む。叩き甕680は、口縁は叩き出す。今回報告資料で、口縁部叩き出し技法が観察できるのは唯一である。橙色を呈し、多数の粗砂とともにクサリ疊を含んでいることから外部からの搬入土器である。調整不明。鉢681は、体部外面叩きの後、

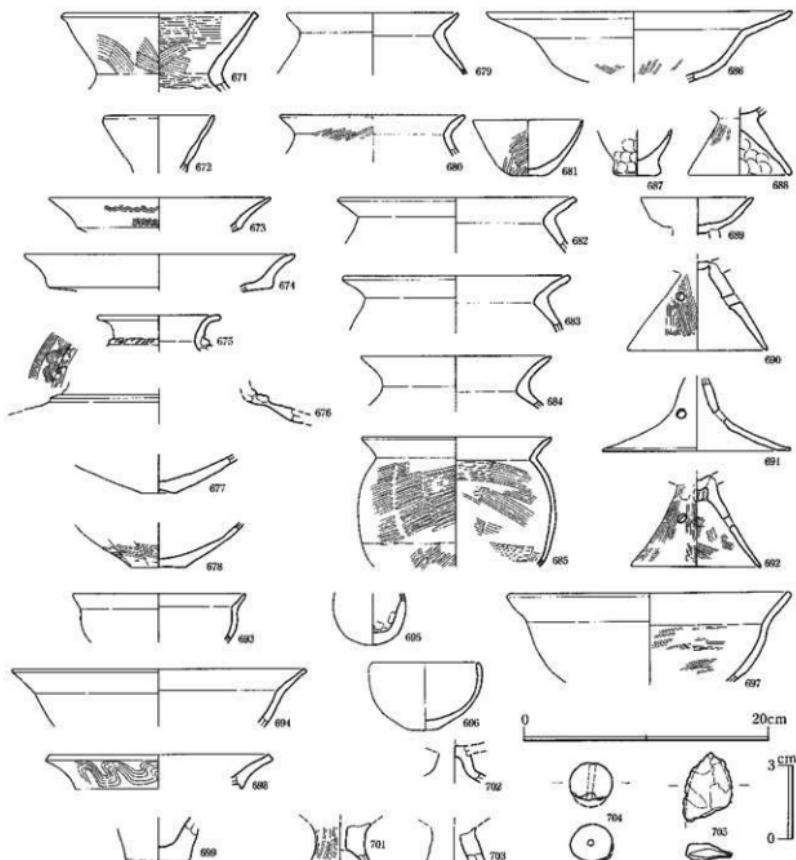


図141 SD3424-2925-3430-2395出土遺物

ナデ仕上げる。内面は剥離で調整不明。粗製胎土の在地産。壺682・683・684は、いずれも口縁部横ナデ、体部外面ナデ仕上げ、内面工具ナデ仕上げである。石英、チャート主体の粗砂を多く含む。口縁端部は、初期の布留壺のように外に引き出すもの682、丸く終わるもの683、尖らせるもの684とバラエティーがある。叩き壺685は、外面に分割成形の叩き仕上げ、内面ハケ日。器壁は大変薄いことが特徴である。

686は、二段屈曲高杯と考えられる。体部内面は放射状、外面は左斜上方へのやや細い単位のヘラミガキ。口縁部は、摩滅のため調整不明。石英、チャート、長石の粗砂を多く含むことから在地産と考えられる。

687は、小型の壺、あるいは鉢。内面ナデ仕上げ、外面は不明。若干の砂粒を含み、灰白色を呈する。内面に赤色顔料が付着するも、内面朱付着土器に往々見られるような、外面への煤の付着や被熱の痕跡はない。

小型器台688は、器壁が厚く、重量感がある。粗い砂粒若干を含むが、やや精良な胎土。スカシ孔はなく、外面は太い単位の縦方向ヘラミガキ仕上げ。689は高杯、あるいは台付き鉢と考えられる。剥離著しく調整不明。小型器台690は、やや精良胎土で、器壁は厚く重量感がある。クサリ碟を含み、搬入品と考えられる。体部外面は縦方向のやや太い単位のヘラミガキ、内面はナデ仕上げ。高杯691は、摩滅著しく調整不明。円盤充填技法。スカシ孔は4方の可能性もある。小型器台692は、やや精良胎土で、若干の石英、チャートの粗砂を含むことから在地産と考えられる。体部外面は縦方向のハケ目の後、縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面はハケ目。

小型丸底鉢693は、摩滅のため調整不明。胎土は精良。鉢694は、石英、チャート主体の粗砂を若干含む在地胎土。摩滅のため調整不明。ミニチュア土器695は、内面指頭痕、外面ナデ仕上げ。鉢696は、内外面摩滅で調整不明。粗砂、小碟を多量に含む。2.5cmの底部を残す。鉢697は、外面調整不明、内面は左斜上方へのヘラミガキ仕上げ。

土玉704は、いびつな球形の小型品。鉄器705は、鐵錐の先端部である。鍛造品。錐の彫れにより、本米の厚みは残さないが、断面形態はレンズ状で錐は形成しないようである。

S D 2 3 9 5 出土遺物（図141-698～703） 二重口縁壺698は、特徴的な波状文を巡らせる。若干のクサリ碟を含む。調整不明。高杯701は、体部外面を太い単位の縦方向ヘラミガキで仕上げる。低脚高杯702は、内外面とも剥離のため調整不明。碗形の体部に挿入するものである。胎土はやや精良。高杯703は、調整不明。粗砂、小碟を多量に含む。

その他の遺構（図125） 積穴住居跡、土坑以外の古式土師器を出土する遺構は、ピット、溝等があり、図化できる遺物を図142に示した。鉢706はS D 3 4 3 0の北側に位置するS K 5 2 9 3から出土した。壺707はS D 4 8 8 8に隣接するS K 4 8 9 1から出土した。この遺構は、23号方形周溝墓の墳丘部分に位置し、検出面が段丘面であることから、方形周溝墓の墳丘は古墳時代前期には削平されていたことがわかる。壺708はP 3 4 2 7、壺709はS D 2 9 2 9に隣接するS K 3 7 1 8、鉢710は12号積穴住居跡西側のS K 2 5 6 5、壺711は99-1調査区

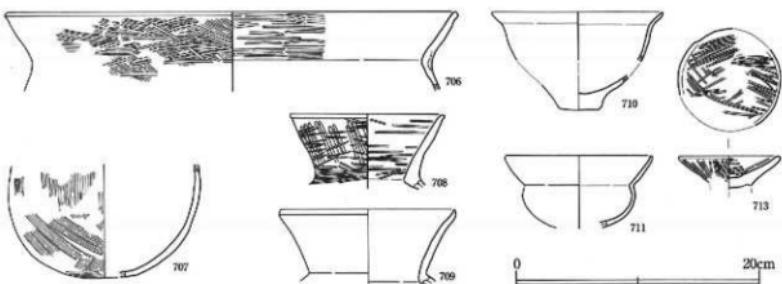


図142 古墳時代前期遺構・包含層出土遺物2

南西部のSK1631、壺712は99-2調査区のP3356から出土した。器台713は包含層出土である。

出土遺物（図142） 大型鉢706は、口縁内外面と体部外面にハケ目その後、横方向のヘラミガキを施す。石英、チャートを含み、焼成は良好。

短頸直口壺708は、口縁外面に縱方向のやや細かいヘラミガキの後、横方向に極微細なヘラミガキで仕上げる。内面はやや細かい横方向のヘラミガキ。短頸直口壺709は、端部をややつまみ上げる。内外面摩滅で調整不明。鉢710は、粗砂を多く含む粗製胎土。内外面摩滅で調整不明。

小型丸底壺711は、砂粒を多く含むやや粗製胎土。器壁は薄く、浅黄橙色のやや明るい色調を呈す。内外面摩滅で調整不明。

壺712は、明るい橙色を呈す。口縁外面と体部内外面ハケ目、口縁外面は摩滅で調整不明。長胴と考えられ、混入の可能性が高い。小型器台713は、口縁端部を丸く終わらせ、重量感のある極めて異質なもの。極微細なヘラミガキながら、内面に横方向に分割的に施し、外面には縱方向に施す。明赤褐色(Hue5YR5/6)を呈し、通常胎土で精製品ではない。

■古墳時代中期 この時期の遺構は非常に少なく、99-1・3調査区の北側と、99-2調査区で僅かに検出することができた。遺構の種類としてはピット、土坑、溝等がある。検出遺構、遺物ともに非常に少ないため、この時期の人々の生活を窺い知ることは困難である。（検出した遺構の位置は、古墳時代中期として図示するのは少なく、また離れているので、図170歴史時代遺構平面図3及び図196歴史時代遺構平面図6内に遺構番号を枠で囲んで表示した。）

SK2874（図143・P L43） SK2874は、99-1調査区、K7-6-D13-e9で検出した土坑である。平面形は

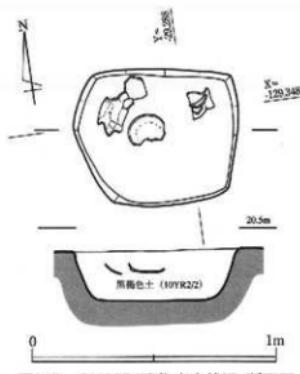


図143 SK2874遺物出土状況・断面図



図144 SK2874出土遺物

略方形を呈し、 $0.55 \times 0.7m$ 、深さ0.2mを測る。断面の形状はU字状を呈し、底は平坦である。埋土は黒褐色土単層である。検出面の標高は20.4mである。

遺構底から浮いた状況で須恵器と土師器が出土した。図144-714・715は土師器壺である。714は球形の体部に外反する口縁部端は丸く納める。715は長胴化した体部に直線的に外反する口縁は厚く作る。図144-716は須恵器杯蓋である。焼成は不良で天井部と口縁部との境の稜は明確でない。

SK4428 99-3調査区、K7-6-D13-d2で検出した土坑である。 $1.0 \times 1.8m$ 、深さ0.1mを測る略方形の平面形である。検出面の標高は20.5mを測る。土師器の壺717が出土した。隣接するSD4431から壺718が出土した。

P2152 99-1調査区、K7-6-D13-g8で検出したピットである。径0.45m、深さ0.15mを測る。検出面の標高は20.4mである。ピットから719の円筒埴輪片が出土した。突堤は残存しないが、B種ヨコハケとヘラ記号が見られる。

P3322 99-2調査区、K7-6-E13-b4で検出したピットである。一辺0.7mの方形の掘形に径0.25mの柱痕跡が見られる。検出面の標高は19.2mである。杯身720が出土した。



図145 古墳時代中期遺構出土遺物

5. 歴史時代の遺構と遺物

今回の調査地で、検出した歴史時代の遺構は、飛鳥時代から中世までの各時期のものを検出した。このうち奈良時代の遺構はほとんど検出されなかつたが、各時期を通じて建物跡が検出されたことから、古墳時代以降、生活域として当該地が使われてきたことがわかる。中世以降の遺構検出例がなくなるのは、本遺跡が立地する段丘面が初めて灌漑されるに至り、耕地化されていったことを推測させる。

飛鳥時代の遺構は、調査区中央部を東西に横切る S D 5 0 5 3 を境に、その南側に検出例を見る。堅穴住居跡 4 棟を始めとして、土坑、溝、ピット等を検出した。

奈良時代は少量の遺物が包含層から出土したが、この時期に帰属する遺構は検出できなかつた。調査地から 50m 東に位置する平野小学校から大溝、落ち込み等が検出され、出土した多量の土器の土器の中に、「稻持」「伊奈持」と書かれた墨書き土器や線刻土器が含まれていた。

平安時代の遺構は調査地全体で検出された。この時期の属する掘立柱建物跡 7 棟、土坑、溝、ピット等があり、北半で検出された弥生時代の方形周溝墓のうち、いくつかの周溝はこの時期になってようやく完全に埋没する。

中世の遺構は、6 号掘立柱建物跡付近の 9 8 - 1 区南西側と、9 9 - 3 区南側の 2 ヶ所の限られた範囲で検出された。掘立柱建物跡 1 棟、土坑墓、土坑、ピット等である。

各時期の遺構は以上に述べたような種類があるが、出土遺物が無く、時期の特定できない掘立柱建物跡等の遺構が存在し、また遺構相互の位置関係を明確にするため、調査区北半部を 2 枚、南半部を 4 枚の遺構図に分け、歴史時代を通じて各遺構、遺物について述べていく。

■調査区北西部の遺構（図146） 9 8 - 1 調査区及び 9 9 - 4 調査区の北半部の遺構図である。本図に示された両調査区の調査年次が離れているため、付された遺構番号も大きく離れている。これは調査進行に伴い調査順に遺構番号を付し、また方形周溝墓、掘立柱建物跡の番号も認識順に付したため、時代あるいは遺構相互の関連に間わり無く番号を付した結果であり、それ以上の意味はない。歴史時代の遺物を出土した遺構を赤色で示した。

今回の調査では、総数 24 棟の掘立柱建物跡を検出した。本図の範囲では、出土遺物が少なく、帰属時期を明確にしえないものも含めて 10 棟の掘立柱建物跡を検出した。1・2 号掘立柱建物跡と 19・20 号掘立柱建物跡は、隣接する東西棟と南北棟の建物で 1 つの建物群を構成する。正方位を意識したもの 8 棟、外れるもの 2 棟を数える。また、図 147 以下に示す各掘立柱建物跡の平面・断面図は 60 分の 1 に統一している。

1号掘立柱建物跡（図147） 1 号掘立柱建物跡は 9 8 - 1 調査区、K7-6-C13-d1 で検出した 2 間 × 3 間の掘立柱建物跡である。主軸の方向は N-85°-E である。検出面の標高は 20.6m を測る。

柱穴は、一辺 0.35m 前後の隅丸方形の掘形を有し、径 0.15 ~ 0.2m の柱痕跡を検出した。深さ 0.2 ~ 0.35m を測る。梁間 3.4m · 3.9m、桁行 5.6m を測り、床面積は約 20m² である。



図146 歴史時代遺構平面図

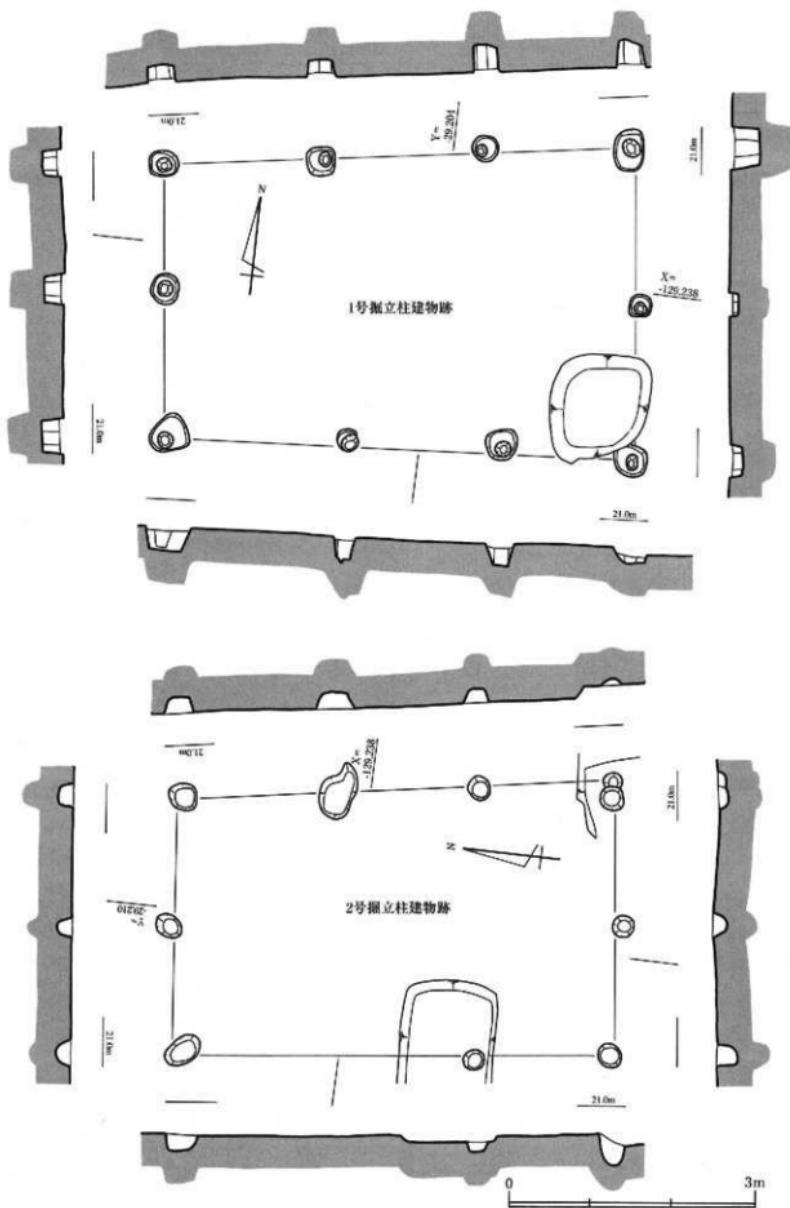


図147 1・2号掘立柱建物跡平面図・断面図

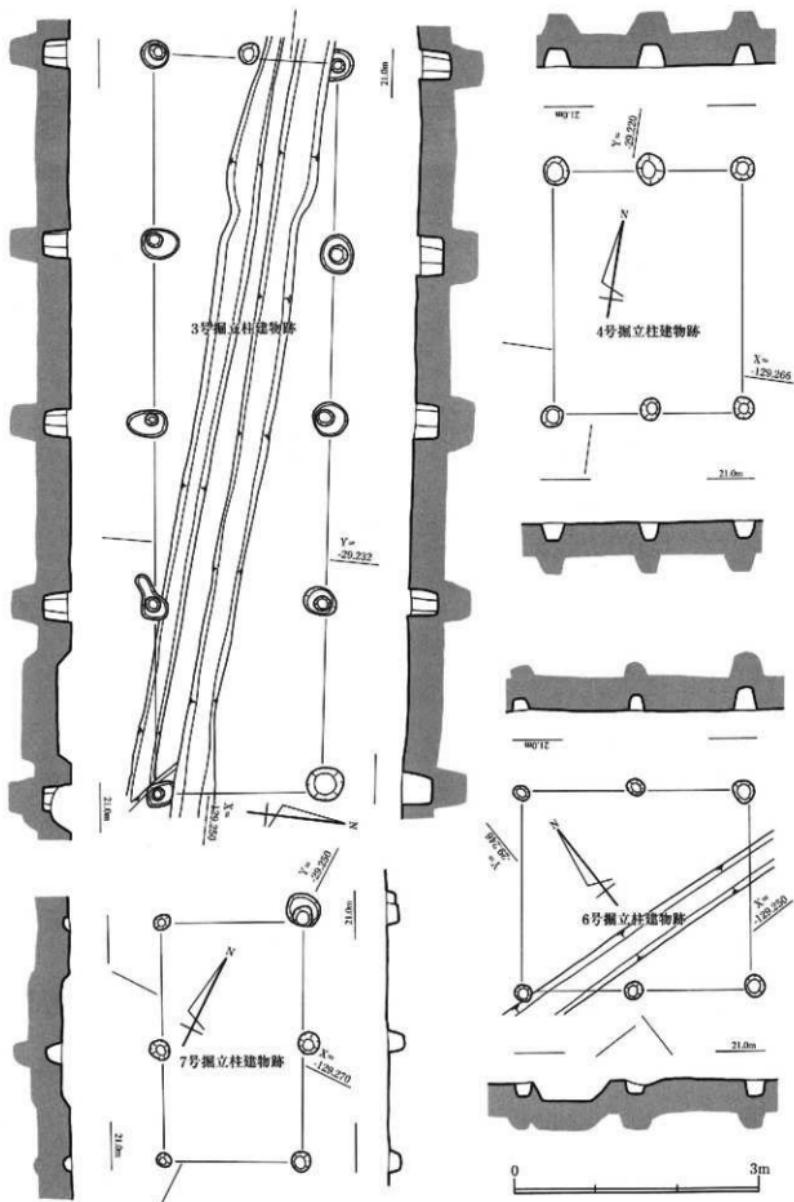


図148 3・4・6・7号掘立柱建物跡平面図・断面図

柱穴から図149-724に示す黒色土器の碗の底部片が出土した。

2号掘立柱建物跡（図147） 2号掘立柱建物跡は98-1調査区、K7-6-C13-d-e1-2で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-8°-Wである。検出面の標高は20.6mを測る。

柱穴は、径0.25~0.45mの円形を呈し、深さ0.2~0.4mを測る。梁間3.1m・3.4m、桁行5.3mを測り、床面積は約17m²である。

柱穴から、黒色土器、土師器の破片が出土したが、図化しえなかった。

1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡は、出土遺物や直交する方位の位置関係から考えて、同時に存在した建物群と考えられる。建物間の距離は、推定壁芯で1.8mを測る。

3号掘立柱建物跡（図148） 3号掘立柱建物跡は98-1調査区、K7-6-C13-f-3-4で検出した1間×4間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-84°-Eである。検出面の標高は20.6mを測る。

柱穴は、径0.4m前後の円形の掘形を有し、径0.15~0.2mの柱痕跡を検出した。深さ0.3mを測る。梁間2.1m、桁行9.0mを測り、床面積は約19m²である。

柱穴から、土師器壺、皿の小片が出土したが、図化しえなかった。平安初期か。

4号掘立柱建物跡（図148） 4号掘立柱建物跡は98-1調査区、K7-6-C13-g2-3で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-81°-Eである。検出面の標高は20.5mを測る。

柱穴は、径0.25~0.35mの円形を呈し、深さ0.2~0.3mを測る。梁間3.0m、桁行2.3mを測り、床面積は約7m²である。

柱穴から、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

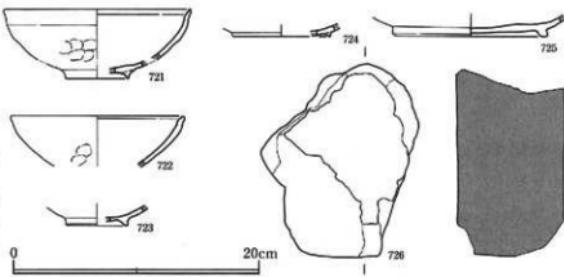
6号掘立柱建物跡（図148） 6号掘立柱建物跡は98-1調査区、K7-6-C13-e5で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-51°-Wである。検出面の標高は20.6mを測る。

柱穴は、径0.15~0.25mの円形を呈し、深さ0.2~0.3mを測る。梁間2.4m、桁行2.7mを測り、床面積は約6.5m²である。

柱穴から、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

5号掘立柱建物跡（図150）

5号掘立柱建物跡は98-1調査区、K7-6-C13-f-1で検出した1間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-86°-Eである。検出面の標高は20.7mを測る。



柱穴は、径0.25~0.5mの

図149 1-5-20-24号掘立柱建物跡出土遺物

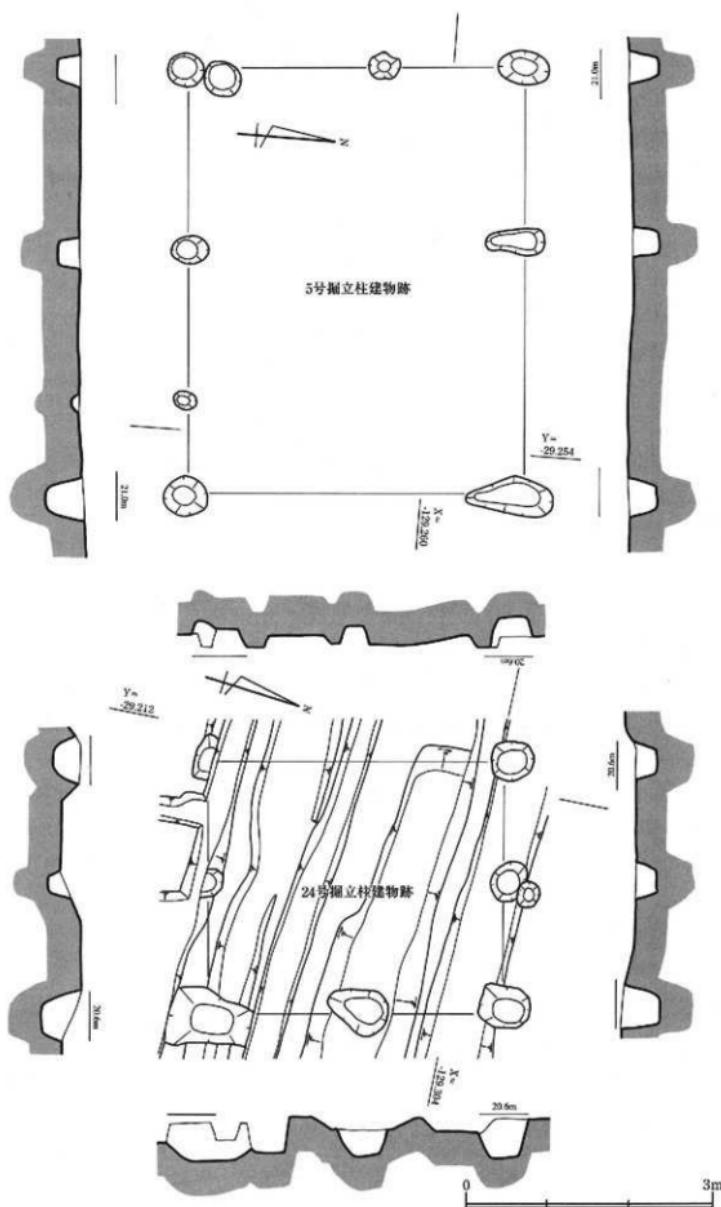


图150 5-24号掘立柱建物跡平面图·断面图

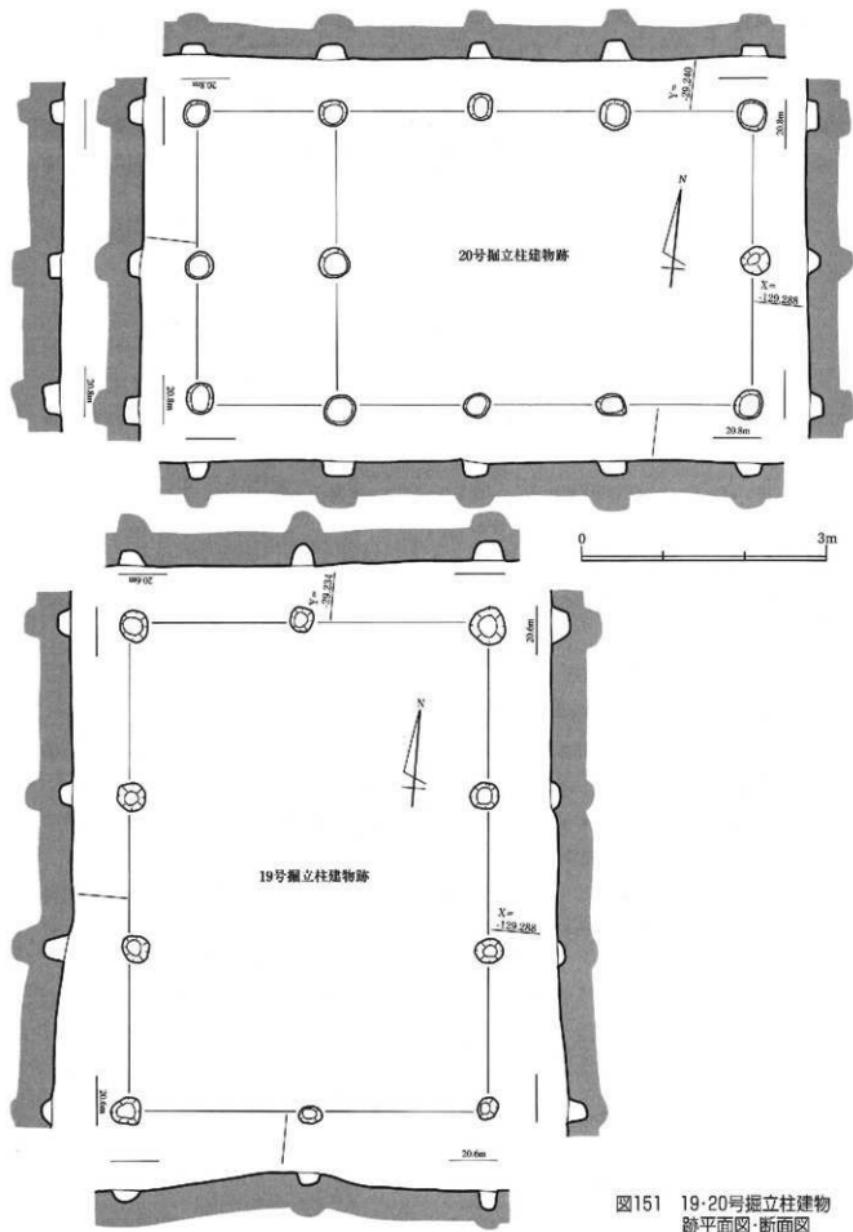


图151 19·20号掘立柱建物跡平面图·断面图

円形であるが、北側の柱穴は抜き取り痕を示すかのように梢円形を呈する。深さ0.1~0.45mを測る。梁間4.0m、桁行5.2mを測り、床面積は約21m²である。

柱穴から、図149-721~723の瓦器碗が出土し、また土師器の小皿等も出土した。

24号掘立柱建物跡（図150） 24号掘立柱建物跡は99-4調査区、K7-6-D13-a1・2で検出した2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-12°-Wである。検出面の標高は20.5mを測る。

柱穴は、擾乱による破壊が大きく、不明な部分が多いが、一辺0.5~0.6mの方形を呈する掘形と考えられる。深さ0.45mを測る。梁間3.1m、桁行3.6mを測り、床面積は約11m²である。

柱穴から、図149-725の黒色土器碗の底部が出土した。

19号掘立柱建物跡（図151・P L 48） 19号掘立柱建物跡は99-4調査区、K7-6-D13-i4で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-6°-Wである。検出面の標高は20.5mを測る。この建物は22号方形周溝墓の周溝の上に建てられ、墳丘部の一部から柱穴が検出できることから、この時期、方形周溝墓の姿は完全に消滅していたと考えられる。

柱穴は、径0.25~0.45mの円形を呈し、深さ0.1~0.3mを測る。梁間4.4m、桁行6.0mを測り、床面積は約26.5m²である。遺物は出土しなかった。

20号掘立柱建物跡（図151・P L 48） 20号掘立柱建物跡は99-4調査区、K7-6-D13-i5で検出した西面庇を持つ2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-84°-Eである。検出面の標高は20.5mを測る。

柱穴は、径0.35m前後の円形を呈し、深さ0.15~0.25mを測る。梁間3.6m、桁行5.1mを測り、床面積は約18m²である。庇は西側に1間（1.7m）分設置する。

柱穴から図149-726の壇が出土した。厚さ8.75cmを測り、二次焼成を受けている。須恵器、土師器の小片も出土したが図化しえなかった。

19号掘立柱建物跡と20号掘立柱建物跡は、直交する方位の位置関係から考えて、同時に存在した建物群と考えられる。建物間の距離は、推定壁芯で2.8mを測る。

同様の建物相互の配置関係は1・2号掘立柱建物跡でも看取され、建物以外の施設や区画溝等は検出されていないが、平安時代前期の屋敷内建物がこのような単位で作られた可能性を考えることができる。

調査区北半部では、壁面が赤く焼け縮まった土坑を7基検出した。個々の土坑により、遺物の多少、埋没状況等に差異が認められるが、共通する遺構としてまとめて述べる。

SK177（図153・P L 49） SK177は98-1調査区、K7-6-C13-e3で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、1.0×1.4m、深さ0.15mを測る。検出面の標高は20.65mである。

壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。埋土は3層に分かれると、炭等は見られなかっ

た。壁面は、底から2~3cmを除く四周の地山が強火を受け赤変している。また底部には火を焚いた痕跡が全く見られない。遺物は出土しなかった。

SK420 (図153・P L49) SK420は98-1調査区、K7-6-C13-f2で検出した土坑である。平面形は長方形を呈し、0.8×1.0m、深さ0.3mを測る。検出面の標高は20.5mである。

壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。埋土は4層に分かれ、最下層の整地土の上に炭が一面敷き詰められていた。この上位に炭混じりの黄褐色粘質土が堆積する。最上層は黄褐色粘質土で、炭は認められない。

壁面は、南北壁断面図で、6枚橙色粘質土が北側壁面に貼り付けたことが観察される以外には、地山そのままである。床面に敷かれた炭層から上位の壁面が強火のため赤変しているが、それ以下は変化をしていない。

遺物は上から2層目の炭混じり層から石、土器等が

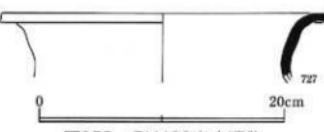


図152 SK420出土遺物

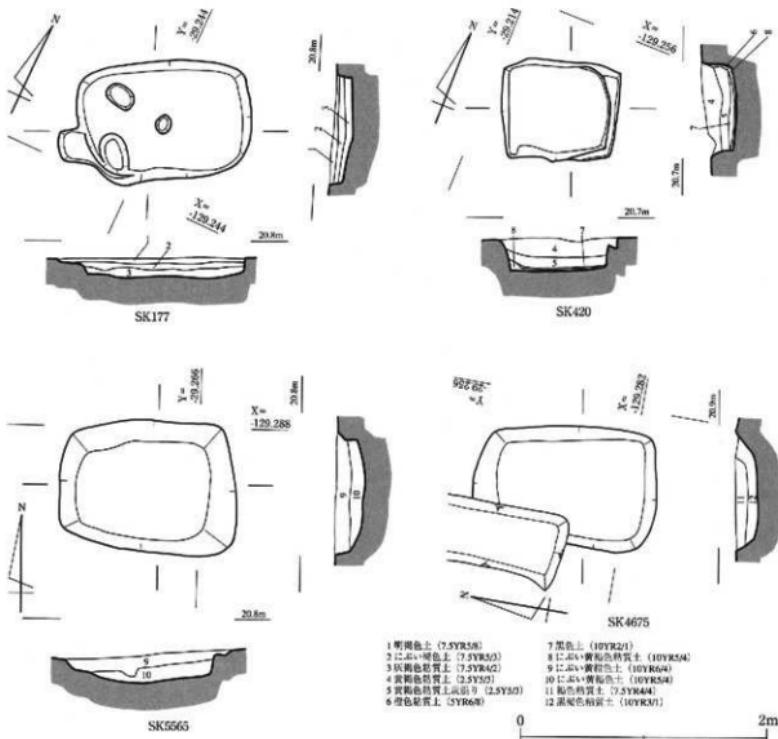


図153 SK177-420-5565-4675平面図・断面図

出土し、須恵器壺727を図152に示す。また、北西角ではコーナーに合わせて直角に組んだ木材が炭化した状況で検出した。

SK5565 (図153・PL49) SK5565は99-4調査区、K7-6-C13-i1で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、1.1×1.5m、深さ0.25mを測る。検出面の標高は20.5~20.6mである。

壁面はやや傾斜を持ち、底部は平坦を意識する程度である。埋土は2層に分かれるが、炭等は検出できなかった。底面は全く焼けておらず、また壁面は、地山が熱を受け硬くなっている程度で、長期わたって強火を受けていたとは考えられない。

遺物は、須恵器、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

SK4675 (図153・PL49) SK4675は99-4調査区、K7-6-C13-i6で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、1.0×1.5m、深さ0.2mを測る。検出面の標高は20.75mである。

壁面は傾斜し、底部は平坦である。埋土は2層に分かれるが、炭等は検出できなかった。底面は全く焼けておらず、また壁面は、地山が熱を受け赤変していた。

遺物は、須恵器、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

SK984 (図154・PL50) SK984は98-1調査区、K7-6-C13-g・h5で検出した土坑墓である。平面形は隅丸の長方形で、0.85×1.8m、深さ0.25mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土はにぶい黄褐色土單層である。

土坑墓の北側に片寄った位置で、底からやや浮いた状況で正立して瓦器碗1点が出土した。出土した瓦器碗は、口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。図155-728に示す。

その他の遺構 (図146) 挖立柱建物跡、焼土坑、土坑墓以外の歴史時代の遺物を出土する遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝最上層、ピット、溝等があり、図化できる遺物を図156に示した。遺物実測図断面の色分けは、黒塗り潰しは須恵器、陶器、磁器を示し、白抜きは土師

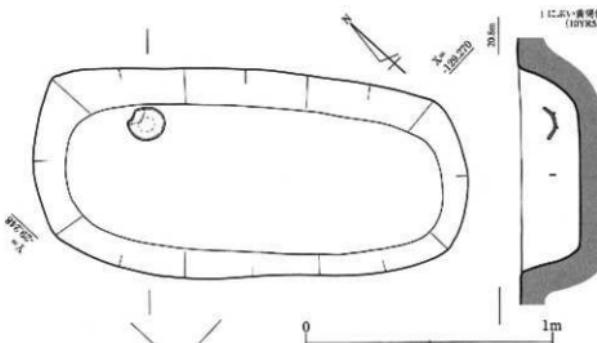


図154 SK984遺物出土状況・断面図

にぶい黄褐色土 (TERRA FIRMA) 器、黒色土器、瓦器を示す。
729・730は、SD 5053から出土した須恵器である。SD 5053は調査区
図155 SK984出土 遺物

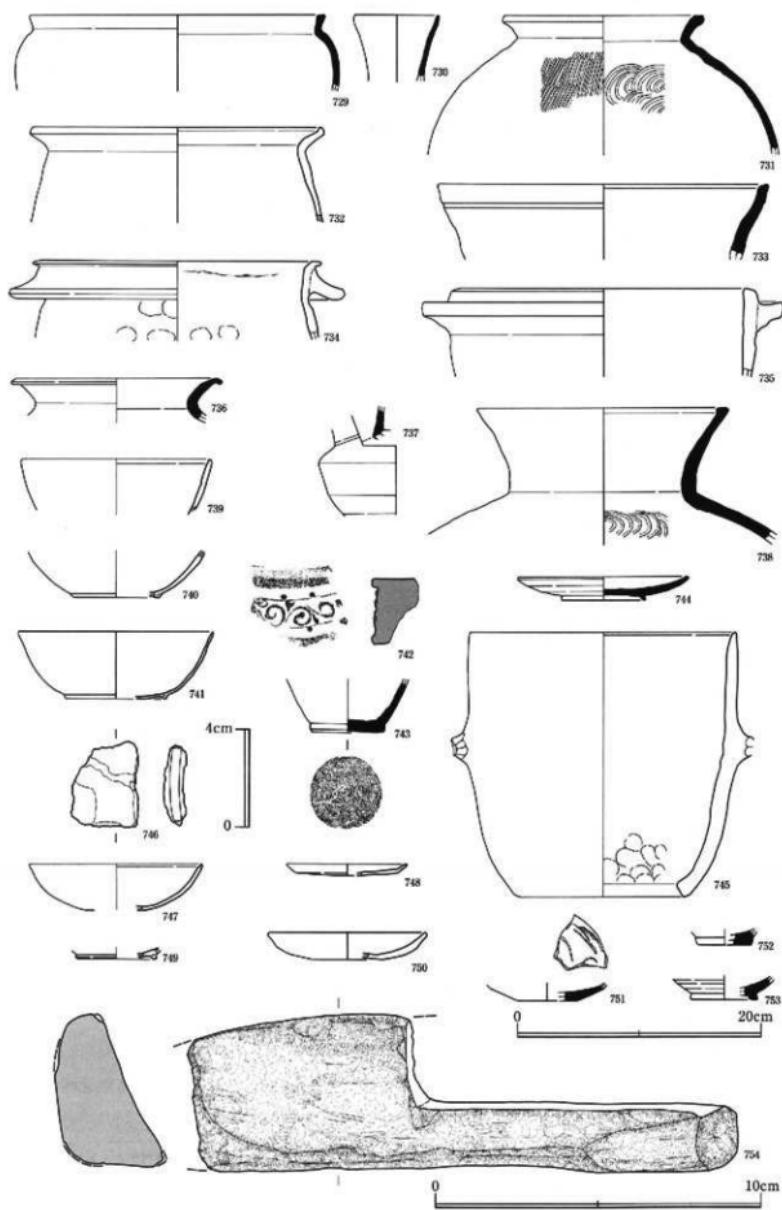


図156 歴史時代遺構・包含層出土遺物1

中央部を東西に横切るように、延長60mにわたって検出した。この溝の南側では竪穴住居跡、土坑等の飛鳥時代の遺構が検出され、北側では遺構が検出されないことから、集落を区画する溝と考えられる。溝の幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.25mを測る。壺731はSK4551から出土し、壺732はSD5050から出土した。

壺733はSD372から出土した。この遺構は、幅1.0m、深さ0.3~0.4mを測り、コ字状に検出した。3号掘立柱建物跡と重複し、その下から検出した。

羽釜734、735はP1018、P1081から出土し、黒色土器の椀739、740はP4717、P1242から出土した。また、軒平瓦742はSD4553（22号方形周溝墓）の最上層、20号掘立柱建物跡の南側で、多量の瓦・土器とともに出土した。これらの遺物から、19・20号掘立柱建物跡とその周辺に広がるピット群の時期を推測することができる。

736~738はSD5550から出土した。この遺構は99-4調査区、K7-6-C13-j1で検出した溝で、直交して27号方形周溝墓の周溝とつながり、また後述するSD1539と関連する区画溝と考えられる。壺743は22号方形周溝墓の周溝が埋没した後、掘削されたP4680から出土し、壺745はSD1022（10号方形周溝墓）の最上層から出土した。方形周溝墓の最終埋没については、掘立柱建物等が方形周溝墓の周溝上に建てられていることから、屋敷地の整地に伴う作業であったと考えられ、これらの土器、瓦がその時期を示すものと考えられる。

744はP898から出土した灰釉陶器の皿、741、746はP506から出土した黒色土器と用途不明の鉄器である。

747はP914、748はP922、749、750はP921から出土した、瓦器椀、土師質土器の皿である。何れのピットも98-1調査区に南西側の6号掘立柱建物跡の周囲で検出し、近くにSK984の土坑墓も存在することから、中世の屋敷地の一角を占めると考えられる。

751~754は包含層出土の遺物である。751は同安窯系の青磁皿、752は削り出し高台の縁釉陶器の椀、胎土は精良で淡黄灰色を呈す。753は貼り付け高台の縁釉陶器椀で、胎土は須恵質で灰色を呈す。754は砂岩製の砥石で、図示した面が使用されている。

■調査区北東部の遺構（図157） 98-2・3調査区及び99-5調査区の範囲を示した遺構図である。一部北西部の遺構図（図146）と重複する。歴史時代の遺物を出土した遺構を赤色で示した。

本図の範囲の掘立柱建物跡は、帰属時期を明確にしえないものも含めて3棟検出した。北西側の遺構図で示した1・2号及び19・20号掘立柱建物のように隣接する東西棟と南北棟の建物で1つの建物群を構成するものは認められず、単独で検出した。

10号掘立柱建物跡（図158） 10号掘立柱建物跡は98-3調査区、K7-6-C12-g・h7で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-10°-Wである。検出面の標高は20.8mを測る。

立会調査遺物出土位置



図157 歴史時代遺構平面図2

柱穴は、径0.2~0.4mの円形を呈し、深さ0.2~0.5mを測る。梁間4.3m、桁行5.6m・5.8mを測り、床面積は約24m²である。

柱穴から、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

8号掘立柱建物跡（図159） 8号掘立柱建物跡は9-8-2調査区、K7-6-C12-h9-10で検出した2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-92°-Eである。検出面の標高は20.6~20.7mを測る。

柱穴は、一辺0.5mの方形掘形のもの1基、一辺0.3mの方形掘形のもの2基、他は径0.3mの円形を呈し、柱痕の残るものもある。深さ0.15~0.25mを測る。梁間3.9m、桁行5.0mを測り、床面積は約20m²である。遺物は出土しなかった。

9号掘立柱建物跡（図159） 9号掘立柱建物跡は9-8-3調査区、K7-6-C12-i-j7で検出した推定2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-74°-Eである。検出面の標高は20.8mを測る。

柱穴は、一辺0.6mの方形の掘形を有し、径0.2~0.25mの柱痕跡を検出した。深さ0.2~0.5mを測る。梁間3.6m、桁行6.4mを測り、床面積は約23m²である。

柱穴から土師器碗、皿、須恵器等が出土したが、図化しえなかった。

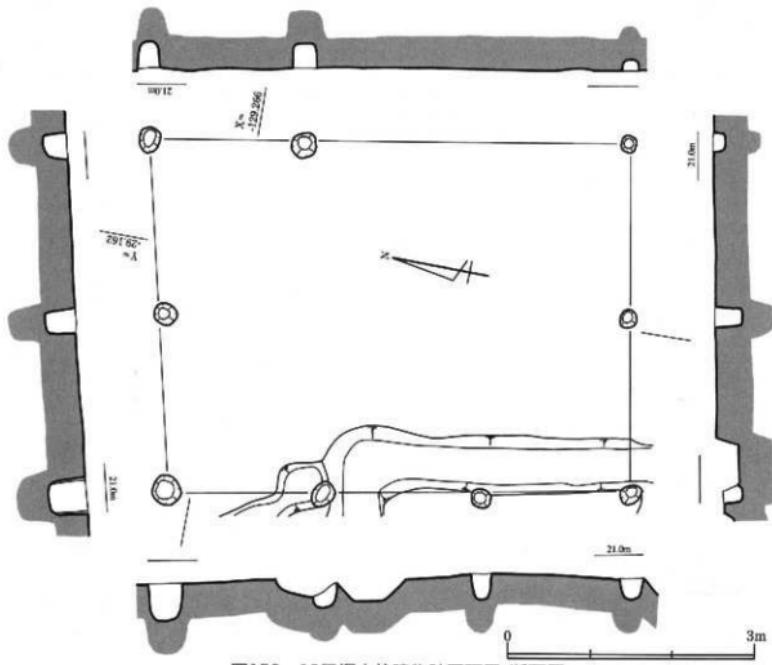


図158 10号掘立柱建物跡平面図・断面図

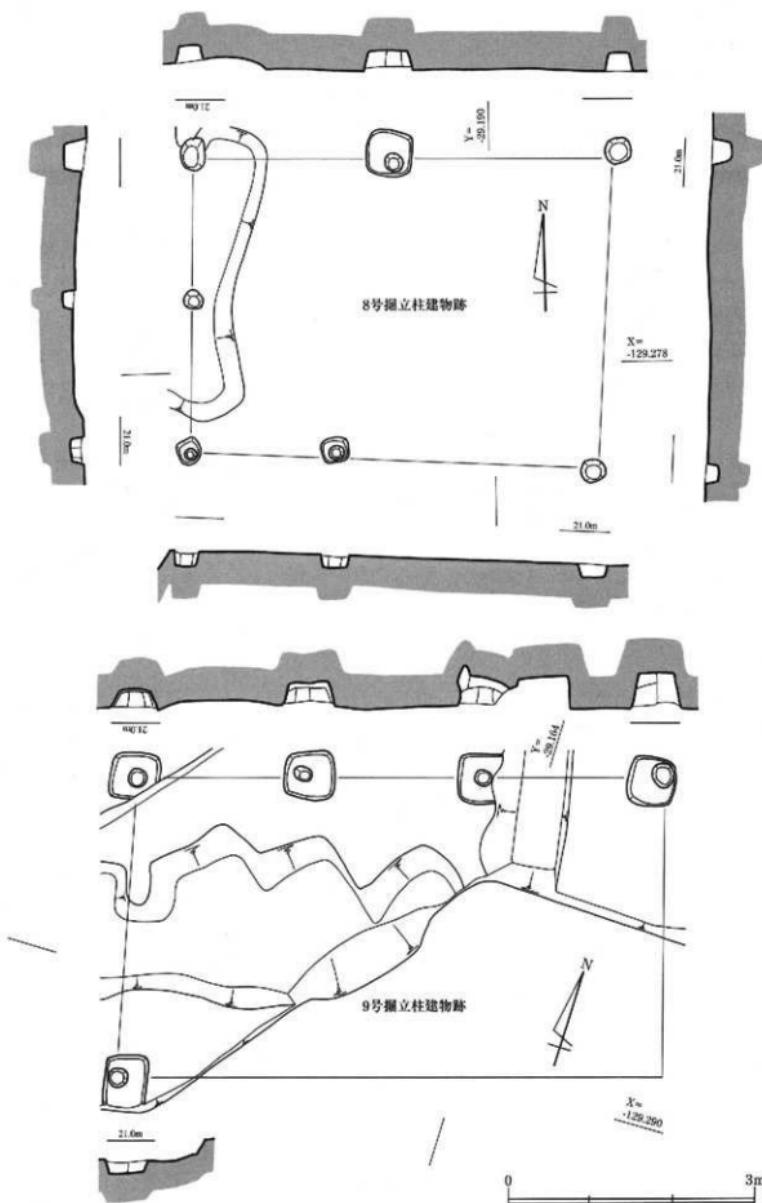


図159 8・9号掘立柱建物跡平面図・断面図

調査区北半部では、壁面が赤く焼け締まった土坑を7基検出した。その内3基を本遺構図で表示範囲で検出した。図153の説明と併せて見ていただきたい。

SK1103 (図160・P L49) SK1103は98-2調査区、K7-6-C12-g9で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、0.9×1.7m、深さ0.4mを測る。検出面の標高は20.35mである。

壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。埋土は3層に分かれ、上位2層には炭が見られなかったが、最下層は南西短辺側から流入した状況で炭混じりの黒褐色粘質土が堆積する。壁面は、底から2~3cmを除く四周の地山が強火を受け赤変している。また底面には火を受けた痕跡が見られない。検出位置は、4号方形周溝墓の南西周溝中央部で、現況では地下水位が高く、湧水があり、火を使うのに適した場所とはいえない。

遺物は、布目瓦の小片が出土したが、図化しえなかった。

SK1339 (図160・P L49) SK1339は98-3調査区、K7-6-C12-f7で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、0.95×1.2m、深さ0.35mを測る。検出面の標高は20.6mである。

壁面は傾斜し、底部は平坦である。埋土は3層に分かれ、上・中層から炭は検出できなかった

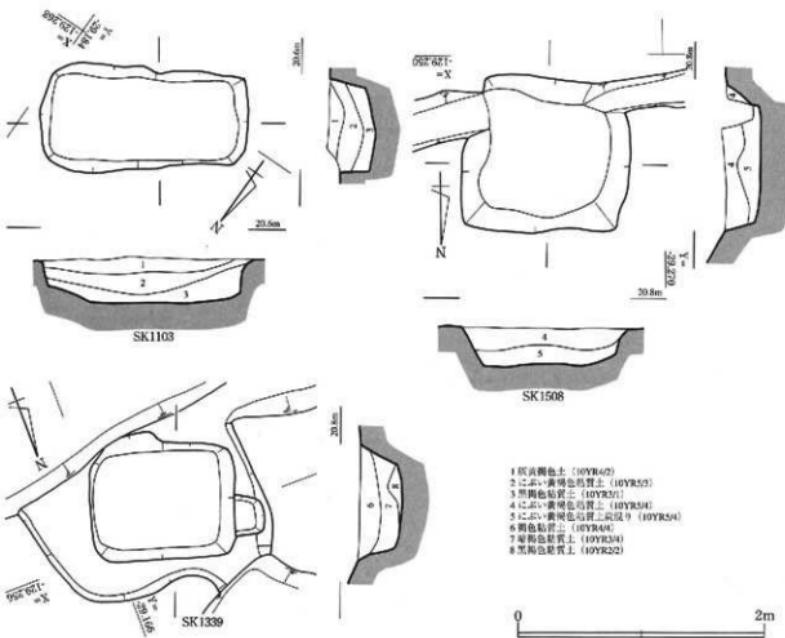


図160 SK1103・1508・1339平面図・断面図

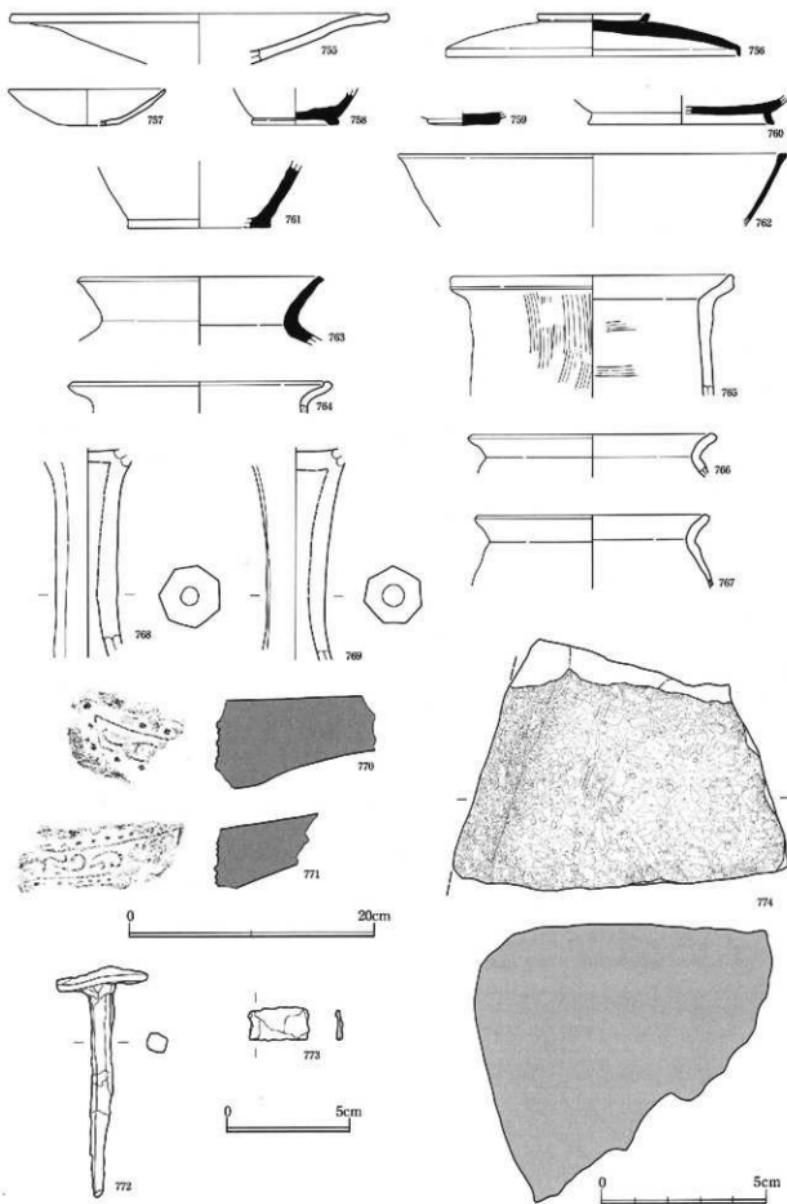


図161 SK1508・1339出土遺物

が、下層の黒褐色粘質土には多量の炭が含まれていた。底面は全く焼けておらず、下層上面以上の壁面の地山が熱を受け赤変していた。

中層には多量の遺物が包含され、土坑の機能停止後に投棄埋没させたものと考えられる。

遺物（図161）は、土師器の高杯755、椀757、須恵器の杯蓋756、壺761、鉢762に混じって綠釉陶器が出土した。椀759は削り出し高台の綠釉陶器で、淡黄灰色の精良な胎土に、薄い黄緑色の釉薬が僅かに残存する。

SK1508（図160・P L49） SK1508は98-2調査区、K7-6-C12-e7で検出した土坑である。平面形は隅丸の正方形に近く、1.3×1.35m、深さ0.35mを測る。検出面の標高は20.6mである。

壁面は傾斜し、底部は平坦である。埋土は2層に分かれ、上層から炭を検出しなかったが、下層には多量の炭が含まれる。底面は全く焼けておらず、下層上面以上の壁面の地山が熱を受け、赤変していた。検出位置は、13号方形周溝墓の周溝南コーナー部であり、SK1103と共通した条件の場所に立地している。

造構埋土の上下層から土器、瓦、鉄器、砥石等の多様な遺物が多量に出土した。図161に示す須恵器の壺758、土師器壺765～767、高杯768、軒平瓦770・771及び鉄釘772、鉄片773は上層から出土した。軒平瓦は外区に珠紋、内区に唐草紋を配する。釘772は、断面方形の釘の頭に径3.8cmの円盤状の飾りを付ける。長さ8.8cmを測るが先端を欠く。

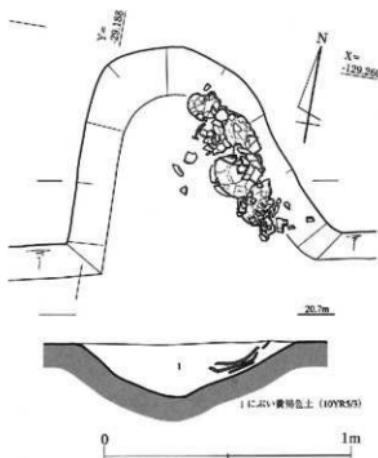


図162 SK260遺物出土状況・断面図

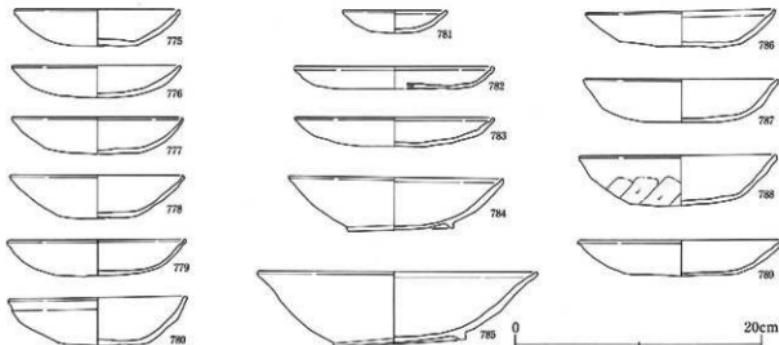


図163 SK260出土遺物

下層出土の遺物は、縁釉陶器の壺762、須恵器の壺763、土師器の壺764、高杯769、砥石774である。762は貼り付け高台の椀で、灰白色の精良な胎土を有し、薄い黄緑色の釉薬が残存する。高杯769は768と同じ形態で、長脚化した脚柱部に7面の面取りを施す。774は図示した面を使用した砥石で、材質は花崗斑岩である。

SK260 (図162・P L50) SK260は98-2調査区、K7-6-C12-g9で検出した土坑である。平面形は橢円形を呈すると考えられるが、南側を住宅の基礎で破壊されている。現況幅1.0m、長さ0.9m以上、深さ0.2mを測る。検出面の標高は20.6mである。

断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土はにぶい黄褐色土層である。なだらかに下る東側壁面に遺物が集中して出土した。杯を2~3枚ずつ重ねて、東側から斜面に並べ置いた状

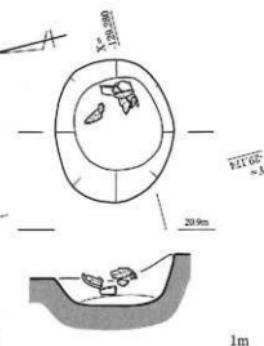


図164 P1568遺物出土状況・立面図

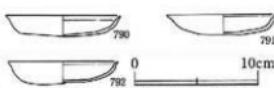


図165 P1568出土遺物

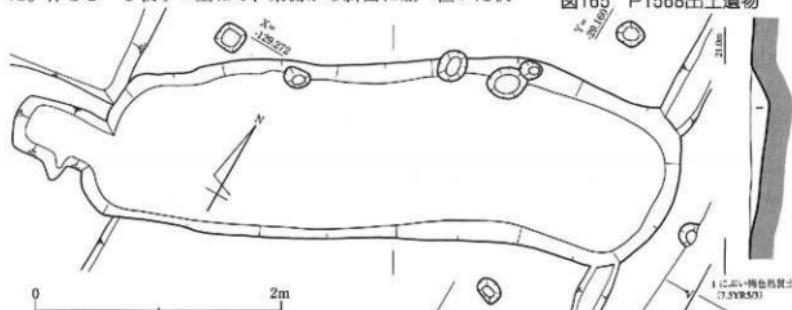


図166 SD1596平面図・断面図

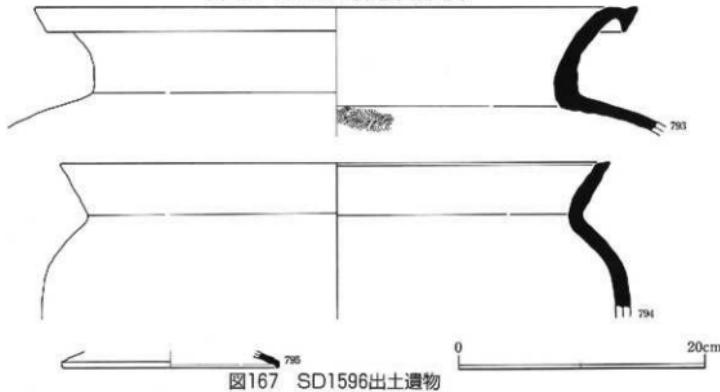


図167 SD1596出土遺物

況を示している。

出土遺物は全て土師器で、図163に示す。高台の付かない杯775～780、高台の付く杯784・785、皿781～783、椀786～789の15点が出土した。器壁表面の残存状況は悪く、調整技法を詳しく観察することができなかったが、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整が観察できる。外面は単位を識別できないものがほとんどであったが、ヘラ削りを行なうもの、ナデ調整を行なうものがある。776・777・780・783・785・787・788にヘラ削りが認められる。他はナデ調整。ヘラミガキを施すものはない。9世紀前半から中頃と考えられる。

P1568 (図164・P L50) P 1 5 6 8 は 9 8 - 3 調査区、K7-6-C12-h8で検出した楕円形のビットである。0.5×0.6m、深さ0.2mを測り、検出面の標高は20.8mである。

断面の形状はU字状を呈し、底部は平坦である。底からやや浮いた状況で土師器の小皿が3点出土した。図165に実測図を示す。

SD1596 (図166) S D 1 5 9 6 は 9 8 - 3 調査区、K7-6-C12-h7で検出した溝である。幅1.5m、深さ0.2m、延長5mを測る。検出面の標高は20.8mである。西側の延長方向で検出した溝と本来同じ溝であった可能性が考えられる。

断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土はにぶい褐色粘質土1層である。溝内から須恵器、土師器、瓦が出土し、図167に示す須恵器壺793、甕794、杯蓋795を図化した。795は径17.4cmを測り、内面に返りを有する。

その他の遺構 (図157) 挖立柱建物跡、焼土坑等以外の歴史時代の遺物を出土する遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝最上層、ビット、溝等があり、図化できる遺物を図168に示した。遺物実測図断面の色分けは、黒塗り潰しは須恵器、陶器、磁器を示し、網掛けは瓦を示し、白抜きは土師器、黒色土器、瓦器、土製品を示す。

796・797はSD200（2号方形周溝墓）から、798・805・821・825はSD262（4号方形周溝墓）から、804はSD254（5号方形周溝墓）の最上層から出土した。これら3基の方形周溝墓以外にも、1・3・6・13・14・17号方形周溝墓の上層からも平安時代の須恵器、土師器、瓦等が出土しており、弥生時代中期に築造された方形周溝墓の周溝は、最終的にこの時期になってようやく完全に埋没したと考えられる。

799～801・803・806～809・822・823はSD1539から出土した遺物である。SD1539は、98-3区から99-5区にかけて東西方向に検出した。幅0.8～2.5m、深さ0.2mを測る。溝の方向はN-65°-Eである。

この溝は、総延長約40mを測り、17号方形周溝墓の南周溝と重複することから、この周溝の窪みを利用してその延長方向に延ばしたものと考えられる。東側は調査区端まで到達せずに途切れ、西側は先述したSD550と直交する。この溝の南側に存在する施設の区画溝と考えることができる。

遺物は須恵器、土師器、瓦等が比較的多量に出土した。高杯800と801は溝上層から出土し、

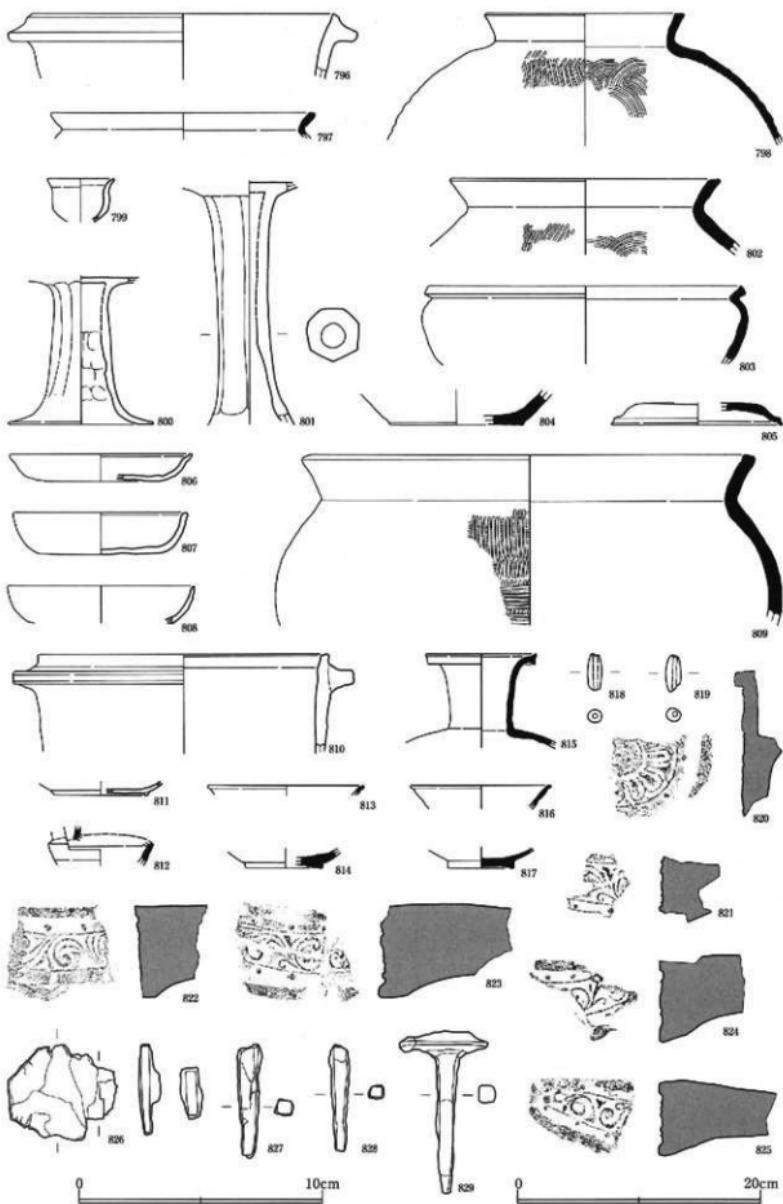


図168 歴史時代遺構・包含層出土遺物2

800は面を取る幅が狭く、脚柱部も短いのに対し、801は面取り幅が広く、脚も長い。須恵器杯蓋805、土師器碗806～808の特徴から見て9世紀前半と考えられる。

810・811はP1547から出土した土師器羽釜と黒色土器碗である。P1547は98-3調査区、K7-6-C12-f7で検出した楕円形のピットである。0.4×0.5m、深さ0.2mを測り、検出面の標高は20.7mである。

813はSD195から出土した緑釉陶器碗である。SD195は、98-2調査区、K7-6-C12-e10で検出した溝で、幅0.1m、深さ0.05mを測る。東西に併行する溝からは瓦器の小片が出土していることから、緑釉陶器は混入資料か、と考えられる。

壺815はP1431から出土した須恵器、818はSK1358から出土した土錘である。両遺構とも98-3調査区で検出した。

軒平瓦824はSK1320から出土した。SK1320は、98-3調査区、K7-6-C12-e7で検出した隅丸方形の土坑である。1.3×1.4m、深さ0.25mを測る。検出面の標高は20.75mである。この遺構は13号方形周溝墓西コーナー部に位置することから、この時期には墳丘が完全に削平されていたことを示す。

鉄釘829は、SK253から出土した。この遺構は98-2調査区、K7-6-C12-f10で検出した不定形土坑である。埋土から須恵器、土師器、瓦等も出土した。この釘は、断面方形の釘の頭に径3.6cmの円盤状の飾りを付ける。長さ6.0cmを測るが先端を欠く。SK1508出土の鉄釘と同様の作りである。

802・812・814・816・817・819・820・826～828は包含層から出土した遺物である。平瓶812は体部径8.5cmを測るミニチュアである。816は緑釉陶器碗の口縁部片、814は緑釉陶器碗の底部片で、削り出しの蛇の目高台を有する。817も緑釉陶器碗の底部片で、削り出しの輪高台である。819は土師質の土錘。826～828は鉄製品である。826は用途不明の鋳造鉄器で、折損しているが、右方向に断面長方形の別製品の接合が観察できる。827・828は断面方形の鉄釘の破片で、両端を欠損する。

立会調査出土遺物（図169） 府営住宅内の道路切り替えに伴い、ガス・水道管を調査地東側の市道に移設した。遺跡地内であるが、現在使用されている道路で、掘削幅が狭小であるため立会調査を行なった。図157に示す位置（K7-6-C12-i6）には人孔が置かれ、他の場所に比べて平面的に観察することができた。

当該位置では、地山直上に灰白色粘質土の包含層の堆積が見られ、そこから7世紀末～8世紀初頭の土師器、須恵器が出土した。杯蓋830は口径16.3cm、器高3.4cmを測り、内面に返りがない。長頸壺831は、短い台の上に載せられた壺胴部の最大径は、稜を作らず丸く仕上げ、その上位に沈線2条が施される。

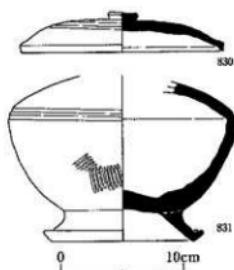


図169 立会調査出土遺物

■調査区中央部の遺構 (図170) 99-4調査区の南半部、99-1調査区及び99-3調査区の北半部の遺構図である。歴史時代の遺物が出土した遺構を赤色で示した。

本図の範囲では、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡7棟を検出した。竪穴住居跡は、単独で散在し、各住居跡間は約40m以上離れる。掘立柱建物跡は、出土遺物が少なく、帰属時期を明確にしえないものも含まれる。この地区では1・2号掘立柱建物跡や19・20号掘立柱建物跡の様に、隣接する東西棟と南北棟の建物で1つの建物群を構成する掘立柱建物跡は検出できなかった。代わって方位を同じくして3棟並ぶ12・13・17号掘立柱建物跡や縦柱の11号掘立柱建物跡等、比較的規模の大きな建物跡を検出した。

17号竪穴住居跡 (図172・P L43) 17号竪穴住居跡は、99-4調査区、K7-6-D13-c2で検出した方形の竪穴住居跡である。平面的には府営住宅の基礎が竪穴住居跡床面まで及び、南東と南西コーナー部を破壊していた。主軸方向はN-11°-Wである。検出面の標高は北側で20.5m、南側で20.6mを測る。

住居跡の平面形は隅丸方形で、北辺3.3m、東辺3.4m、南辺3.6m、西辺3.5mを測る。壁溝は壁面に沿って四方に廻るが、南東コーナーを挟んで、東壁の南側と南壁の東側では検出できなかった。壁溝の幅0.2~0.5m、深さ0.05~0.1mを測る。検出面から床面までの深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色粘質土で上下2層に分かれる。

住居内の遺構としては、径0.3m前後のピットが5個、北東コーナーに不定形土坑が1個検出されたが、出土遺物が無く、住居跡に伴う遺構と判断できなかった。また配置、深さ等からも柱穴を推定することができなかった。また、北側の壁溝が中央部で広がることから、作り付けの竈が設置されていた可能性を考えることができる。

また、住居跡中央から北に向かって地山面が深く傾斜する部分に、南北断面図の3.褐灰色粘質土(7.5YR4/2)が堆積し、南側の床面に対して平坦に作ることから、貼床を行なっていたと考えられる。

住居跡埋土の上下層両層から、弥生土器、古式土師器、須恵器等の各時期の遺物が出土した。下層出土の資料として、図171-834の須恵器杯身がある。床面出土資料として、住居跡中央部の床面直上から須恵器碗832があり、また出土状況を図示したように、西壁と南壁に接して、溝底或いは床面から僅かに浮いた状況で土師器片が出土し、2ヶ所に離れた資料が接合して1個体となつた。これが図171-833の土師器甕である。

833は把手付きの甕である。底部は欠損して形状は不明であるが、球形の胴部から屈曲して外反する口縁部を持つ。体部外面の下半にはヘラ削り、中位以上に斜め上方へのハケ調整を施す。内面は中位以下に右斜め上へのハケ調整、中位以上を左斜め上方へのハケ調整を施す。口縁部外面はハケ調整が残るが、ヨコナデ調整を施し、内面は横方向のハケ調整が残る。体部最大径の位置に把手を貼付ける。把手の形状は10cm程度の粘土紐を横方向に貼り付け、左右端を長く伸ばして押さえ、上下端は把手先端に稜線を付けるように細かく押さえつける。把手の上面には縱方向

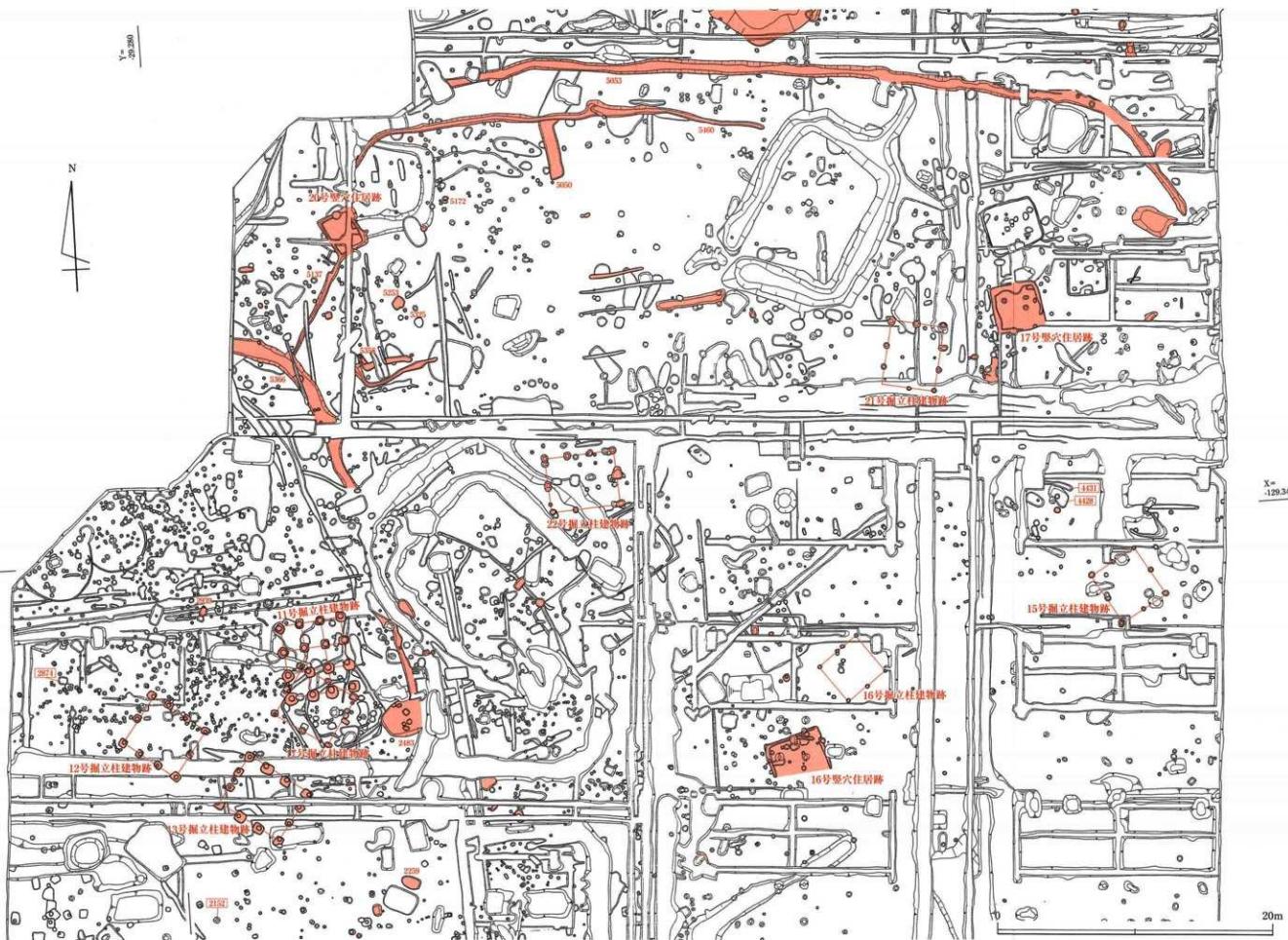


図170 歴史時代遺構平面図3

に4ヶ所のヘラによる刻目を入れる。

20号竪穴住居跡（図173・PL44） 20号竪穴住居跡は、99-4調査区、K7-6-D13-b7で検出した長方形の竪穴住居跡である。主軸の方向は、N-29°-Eである。遺構を東西に分けるように旧水路が南北に流れ、旧耕地に段差ができていたため、この影響を受け検出面の標高は、搅乱の東側で20.4m、西側で20.35mを測る。

住居跡の平面形は長方形で、北西辺2.4m、北東辺3.2m、南東辺2.4m、南西辺3.2mを測る。壁溝は壁面に沿って周囲に廻る。壁溝の幅0.2~0.3m、深さ0.1mを測る。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。埋土は褐黃灰色粘質土で上下2層に分かれる。

住居内からは、壁溝以外の遺構は検出できなかつた。また、南コーナーから南西方向に向かってSD5137が直線的に伸び、SD5366に合流する（図170）。

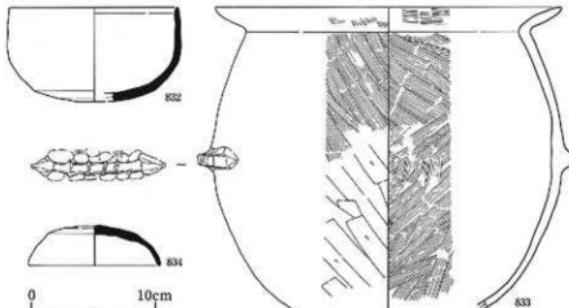


図171 17号竪穴住居跡出土遺物

- 1 褐黃色粘土 (TYSR4/1)
- 2 黄褐色粘土 (TYSR4/1)
- 3 褐黃色粘土 (TYSR4/2)
- 4 褐黃色粘土層包覆 (TYSR4/1)

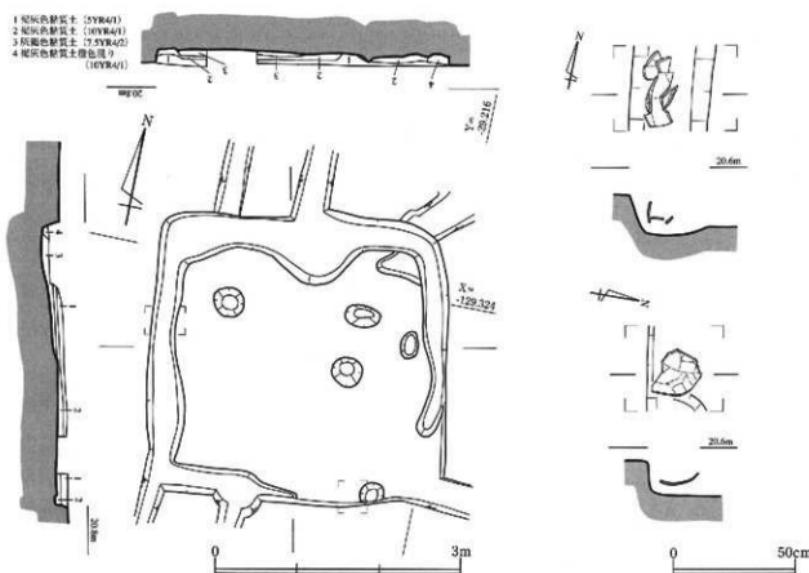


図172 17号竪穴住居跡平面図・断面図・遺物出土状況

20号竪穴住居跡の検出面からSD5366に向かって地形は低く傾斜し、約20cmの比高があることから考えて、SD5137は、この20号竪穴住居跡の排水溝の性格を持つ溝と考えることができる。

竪穴住居跡南東側の一角で、擾乱を受けず、埋土が残存していた場所で遺物が出土した（図174）。須恵器杯身1点（図175-836）

が壁溝上から、2点（837・838）が床面からやや浮いた状況で出土し、南コーナー部からは土師器甕1点（839）と石材2点が床面から10cm程度浮いた状況で検出した。この石材は、住居内埋土から他の破片が出土し、併せて5つの破片が接合し図175-835となった。幅11cm、長さ33cm、厚さ1.9cmの板状で、表面・側面は平滑なのに對し、裏面は削った後、加工を施していない。下端は欠損し、本来の形状を有していないと考えられる。石材は玢岩である。

16号竪穴住居跡（図176・P L45）

16号竪穴住居跡は、99-3調査区、K7-6-D13-f4で検出した方形の竪穴住居跡である。主軸の方向は、N-19°-Wで

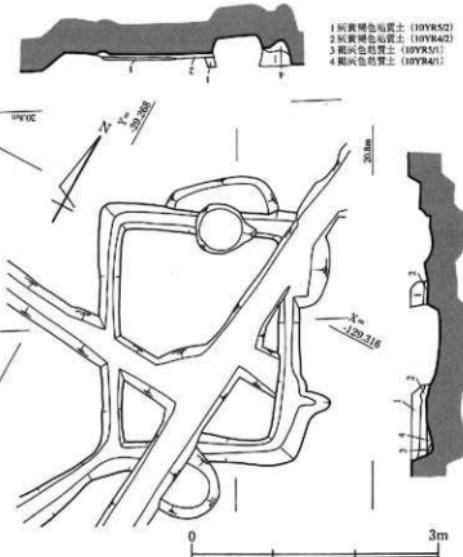


図173 20号竪穴住居跡平面図・断面図

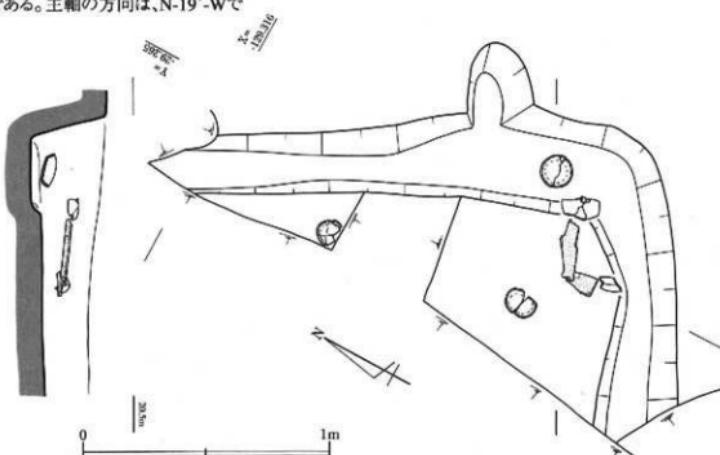


図174 20号竪穴住居跡遺物出土状況・立面図

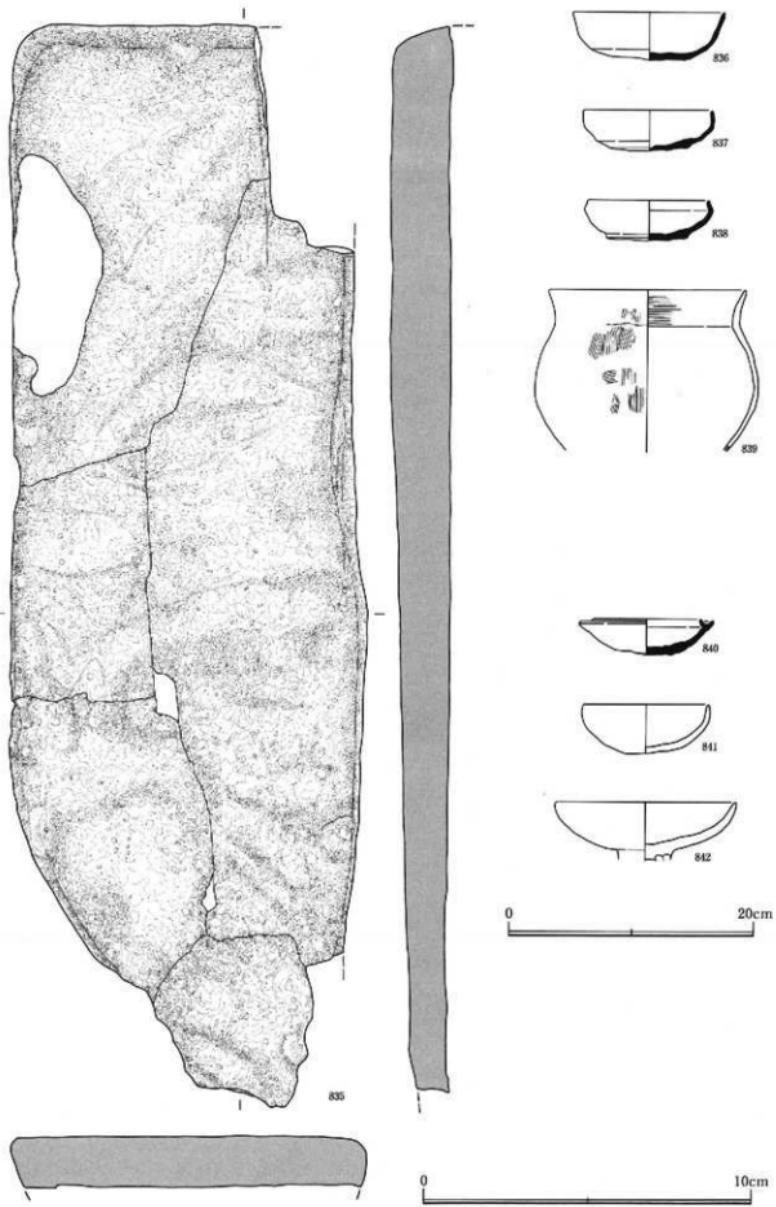


圖175 20-16號堅穴住居跡出土遺物

ある。遺構の南半部は府営住宅造成時に地山まで削平を受け、すでに破壊されていた。検出面の標高は北側で20.5m、南側で20.4mを測る。

住居跡の平面形は本来隅丸方形であると考えられ、北辺4.2m、東辺3.3m以上、西辺2.5m以上を測り、南側約4分の1を欠いて南辺は検出できなかった。壁溝は検出範囲では壁面に沿って通り、東壁の北側部分の溝は検出できなかった。壁溝の幅0.2~0.4m、深さ0.1mを測る。検出面から床面までの深さ最大0.05mを測る。埋土は灰黄褐色土1層だけが残存していた。

住居内の遺構としては、ピットが7基、土坑を2基検出したが、ピットからの出土遺物が無く、住居跡に伴う柱穴を推定することができなかつた。

住居内の土坑2基からはそれぞれ遺物が出土し、図177に出土状況を示した。北壁中央部で検出した土坑は、壁溝を掘削した後に掘られ、0.55×0.7m以上の楕円形を呈し、床面からの深さ0.04mを測る。土坑の中央北寄りから土師器の高杯が出土した。この高杯(図175~842)は、脚部以下を欠損させ、杯部を伏せて置

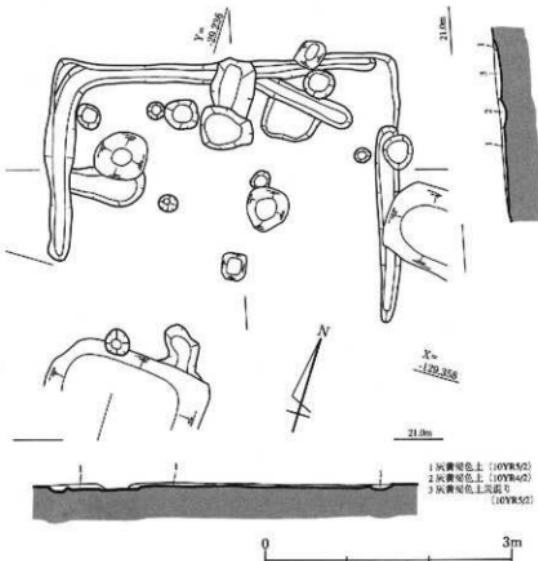


図176 16号竪穴住跡平面図・断面図

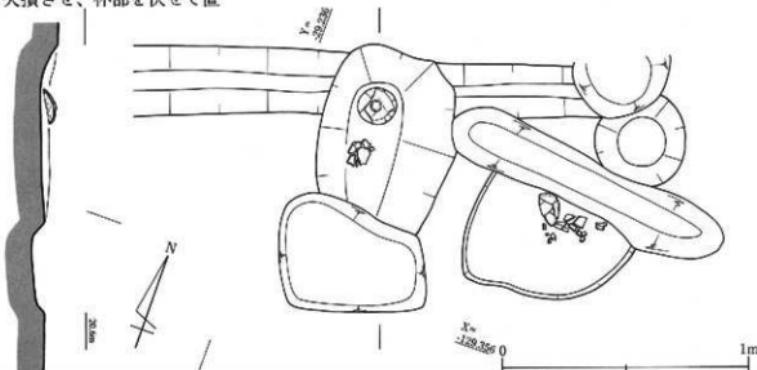


図177 16号竪穴住跡出土状況・立面図

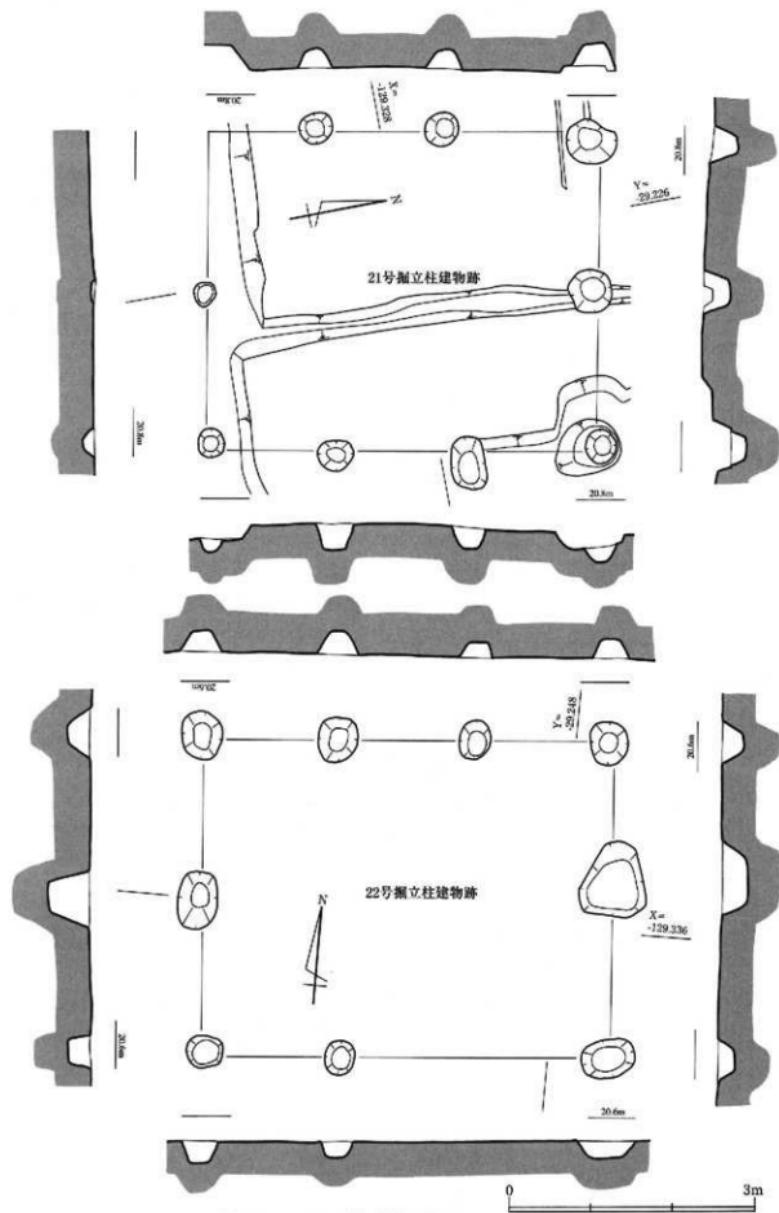


図178 21・22号掘立柱建物跡平面図・断面図

かれていた。土坑埋土には炭が多く混じっており、竈が置かれていた可能性が考えられる。

また、この土坑の東側に、 $0.6 \times 0.4\text{m}$ 以上、深さ 0.02m を測る略方形の土坑を検出した。土坑内から図175-840・841に示す須恵器杯身、土師器杯が出土した。

21号掘立柱建物跡 (図178) 21号掘立柱建物跡は99-4調査区、K7-6-D13-c3で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。南側の柱列は、府営住宅内の道路側溝によって搅乱を受け、検出面がかなり低かったため、痕跡程度にしか検出できず、また南西角の柱穴を検出することができなかった。主軸の方向はN-11°-Eである。検出面の標高は20.5mを測る。

柱穴は、径 $0.3 \sim 0.6\text{m}$ の円形を呈し、深さ $0.2 \sim 0.35\text{m}$ を測る。梁間 3.9m 、桁行 4.8m を測り、床面積は約 19m^2 である。柱穴から土師器の破片が出土したが、図化しえなかつた。

22号掘立柱建物跡 (図178) 22号掘立柱建物跡は99-1・4調査区、K7-6-D13-c5・6で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-86°-Eである。検出面の標高は20.3mを測る。

柱穴は、最大 $0.8 \times 1.0\text{m}$ を測る不整形を呈するもの以外は、 $0.4 \sim 0.7\text{m}$ の円形あるいは隅丸方形を呈し、深さ $0.2 \sim 0.5\text{m}$ を測る。梁間 3.9m 、桁行 5.1m を測り、床面積は約 20m^2 である。

柱穴から、弥生土器が多数と土師器の破片が少量出土したが、図化しえなかつた。

11号掘立柱建物跡 (図179・PL46) 11号掘立柱建物跡は99-1調査区、K7-6-D13-e7・8で検出した3間×3間の総柱の掘立柱

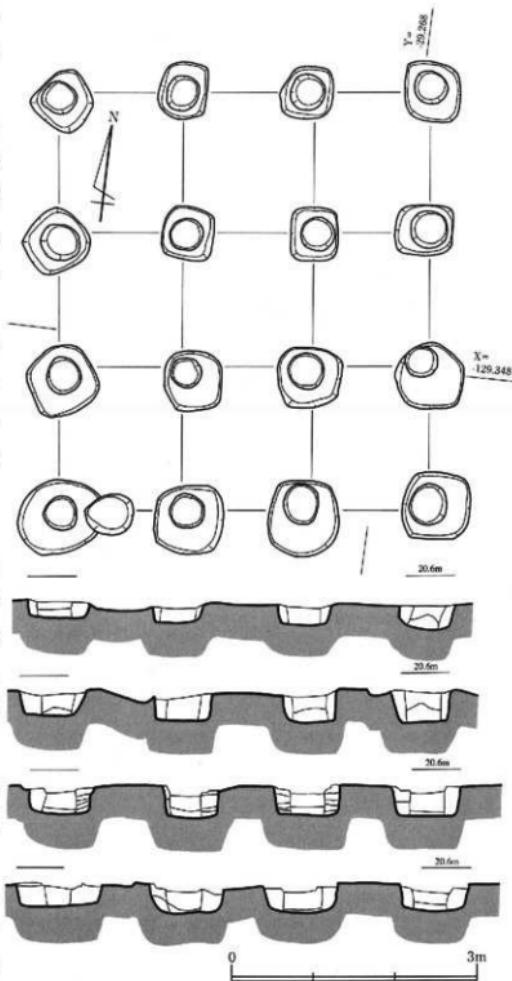


図179 11号掘立柱建物跡平面図・断面図

建物跡である。17号掘立柱建物跡と重複して検出した。主軸の方向はN-7°-Wである。検出面の標高は20.4mを測る。

柱穴は、最大0.9×1.0m、最小0.6×0.7mを測る方形の掘形を有し、深さ0.4mを測る。掘形内から検出した柱痕跡は径0.4~0.45mと均一で、柱規模、柱通りもよく揃っている。掘形埋土の一部には互層に敷き固められた状況を呈するものも認められる。梁間4.5m、桁行5.1mを測り、床面積は約23m²である。

図180 11号掘立柱建物跡出土遺物

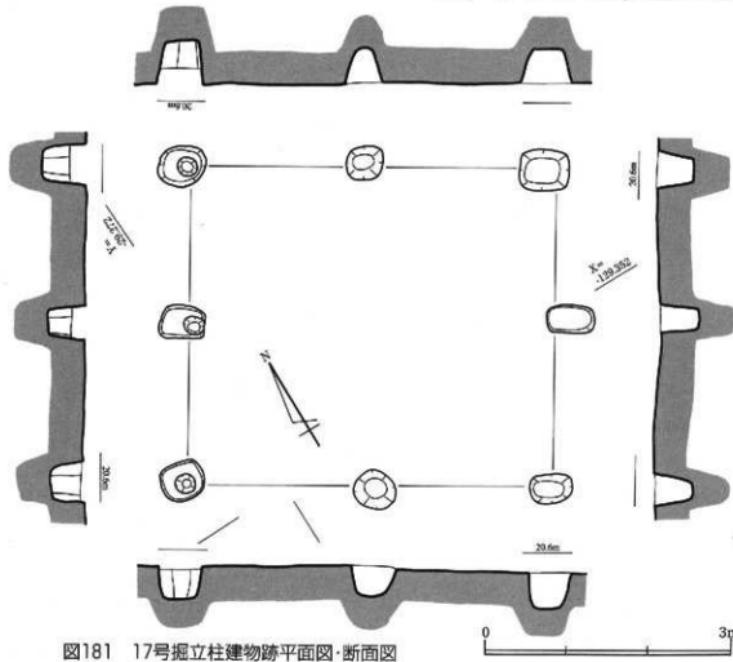
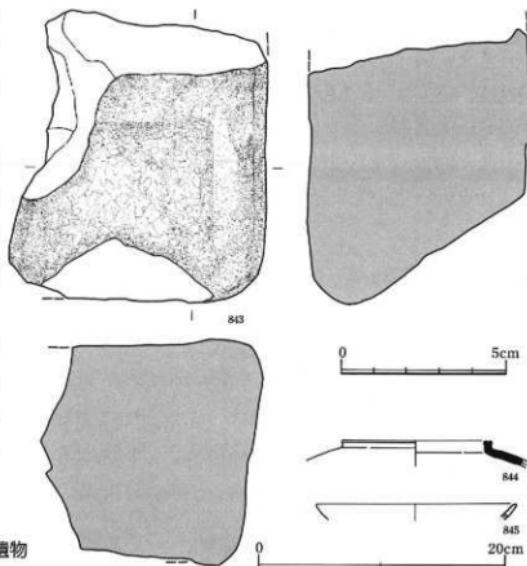


図181 17号掘立柱建物跡平面図・断面図

柱穴から、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦、柱根等が出土し、図180に図化できたものを示した。843は砥石である。図示した面が使用されている。玢岩。844は須恵器の短頸壺、845は黒色土器梶の破片である。

17号掘立柱建物跡（図181） 17号掘立柱建物跡は99-1調査区、K7-6-D13-e・f6・7で検出した2間×2間の掘立柱建物跡である。11号掘立柱建物跡と重複し、13号掘立柱建物跡の北東3.5mの位置に併行して検出した。主軸の方向はN-57°-Wである。検出面の標高は20.4mを測る。

柱穴は、長方形を呈する掘形を持つものが多く、南東妻面中央柱穴0.3×0.6m、東角柱穴0.6×0.8mを測る。北東柱穴では径0.3mを測る柱痕跡を検出することができた。柱穴の深さ0.35～0.55mを測る。梁間3.9m、桁行4.5mを測り、床面積は約18m²である。

柱穴から、弥生土器、須恵器、土師器の小片が出土したが、図化しえなかった。

12号掘立柱建物跡（図182・PL.47） 12号掘立柱建物跡は99-1調査区、K7-6-D13-f8・9で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。13号掘立柱建物跡の北西側に3.5m離れ、主軸を捕えて並ぶ。主軸の方向はN-53°-Wである。検出面の標高は20.4mを測る。

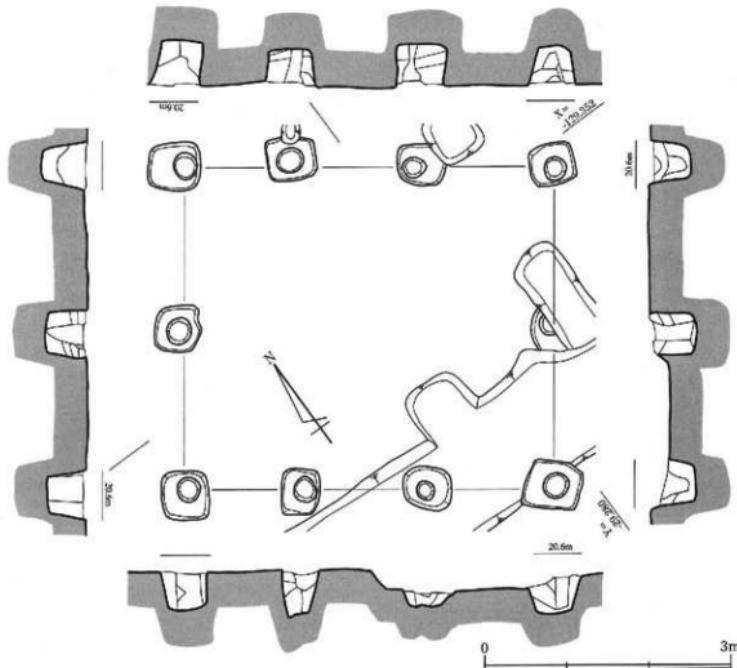


図182 12号掘立柱建物跡平面図・断面図

柱穴は、一辺0.4~0.7mの方形を呈する掘形で、深さ0.5~0.6mを測る。掘形内から径0.2~0.35mを測る柱痕跡を検出した。埋土は地山の黄色粘質土と包含層と同じ暗褐色粘質土の互層に積み重ねられているのが観察され、比較的よく突き固められていた。梁間3.9m、桁行4.5mを測り、床面積は約18m²である。

柱穴から、弥生土器、古式土師器、土師器の小片が出土したが、須恵器は出土しなかった。図化しえる資料はなかった。

13号掘立柱建物跡（図183・P L47） 13号掘立柱建物跡は99-1調査区、K7-6-D13-f8で検出した3間×3間の掘立柱建物跡である。12号掘立柱建物跡の南東、17号掘立柱建物跡の南西に位置し、各々の距離は3.5mを測り、主軸を揃えて並ぶ。主軸の方向はN-54°-Wである。検出面の標高は20.4mを測る。

柱穴は、桁行側と妻側で大きさが異なる。桁行側の柱穴は一辺0.7~0.9mの方形を呈し、深さ0.3~0.5mを測る。妻側の柱穴は一辺0.5~0.7mの方形を呈し、桁行側より一回り小規模である。掘形内から径0.2~0.4mを測る柱痕跡を検出した。埋土は地山のブロックが混じった灰褐色土の

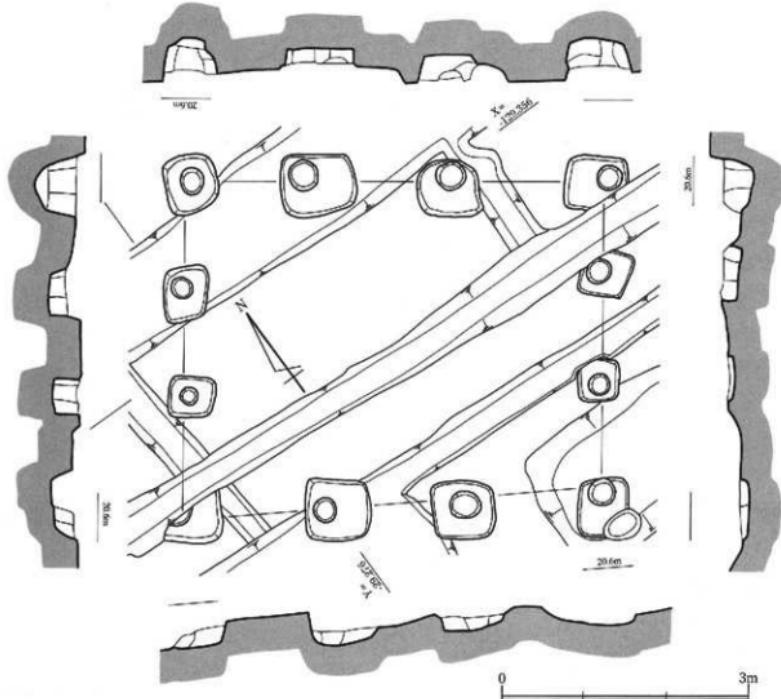


図183 13号掘立柱建物跡平面図・断面図

単層である柱穴が多い。梁間3.8m・4.1m、桁行5.2mを測り、床面積は約21m²である。

柱穴から、弥生土器、古式土師器、土師器が出土したが、図化しえなかった。

上記3棟の掘立柱建物跡は、主軸をほぼ同じ方向に向ける。特に1・2号・1・3号掘立柱建物跡は、柱通りを合わせた、規格に基づく建物配置を取ると考えられる。調査地全体を見渡して、方形の掘形を持ち、方向を同じくする掘立柱建物跡は他に1・7号掘立柱建物跡以外に無く、建物の性格等を類推することが難しい。

15号掘立柱建物跡（図184）

15号掘立柱建物跡は99

-3調査区、K7-6-D13-e1・2

で検出した2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-31°-Wである。検出面の標高は20.5mを測る。

柱穴は、径0.3~0.6mの円形を呈し、深さ0.1~0.2mを測る。埋土は黒褐色土の单層である。梁間3.8m、桁行4.0mを測り、床面積は約15m²である。

柱穴から、弥生土器と土師器の小片が出土したが図化しえなかった。

16号掘立柱建物跡（図184）

16号掘立柱建物跡は99

-3調査区、K7-6-D13-e・f3・

4で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-56°-Eである。検出面の標高は20.4mを測る。

柱穴は、径0.25~0.35mの円形を呈し、深さ0.2~0.3mを測る。梁間3.3m、桁行3.5mを測り、床面積は約12m²である。

遺物は出土しなかった。

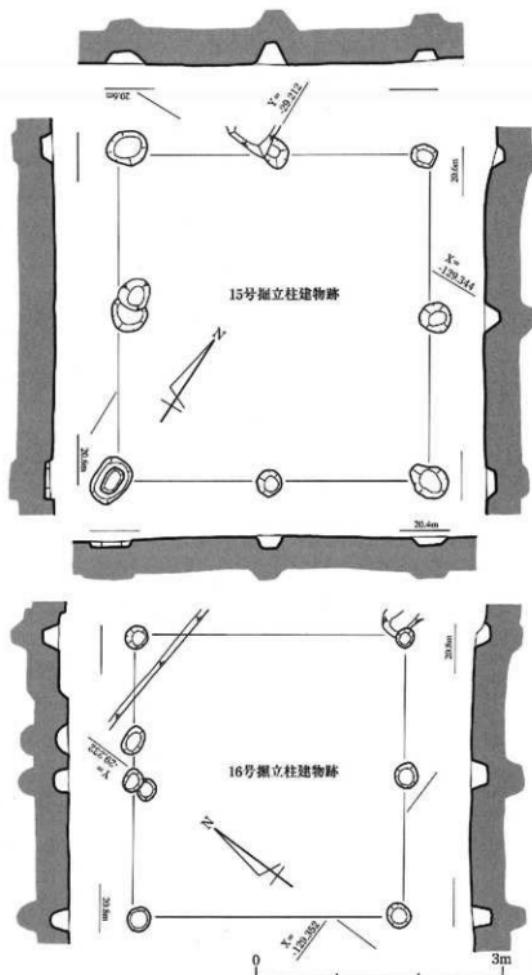


図184 15・16号掘立柱建物跡平面図・断面図

その他の遺構（図170） 竪穴住居跡、掘立柱建物跡以外の歴史時代の遺物を出土する遺構は、土坑、ピット、溝等があり、図中に赤色で示した。また、図化できる遺物を図185に示した。（赤色で示す遺構名は歴史時代のものであるが、番号を枠で囲んだ遺構は、古墳時代中期で説明した遺構を示す。）

SD5053は、先述した飛鳥時代の遺構である。この遺構を境に北側ではこの時期の遺構が検出されず、南側では竪穴住居跡等の遺構が検出されることから、飛鳥時代の区画溝と考えることができる。

飛鳥時代の遺構は、17号竪穴住居跡の南側で検出した土坑、20号竪穴住居跡から南東方向に延びるSD5137、この溝が到達するSD5366がある。

SD5137 SD5137は、99-4調査区、K7-6-D13-b・c7で検出した溝である。20号竪穴住居跡の南東コーナー部で壁溝につながり、直線的に南東方向に延び、SD5366に流れ込む。幅0.3~0.5m、深さ0.2m、延長約8mを測る。検出面の標高は竪穴住居跡側で20.3m、反対側で20.2mを測る。土師器の小片が出土したが図化しえなかった。20号竪穴住居跡に伴う排水溝と考えられる。

SD5366 SD5366は、99-1調査区、99-4調査区、K7-6-D13-b・c7で検出した溝である。幅0.8~1.2m、深さ0.3mを測る。検出面の標高は20.2mを測る。南は18号方形周溝墓から始まり、調査区外に延びる。地形の低い方向に向かって延びる排水を目的とした溝と考えられる。図185-851の須恵器壺が出土した。

平安時代の遺構は、11号掘立柱建物跡を始めとして、溝、土坑、ピットが散在する。

SD5460 SD5460は99-4調査区、K7-6-D13-a4~7で検出した東西方向に延びる溝である。幅0.3~0.6m、深さ0.2m、延長約30mを測る。検出面の標高は20.4~20.5mを測る。東側は23号方形周溝墓に達せず、西側は方向を南に向け搅乱で途切れる。平安時代の須恵器、平瓦の破片が出土したが図化しえなかった。

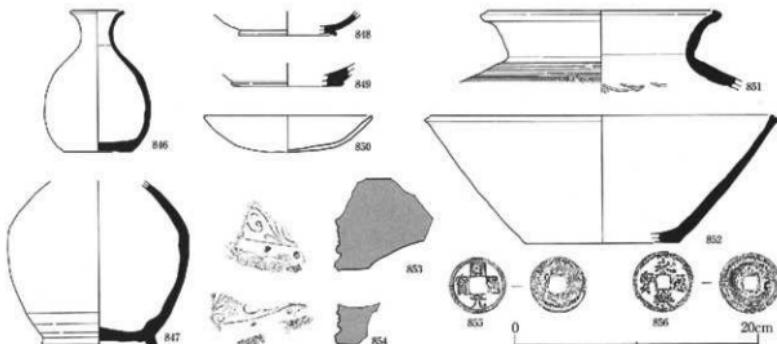


図185 歴史時代遺構・包含層出土遺物3（銭貨は1:2）

SD5358 SD 5 3 5 8は99-4調査区、K7-6-D13-c7で検出した溝である。幅0.4m、深さ0.1mを測り、直角に折れ曲がる。検出面の標高20.3m。846の須恵器壺が出土した。底部は同軸系切りである。

SD3424 SD 3 4 2 4は18号方形周溝墓の周溝である。南西周溝の最上層から853の軒平瓦が出土した。

SK2483 SK 2 4 8 3は99-1調査区、K7-6-D13-f7で検出した土坑である。11号掘立柱建物跡の南東に位置し、2.5×3.0m、深さ0.15mを測る楕円形を呈する。検出面の標高20.4m。須恵器、土師器、瓦が出土したが図化しえなかった。

SK2259 SK 2 2 5 9は99-1調査区、K7-6-D13-g7で検出した土坑である。0.8×1.4m、深さ0.1mを測る長方形を呈し、検出面の標高は20.3mを測る。埋土から848の須恵器碗が出土した。

SK2939 SK 2 9 3 9は99-1調査区、K7-6-D13-d8で検出した土坑である。0.5×0.8m、深さ0.15mを測る楕円形を呈し、検出面の標高は20.35mを測る。埋土から847の須恵器壺が出土した。

P5172 P 5 1 7 2は99-4調査区、K7-6-D13-b6で検出したピットである。0.25×0.4m、深さ0.15mを測る楕円形を呈し、849の須恵器壺が出土した。検出面の標高20.4m。

中世の遺構は、土師器皿850を出土したP 5 3 2 5以外には検出できなかった。P 5 3 2 5は、99-4調査区、K7-6-D13-c7で検出し、一辺0.4m、深さ0.25mを測る方形を呈する。検出面の標高は20.3mを測る。

図185-852・854～856は包含層から出土した遺物である。98-1調査区で検出した堅穴住居跡群と方形周溝墓群の間から、99-4調査区で検出したSD 5 3 6 6が調査区外に延びる付近に向けて幅約20mの浅い開析谷を検出し、周りと比べやや低くなった所に古代、中世、近世の包含層が残されていた。

852・854はK7-6-D13-c7・8の第Ⅲ層から出土した遺物である。852は東播系の捏鉢、854は軒平瓦である。855・856はK7-6-D13-c8の第Ⅱ層から出土した銭貨である。855は開通元寶、856は永樂通寶で、初鑄年代の異なる2点が鋳着した状況で出土した。

調査区南西部の遺構（図186） 99-1調査区の南西側を示した遺構図である。歴史時代の遺物を出土した遺構を赤色で示した。

本図の範囲では、1棟の掘立柱建物跡を検出した。図に示すようにこの14号掘立柱建物跡の周辺には方形の掘形を有する柱穴を多数検出し、多くの掘立柱建物跡が存在したものと考えられるが、他に建物を復元することができなかった。

また平安時代の土坑SK 1 6 2 5が検出される遺構面（地山）の標高は、20.2～20.3mを測る。この土坑の南側から地山が一段下がり、調査区南側の遺構検出面の標高は20.0m、南西端では



図186 歴史時代遺構平面図4

19.75mを測る。また、道路1本南側に離れて調査を行なった99-2調査区の地山面の標高は19.1mを測る。このことから、99-1調査区の南端で検出した地山の落ち始めの段は、穂谷川が形成した段丘崖のラインを示すものと考えられる。

14号掘立柱建物跡（図187・PL46） 14号掘立柱建物跡は99-1調査区、K7-6-D13-h-i8・9で検出した3間×5間の掘立柱建物跡である。主軸の方向はN-85°-Wである。検出面の標高は20.3mを測る。

柱穴は、一辺0.4~0.6mの方形を呈する掘形で、深さ0.1~0.4mを測る。掘形内から径0.2~

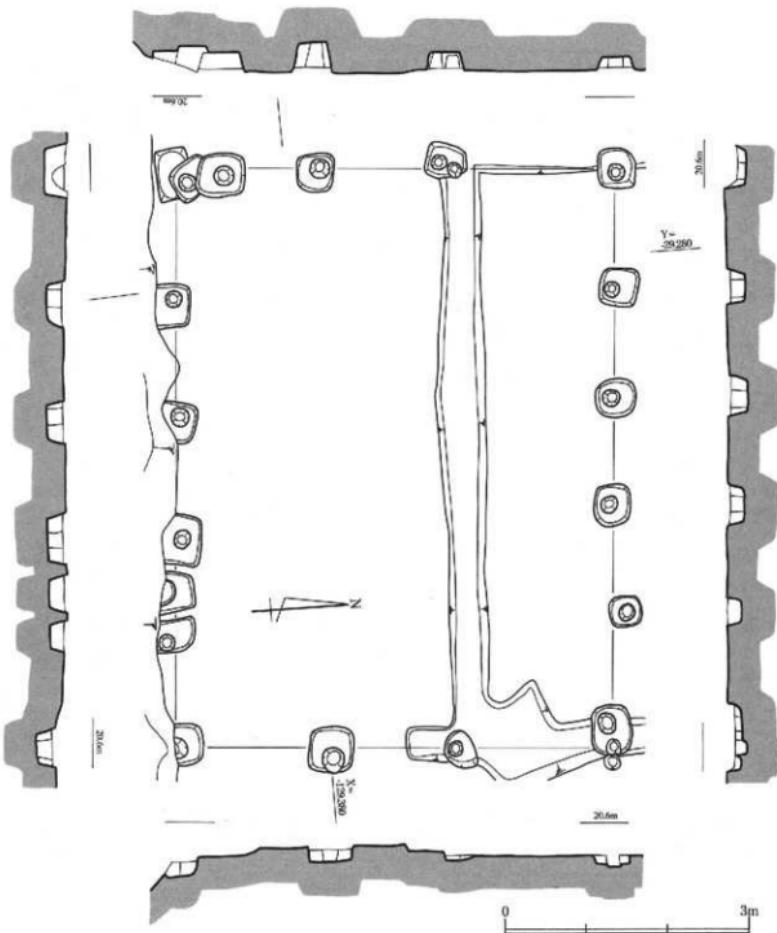


図187 14号掘立柱建物跡平面図・断面図

0.3mを測る柱痕跡を検出した。埋土は黒褐色土あるいは灰黄褐色土の単層である。梁間5.4m、桁行7.1mを測り、床面積は約38m²である。今回の調査で検出した掘立柱建物跡の中で、柱間、床面積ともに最も大きな建物である。

遺物は、3ヶ所の柱穴から図188に示す土師器の皿857、小型の壺858、壺859が出土し、固化しえなかったものに少量の弥生土器、土師器片がある。

SK1625 (図186) SK1625は99-1調査区、K7-6-D13-i8で検出した土坑である。14号掘立柱建物跡の南東角に一部重複し、その南東側に位置する。平面形は南北に主軸を置く楕円形を呈し、5.3×10.8m、深さ0.15mを測る。検出面の標高は、北側で20.3m、南側で20.2mを測り、土坑底の高さも、北側で20.2m、南側で19.8mと南に向かって傾斜する。

断面形状は極浅いU字状を呈し、埋土は灰黄褐色土である。埋土中から平安時代の遺物が多量に出土した。

出土遺物 (図189-860~876) 860~864は縁釉陶器である。860は皿の口縁部の破片、861・862は楕の口縁部の破片である。863・864は楕底部の破片で両者とも貼付け高台である。何れも胎土は精良で灰白色を呈し、釉は浅い黄緑色を呈す。

865は灰釉陶器楕の底部、866は須恵器壺の口縁部である。

867~869は黒色土器A類の楕である。867の口径15.0cm、869の口径14.8cm、器高4.2cm、高台径8.2cmを測る。

870~874は土師器である。楕870の口径15.9cm、器高3.0cm、871の口径14.9cmを測る。杯

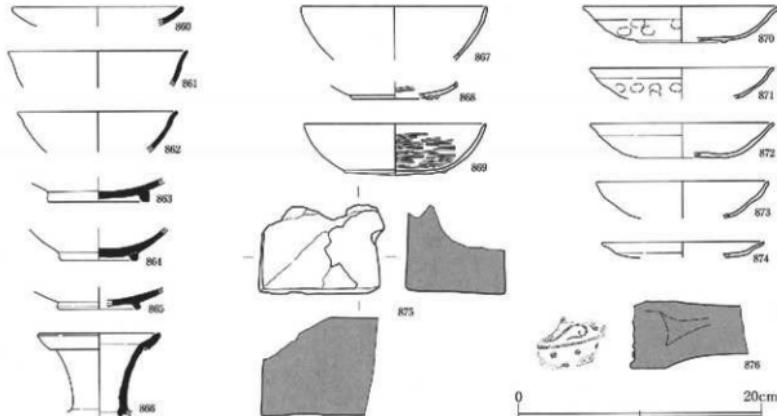
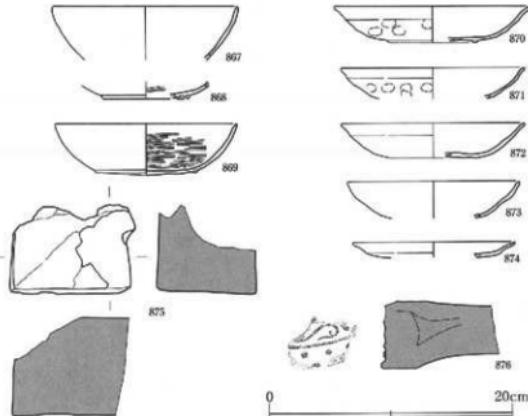


図188 14号掘立柱建物跡出土遺物



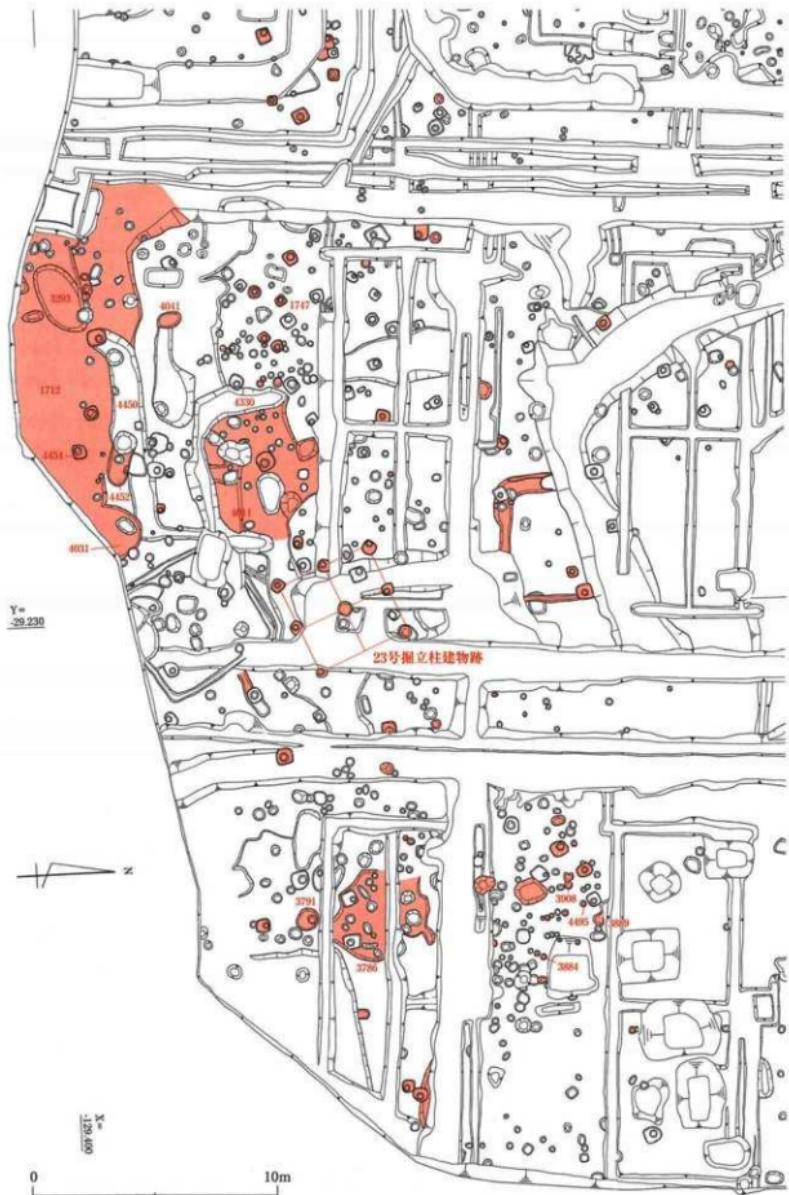


図190 歴史時代遺構平面図5